細菌戰黑書

アメリカ軍の細菌戰爭

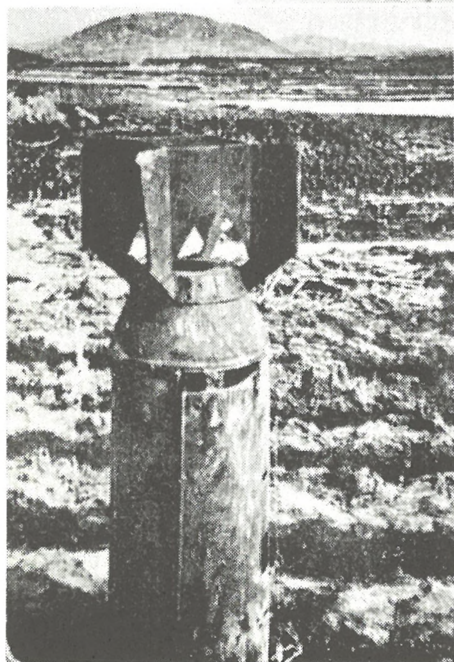
国際科学委員会
報　告



蒼　樹　社



（右）アメリカにおける細菌工場——ライフ誌より

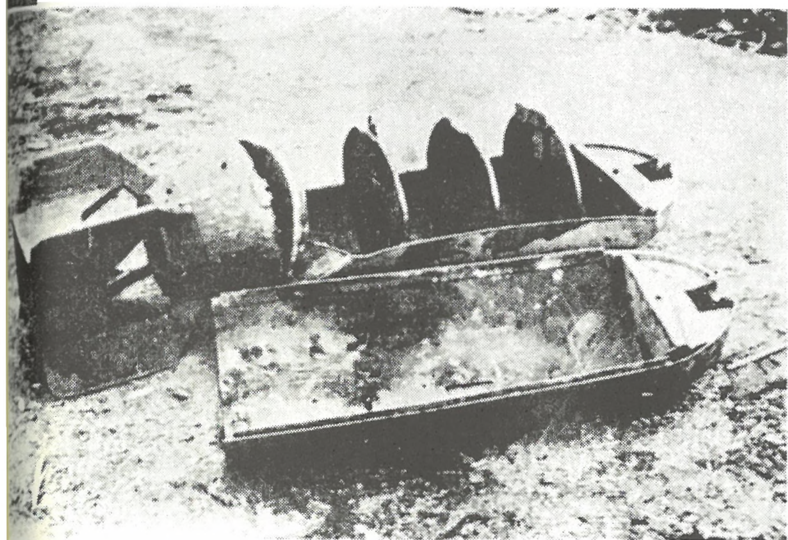


（左）北鮮平原郡青山面の普武里と金成里、漢川方面カリセ里一帯にばらまかれた細菌爆弾



（上）　細菌爆弾の落ちた跡

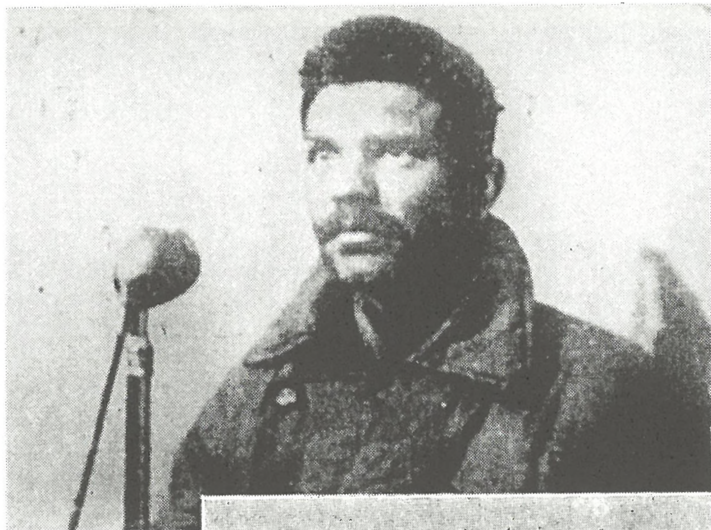
（下）　二つに割れた細菌爆弾





（上） 防疫班に情況をきく調査団

（下） 細菌の附着した細菌爆弾の破片

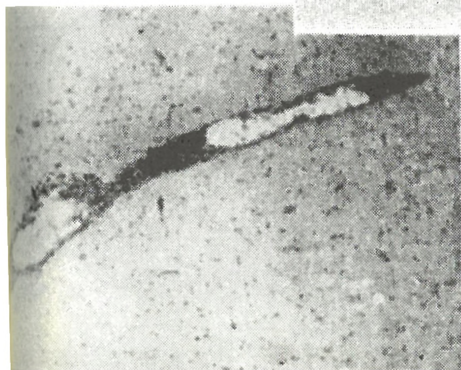


（右）細菌爆弾投下者、米第五空軍部隊所屬、ジョン・クイーン中尉

and press, who picture the chinese as barbarian
criminals, and who lead American troops to believe th
if captured, they will be shot, or worse. I am begi
ning to see very clearly just who is the peace-lover
and who is the warmonger responsible for this inhum
war, and I am determined to struggle for peace agai
Wall Street capitalism, to clear my conscience of my p
errors. I am filled with determination to join th
peace-loving camp, and with the determination
become a new man.

Kenneth L Enoch
8 April, 1952.

（右）おなじくケニス・エノック中尉の供述書



（左）顕微鏡で拡大された細菌

もくじ

付録

細菌戰黑書

国際科学委員会報告

片山さとし訳

まえがき

一九五二年のはじめ頃から、朝鮮と中国の領土で、すこぶる異常な性質の現象がおこつているので、これらの国の人民と政府は、じぶんたちが細菌戦争の攻撃目標になつているのだ、と主張するようになつた。

世界各国の人民は、こういう戦争のやり方を否認する意志、いや、それどころか憎悪する意志を、ずつと前から明らかにしてきていただけに、そういう事態がどんなに重大なものであるかがよくわかつた。そういうわけで、国際科学委員会をつくつて、現地の証拠をしらべるべきであるということになつた。

委員会のメンバーは、じぶんたちの責任がどんなに重いかということを自覚していたので、先入観から免れるためにあらゆる努力をはらい、じぶんたちの知つているかぎり一番厳密な科学的原則にし

たがつて、その調査をおこなつた。いまここに、その活動のくわしい内容と、委員会のたどりついた結論とを、報告書として読者のまえに提出する。この報告書をつくる仕事には、八つの国語をつかう人たちが参加した。だから、もしそれが優雅さにかけていたとしても、あらゆる大陸の人びとにとつて、明快で、あいまいなところがなく、わかりやすくせねばならなかつたことを、読者の方は思いだしてくださることと思う。

委員会の組織と活動

朝鮮民主人民共和国の外相朴憲永氏は一九五二年二月二十二日、また中華人民共和国外相周恩来氏は三月八日、アメリカ側が細菌戦をやつていることに公然と抗議した。二月廿五日には、中国人民世界平和擁護委員会の主席郭沫若博士が、そのことについて世界平和評議会にアッピールをよせた。

三月二十九日、郭沫若博士は、オスローでひらかれた世界平和評議会の執行局会議の席上で、同伴してきた中国代表たちの援助をうけ、また朝鮮代表李箕永氏の立会いのもとで、執行局のメンバーや

その他の国民代表に、問題となつている現象について、たくさんの情報をつたえた。郭博士の言明によると、国際赤十字社委員会は、政治的影響力をうけることを十分に免れていないので、偏見のない現地調査をする能力がないと、中国と(北)朝鮮の政府は考えているとのことであつた。こういう反対論はのちになつて、国連の専門的機関である世界保健機構にもむけられた。しかし、朝中両国政府は、公平で独立的な科学者の国際的団体を中国にまねき、両国政府の主張の基礎になつている事実を調査させることを、心から希望していた。それに参加する科学者たちは、平和をまもるために活動している組織に関係があろうとなかろうとかまわないが、しかしその人たちは当然人道主義的事業に貢献しているために有名な人物でなければならないというのであつた。そして、この団体の使命は、両国政府の主張が正しいか、正しくないかを判定することであつた。徹底的な討論をつくしたのち、執行局は、そういう国際科学委員会の形成を要求する決議を満場一致で採択した。

そこで、オスロー会議がすむとすぐ、この問題に関係のある分野でできるだけ有名な、ヨーロッパと南アメリカとインドのひじようにたくさんの科学者たちから、この団体に参加する承諾をえるように努力をはらつた。仮承諾の通知がまとまるとすぐ、中国科学院近代物理学研究所所長であり中国平

和委員会の一メンバーであり、オスロー会議後科学委員会を組織するためヨーロッパにのこつていた錢三強博士は、中国科学院と中国平和委員会の主席郭沫若の名前で招請状をはつした。この委員会にとつて最低限度どうしても必要なメンバーの数が、六月中旬までにそろつたので、一行はただちに中国にむかつて出発した。

国際科学委員会は、六月二十一日と二十八日に北京につき、中国科学院と中国平和委員会の代表からあたたかい歓迎をうけた。そのメンバーはつぎのようであつた。

アンドレア・アンドレーン博士（スウエーデン）、ストツクホルム市立病院管理局中央臨床研究室主任。

ジャン・マルテル氏（フランス）、農学士 Ingenieur-Agricole. グリニョン国立農業大学動物生理学研究室主任、前アンラ畜産技師、イタリアとスペインの牧畜学会通信員。

ジョセフ・ニーダム博士（イギリス）、王立協会員、ケンブリッジ大学生化学サー・ウイリアム・ダン講師、元重慶駐在イギリス大使館参事官（科学）、前ユネスコ自然科学部長。

オリヴイエロ・オリヴオ博士（イタリア）、ボローニヤ大学部人体解剖学教授、前トリノ大学一般生物学講師。

サムエル・B・ペツソア博士（ブラジル）、サン・ポーロ大学寄生物学教授、前サン・ポーロ州公衆保健局長、レシフエ、パライバ両大学医学部名誉教授。

N・N・ジューコフ＝ヴエレジニコフ博士（ソ連）、ソ連医学学士院の細菌学教授兼副院長、細菌戦参加のため起訴された元日本軍軍人のハバロフスク裁判の主任医学鑑定人。

はじめ参加を予想されたある有名な科学者たちが来れなかつたのは、ひじように残念であつたが、委員会は到着をまつ最後の日を七月十五日ときめた。しかし、のちに、

フランコ・グロチオシ博士（イタリア）、ローマ大学微生物学研究所助教授。

は、委員会が瀋陽（奉天）からかえる直前の八月六日北京に着いて、あたたかい歓迎をうけた。同氏はそのため、委員会の仕事にさいごの三週間しか参加できなかつたので、列席顧問の地位につき、その資格で仕事の進行に大きな援助をあたえた（付録四四）。さいごに、北京で参加したのは、

錢三強博士（中国）中国科学院近代物理学研究所所長。

で、同氏は郭博士の代表として、ヨーロッパから北京まで委員会に同伴してきた。同氏は委員会の満場一致の招請をうけて、中国当局から連絡員として委員会につけられた。連絡員の地位は、委員会の審議のなかで、発言権はもつていたが、決議権をもたなかつた。この科学者の団体には、つぎの人たちもふくまれていた。

N・A・コワルスキー氏、ジューコフ＝ヴエレジニコフ氏の通訳秘書、また

S・B・ペッソア夫人、ペッソア博士の通訳秘書として。

国際委員会は、中国側の設けた接待委員会の援助をうけた。それは、つぎの人たちから成つていた。

主席

李徳全夫人、中国赤十字社総裁、世界平和評議会評議員

副主席

廖承忘氏、世界平和評議会評議員

賀誠医師、中華医学会名誉理事長

秘書長

宮乃泉医師、上海医学院院長

副秘書長

計蘇華医師、中華医学会秘書

専門家連絡員

鐘恵瀾博士、北京人民医院院長、中国協和医学院内科臨床教授

呉在東博士、南京大学医学院病理学教授

方　綱教授、中央衛生院微生物学副研究員、北京

朱弘復博士、中国科学院昆虫研究室副主任

厳仁英博士（北京大学医学院産科婦人科助教授）

楊士達博士（上海震旦大学医学院公共衛生学教授兼院長）

接待委員会のメンバーの大部分は、危険と骨折をいとわず、科学委員会の旅行に同伴して、必要のおこるごとにあらゆる連絡の仕事をする準備をたえずととのえていた。ときには、そのあるものは、ほかのたくさんの中国科学者や医師といつしよに、オブザーバーとしてかまたは証拠を提出するために、科学委員会の会議に出席した。委員会は、これらすべての同僚たちに感謝したいとおもう。かれらの科学上の業績と誠実さに、委員会はふかい尊敬の念をいだいた。

委員会の会議のやり方についていえば、議長の役目は、メンバーのあいだでほとんど順番の廻り持ちでやつた。マルテル氏は科学書記にえらばれた。委員会の第一回会合は、六月二十三日北京でひらかれたが、ひらかれたすべての会合を月日順にかんたんに概括したものは、付録（一）のなかにいれてある。

委員会の一般的なやり方についていえば、委員会は、中国中央衛生部、瀋陽（奉天）東北区衛生部

それに平壌の朝鮮保健省の部長や大臣やその秘書課ときんみつな連絡をとつて活動したといえる。委員会は、もちろん、これらの科学者ぜんぶから援助をうけたが、それは、これらの人たちの仕事の分野が、委員会のあつかう問題と関係があつたからである。さきに名前をあげた人たちのほか、それぞれ中国東北人民政府衛生部長と副部長である王斌博士と白希清博士に、委員会はお礼をのべたいとおもう。両博士は、じぶんの力で提供できるかぎり、あらゆる情報を委員会に提出するため少しの骨おしみもしなかつた。（北）朝鮮保健大臣と次官である李炳南博士と魯振漢博士にもおなじくお礼を申しのべる。しかもこのお礼のなかには、これらの有名な医官たちが、はげしい空襲下のたえまない危険と不便をおかしながら、ひじように冷静な態度でじぶんたちの仕事をしていたことにたいする尊敬の念をこめるほかない。

この点では、また、委員会のメンバーは、その朝鮮訪問中にさいわい会うことのできた朝鮮の細菌学者やその他の専門家たちが、みんなその祖国に献身的な奉仕をつくしていたのにたいして、ふかい尊敬の念をはらいたいと思う。委員会は、その職務をはたしている最中に命をすてた朝鮮の一番すぐれた三人の細菌学者に敬意を表する。委員会はまた、陳文貴博士、魏曦博士、何琦博士のように、朝

鮮の防疫検験隊に勤務していた著名な中国専門家の私心のない奉仕にたいする尊敬を記録にとどめておきたいとおもう。これらの人たちは、中国のはるか遠い地方にあるじぶんたちの研究室のものしずかな快さに別れをつげるべきときがきたと考え、細菌防禦の前線にでて、朝鮮の同僚たちとあらゆる困難と危険をともにしていたのである。

委員会の会合は、ときによつてその性格がかわつた。あるときは、メンバーたちが秘密会議で何時間も科学上の問題を討論したし、またある場合には、中国の科学専門家が出席したりすることもあつたし、さらに別のときには、あらゆる職業のたくさんの目撃者の証言をきくため広い部屋が必要なこともあつた。証人のなかには、捕虜になつた諜報員一人(付録三六)と四人の飛行士(付録三七―四〇)があつた。ときには、二人か三人の小委員会を任命して、中国の同僚たちと連絡をとりながら、特殊な問題を調査させ、それについて委員会に報告させることもあつた。またときには、一日中を北京、瀋陽、平壌の実験室ですごしたこともあつた。それらの実験室では、中国と朝鮮の科学者たちが、かれらの研究の結果をひじようにくわしく説明してくれた。また、必要のあるときには委員会のメンバーは、北京や瀋陽にあるたいへんりつぱな図書館を利用することもあつた。

中国や朝鮮の専門家がととのえたいろいろの実例についての資料は、この報告書の付録の大部分をしめている。それらの資料については、以下の諸節でかんたんに説明する。しかし、これらの資料は、偶然ひよつこり見つかつたというようなものではなく、もつともつと大量な材料のなかの見本にすぎないことを理解していただきたい。ここに提出した資料は、朝鮮の資料よりもむしろ中国の資料が多くなつた。その理由は、朝鮮の人たちは、はるかに困難な事情のもとで仕事をしていたし、そのため委員会としても、わりとみじかい間――それも丁度とくに困難な時期に――だけしか朝鮮に滞在することができなかつたからである。

それと同時に、委員会は、今年の前半にプラーグから発表された文書の基礎になつたオリジナルな科学的材料をよく知つておく必要があると考えた。できれば、それらの文書が正しいかどうかを判定する必要があつた。じじつ、これらの文書を浄化する必要のあつたことは、のちに明らかになつた。つまり、それらの文書の中には、のちに撤回された誤解や、暫定的鑑定、たんなる翻訳のまちがいなどがあつた。これらの点については、ひじようにたくさんの仕事をしたし、その結果については付録のなかにしめしてあるが、委員会の一般的な結論は、プラーグを通じて流布されたこれまでの調査団

の報告書の中のおもな主張が正しかつたことを、事実上みとめた。

委員会のやつたおもな旅行は、つぎの通りであつた。六月二十三日から七月九日までのあいだ北京で事態の大筋をときほごした後、委員会は瀋陽にゆき、十二日から十五日までそこで仕事をした。ついで、接待委員会を同伴して、鴨緑江をわたつて北朝鮮にはいり、七月二十八日から三十一日までのあいだ、空襲に邪魔されながら平壌で会合をひらいた。それから、北に引きあげたが、八月六日再び国境をわたつて中国東北区にはいるまえ、捕虜飛行士に会うため二日をついやした。この大旅行の技術的な組織は、申し分なく上出来であつたことを記しておかねばならない。

そのまえ、七月十五日と十六日とには、ほんの短い時間の旅行をしたことがある。それは、特別仕立の飛行機と汽車とジープをつかい、チチハルとラハをへて、甘南地方の諸所をおとずれたのである。これらの土地には、ペストに感染した齧歯類がばらまかれていた（付録一三をみよ）。これらの場所の位置は、内蒙古との境にそう黒龍江省のなかにある。その他の公式の旅行は、大切なものではなかつた。

この委員会のやつたような企畫に必ずつきものの語学上の困難について、いくらかのべておくことは大切である。委員会じしんのなかには、七ツの言葉をつかう人たちが参加していたが、そのメンバーの大部分はフランス語をはなし、また聞きとれることがわかつた。それで、フランス語を仕事をするときの言葉としてつかつた。ロシア語、英語、イタリア語が話されると、ただちにフランス語に訳された。中国側では、中国科学者のひじように多くが、りつぱな英語やフランス語をはなせることが、大へん仕事に役だつた。しかし、会合のときには議事録をとる関係で、中国語ではなし、それをすぐ、そしてしばしばそれぞれ別個にフランス語とロシア語と英語に訳した。フランス語の通訳には楊士達博士、丁驥氏があたり、ロシア語の通訳には楝述博士、英語の通訳には厳仁英博士があたつた。仕事が後半の段階にはいると呉恒興博士が貴重な文筆上のまた語学上の援助をあたえてくれた。委員会にはまた、そのメンバーの一人が中国語をはなしまた聞きとることができて、そのことが証人との対談のときとくに役だち、その上中国語の読み書きもできたので、そのことが文献の参照や文書の検討を容易にするという便宜があつた。もう一人のメンバーは、直接英語とロシア語とを連絡することができた。中国科学者のなかにも朝鮮語のわかる人はすくなかつたので、朝鮮では事情がもつとふくざつであつた。しかし、委員会はさいわい、すばらしい語学者である王仁変博士に手つだつてもらうこと

ができた。同博士は朝鮮語を自由にまた完全にフランス語、英語、または中国語に訳することができた。そのほかにも、朝中語通訳をつかつた。中国語を通じて、朝鮮語をヨーロッパ語の一つに訳し、またそれと同時に朝鮮語を直接ロシア語に訳することによつて、平行的な照合をすることもできた。たえず筆記の校合をやつたので、大切な点についてはほとんどまちがいがなかつたことと思う。さいごに、会合のうちのいくつかの議事は、のちの参考のために録音器で記録をとつた。すべてがそういうわけであつたから、委員会としては、委員会が中国人と朝鮮人の専門家と証人の心底を見ぬくことができなかつたのだという批判にたいして、自分自身を守ることができると考えている。

下に署名した委員会のメンバーの名前には、署名者の能力と専門分野をしめすのに適当な肩書をつけ加えた。委員会のメンバーたちがそれぞれちがつた経験をした場合には、それを骨の折れる長い討論にかけた。科学的方法についての知識と理解だけで十分ことが足るすべての場合には、めいめいのメンバーがそれぞれ平等に力をつくした。しかし、じぶんたちの専門分野からかけはなれた問題をとりあつかうときには、その問題についてほかの人たちよりも多くの能力をもつメンバーが批判的な説明をして、ほかのメンバーの確信をつくりあげていつた。こうして、この報告書は、ほんとに集団的

な著作になつた。

委員会のメンバーが自分自身で見聞きし、したがつて証人としての責任をとる事柄いがいのものについては、委員会としては、やむなく朝鮮と中国の文書にたよるほかなかつた。中国と朝鮮の医師その他の科学者の能力と誠実さを疑うべき理由はすこしもなかつたけれど、委員会としては、けつして警戒をおこたりはしなかつた。委員会は、うまずたゆまず実例の分析をやり、できるときにはいつでもオリジナルな事実に直接接触するため最大の骨折をおしまなかつた。委員会のメンバーは、政治的、道徳的、感情的影響をうけないようにたえず用心をし、その活動は、ものしずかで科学的な客観性という雰囲気のなかですすめられた。委員会がさいごに達した確信は、当然ある程度まで、委員会の対談し質問した数百人の証人が信頼できるものであることを基礎にしている。かれらの証言はあまりに簡単明瞭であり、あまりに一致していて、あまりに自主的であつたから、それに疑をさしはさむことはできなかつた。

この報告書の主文にある説明のなかに、この報告書の主張の基礎にした朝鮮または中国当局のすべ

ての文章を組みこむことは、あきらかに不可能であつた。委員会のメンバーのおこなつた個人的テスト、試験、質問などについては、そのあらましを本文のなかでのべておいた。それらすべての場合の十分に詳しいことは、付録参照と指示してある関連文書と注釈のなかに見出すことができる。

いちばん最後の付録は、ここに発表する文書のなかにその名前の出てくるすべての中国人と朝鮮人の科学者のくわしい履歴をつたえている。

文書の考證*

委員会のメンバーがはじめてあつまつた時に、かれらに利用できた文書は、朝鮮と中国の政府が発表し、プラーグの世界平和評議会書記局から、また各国にある中国当局の種々の通信機関の手で、西欧に流布された文書だけであつた。

朝鮮保健省の第一回報告（SIA／一）**は、一九五二年一月と二月の事件を扱つていただけであつ

た。そのなかにある材料は、国際民主法律家協会調査団の（朝鮮）報告書のなかでもう一度吟味された。この報告書には、朝鮮のペスト出現についての材料、それに当然のことながら、国際調査団のメンバーのおこなつた目撃証人の調査の結果がつけくわえてある。

* 本文のなかで参照を求めてあるのは、本書の付録であり、これはそのうち発表する。

**文書については、つぎの記号をつかう。プラーグ文書はＳＩＡ／、新華通信社はＮＣＮＡ／、国際科学委員会に提出された文書のうち中国のものはＩＳＣＣ／、朝鮮のものはＩＳＣＫ／。

いちばんくわしい報告書は、中国の「アメリカ帝国主義細菌戦犯罪調査団」の二つの報告であつた。この調査団は、三月中朝鮮と中国東北（満洲）の両方で調査をおこなつた。その主なものは朝鮮で仕事をした小委員会の報告で、これは四月に北京で印刷され、ＮＣＮＡ／八五（補足）に全文が発表され、その一部はＳＩＡ／三に発表されている。この報告はいちばん完全な昆虫学上の情報をふくんでいるものである。この報告が取り扱つているのとおなじ材料は、国際民主法律家によつても記述され、ふたたび北京で印刷され、その全文がＳＩＡ／八として出されているが、厳密にいつて科学上

の重大意味をもつような新しいことがらは、すこしもつけくわえられていない。

世界平和評議会書記局から意見をもとめられたあるヨーロッパの科学者たちの特別報告は、写真によつて昆虫学上の鑑定をやつており、SIA／二として公表されている。それは朝鮮と中国の両方の材料にふれている。これとおなじ材料を基礎にしている四人の中国人科学者のもう一つの報告は、SIA／一二として公表されている。

これまで出た報告をしらべたい人たちは、上にあげた順序で研究したらいいと思う。法律家調査団のメンバーがヨーロッパにかえる時（四月中頃）までには、複写したりタイプに打つたりした新しい材料が、かれらに持ちかえらせるために、ひじようにたくさん用意された。そのうちとくに重要な十件の一組は、その当時はまだ部分的にしか分析されていなかつたが、〇〇〇一から〇〇〇一〇までの数字記号をつけているので、「四ゼロ文書」とよばれている。

その他の材料は、科学的価値がたりないわけではないが、おもに法律的なものと個人的なものであ

つた。目撃者の証言は、SIA/六と一〇にまとめられているが、そのうちのいくつかは、ほかの場合にも（たとえば〇〇〇〇五）記述された実例に関するものであつた。さまざまなアメリカ捕虜と諜報員の供述はSIA/七にあつめられたが、捕虜になつたアメリカ飛行士のくわしい供述についてはたくさんの文書がつくられ（SIA/一四、一五、一六、一七、一八）、それらの供述書の原稿は、たしか五月世界平和評議会の公表した一文書のなかに、写真石版にしておさめられた。細菌戦についての新聞記事の抜粋はSIA/五にまとめてある。

第二次世界大戦中の日本軍細菌戦との關連

東アジアに細菌戦がおこつているとの主張を調査するときには、日本側が第二次世界大戦中に、中国にたいしてたしかに細菌戦をやつたという事実を、けつして無視してはならない。委員会としては、わりとよくこの問題についての知識をもつていた。というのは、委員会のメンバーの一人がハバロフスク裁判の鑑定主任であつたし、もう一人は細菌戦そのものが中国におこつていた当時、中国で公式の職務についていたごくわずかな西欧科学者の一人であつたからだ。一九四四年、この科学者は、自

分の任務の一つとして本国政府につぎのように報告したのである——はじめのうちこそ大きな疑惑を感じていたが、いくつかの地方で日本軍がペストに感染した蚤をばらまいたし、またばらまいていることを、中国軍医署のあつめた資料はあきらかに示しているように思われる、と。それで、これらのメンバーは、ふつうなら腺ペストなど発生しないけれども、そこの条件がその蔓延にすこぶる有利な土地に、腺ペストが発生した例を、かなりたくさんあげることができた。周知のように、腺ペストというものは、ふつうの状態のもとではある種のはつきりと限られた地方（たとえば福建省）にだけは発生するが、そこ以外にはひろまらないのである。

中国衛生部の文庫のなかから、一つのオリジナルな報告書が委員会に提出されたが、それは一九四一年に日本側が湖南省常徳で人工的にペストを流行させたことを取りあつかつたものであつた（付録一一、ISCC／一）。この文書は、今日でもすこぶる大切なものであり、たしかに歴史的な興味があるものである。中国側の公式記録は、この方法で日本人から攻撃をうけた県城の数を十一としるしている。つまり湘江省四、河北、河南の両省それぞれ二、山西、湖南、山東の各省それぞれ一である。人工的にばらまかれたペストの犠牲者数は、一九四〇年から一九四四年までのあいだにおよそ百人で

あつたと、今日中国側では推定している。

付録に復製したこの文書は、その上、歴史的な興味ももつている。中国軍医署は、当時この文書十部を重慶駐在各国大使館に配布したことがわかつている。ところが、一九四六年一月の有名なマーク報告によると、細菌戦の方法についてアメリカが大規模な活動をはじめたのは、まさにこの中国側報告書のくばられたのと同じ年、つまり一九四一年であつたということは、単なる偶然の一致ではなかつたにちがいない。委員会はさいわい、朝鮮で活動しているときに、常徳事件についての報告書の原文をかいた有名な伝染病専門家にあうことができて、なぜ国民党政府は、第二次世界大戦の終るまえにもはや自分の手のなかにはいつていた証拠を、あくまで追及しなかつたかということについて、その意見をきくことができた(付録一二)。周知のように、かれのかいた報告書の結論は、のちにハバロフスク裁判の被告の供述によつて十分に確認されたのである。

「細菌兵器の製造と使用のため起訴された元日本軍軍人の裁判にかんする資料」(モスクワ、一九五〇年)という出版物は、日本の細菌学者石井四郎(かれ自身は不幸なことに被告席にいなかつた)

の指導のもとにやられた実際活動についてのゆたかな情報を世界に提供した。コレラ、チフスそれにペストのような細菌を、その培養基で、しめつた菌ごとはかつて文字通り何百キログラムというふうに、一時に大量生産する技術をつかつていたことが、疑いもなく確認された。また、たくさんの鼠やひじようにたくさんの蚤を飼育するすこぶる簡単な性質の技術もつかつていた――もつとも、じつさいには、蚤しかばらまかなかつたようであるが。その上、さまざまな証人たちは、撒布方法を監督するため、中国各所の日本軍基地に、自分のいつた日付についての証拠をどしどし提出した。特別の秘密部隊（悪名のたかい「七三一」部隊）やその研究所、飛行士施設、それにロシヤや中国の愛国者がむごくも試験動物につかわれた監獄についての詳しい材料がたくさんでてきた。後でのべるように（八〇ページ）、委員会はその活動中に、ハルビンの特別工場が石井の命令でつくつた陶器「爆弾」の残りすくない見本のうち、いくつかを調べることができた。

日本の軍国主義者どもは、一般的には生物学的兵器をつかつて、特殊的には昆虫兵器をばらまいて、世界を征服しようという考えをあくまですてなかつたようだ。かれらは大連から出てゆくまえに、大学や各省の図書館にあつたあらゆる雑誌から、細菌戦にいくらかでも関係のある論文を、系統

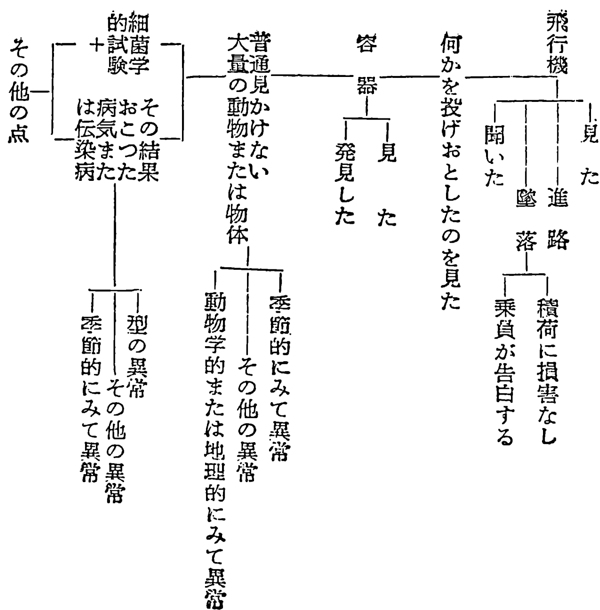
的にひきさいて持つてかえつた。朝鮮や中国東北（満洲）で細菌戦がやられているとの主張が、一九五二年のはじめ頃に出はじめるまえ、新聞が引つずき二回にわたつて石井四郎の南鮮訪問を報道したこと、その上かれが三月またも南鮮にやつてきたことを忘れてはならない。日本の占領軍当局はかれの活動を奨励しているのかどうか、アメリカ極東軍司令部はもともと日本で考えだした方法をつかつているのかどうか、それは委員会のメンバーの心から、ほとんどはなれさることのできない疑問であつた。

委員會の採用した事件分析の方法

事柄の性質上、細菌兵器をつかつたかどうかということは、立証がことのほかむつかしい。それを立証するかんぜんな証拠としては、たとえば、飛行機が墜落したとき細菌に感染した生物体が無事にのこり、その乗員たちがただちに、その細菌兵器使用の行動をみとめるというようなことが必要である。しかし、こんなことは、いろいろな理由からみて、とてもおこりそうにないことはあきらかである。

る。だから、さまざまな事実を部類わけして、一つの首尾一貫した（事件の）ヒナ型のなかに組みこむ方法を考えだし、それらの事実がおたがいに相手方を説明しあつて、事件の具体的な姿をつくりあげることができるようにする必要がある。そこで委員会が考えまた活動する上で、まず必要になつたのは、ある種の図式であつて、その図式は一つ一つの事件の調査をやる場合に研究せねばならぬ事実を、はめこむ枠として役立つようなものでなければならなかつた。

理想的な条件のもとで、一つ一つの事実が、かならずその中にふくまれるような図式（つまりヒナ型）は、つぎのようであつた。


飛行機
見た
進路
墜落
聞いた
積荷に損害なし
乗員が告白する
何かを投げおとしたのを見た
容器
見た
発見した
普通見かけない大量の動物または物体
季節的にみて異常
その他の異常
動物学的または地理的にみて異常
細菌学的試験
＋
その結果おこつた病気または伝染病
型の異常
その他の異常
季節的にみて異常
その他の点

もちろん、こういう型に完全にあてはまるような事件は、めったにあるものでないし、あるいはけっしてないかも知れない。とはいえ、もはや細菌戦のやられていることのりっぱな確証としてもいいくらい、この型にちかいような実例はある。この方法でやると、細菌兵器をつかった人たちの活動を元通りに組みたて細菌兵器のあたえた効果をあきらかにすることができる。委員会はそういう理想的な型のもっている論證性をいちばん多くそなえているように組みあわさっている事実のあつまりに、とくべつの注意をはらった。数多くの型（の事件）を比較対照すれば事実が一般的にどのように組みあわさっているかがわかるが、その組みあわさり方をしらべれば、事態の全体はしぜんと明らかになるものである。（下記一〇〇ページをみよ）

プラーグ文書の昆虫学的資料

委員会が北京で活動をはじめたときに、その前にあらわれたさいしょの仕事の一つは、プラーグ文

構が基礎にしている科学上の材料の系統的な検討であつて、この活動のさいしよの一面は、中国科学院の中国科学者やその鑑定に責任をおつた学者団体と協力して、昆虫学的証拠の表をつくることであつた。委員会は、委員会がこんどの仕事にあたる高い能力をもつていることに、少しの疑もないという意見を、たちまちもつようになつた（付録八）。その上、委員会には敏速な相互貸付制をもつた広汎な図書館をつかう便宜があるし、各所で蒐集した昆虫は秩序正しくりつぱに保存されている。どうにもならないただ一つの困難は、中国という亜大陸にいるたくさんの昆虫群の系統的な分類が、もはや半世紀もかかつてやつているのに、まだ十分にわかつていないことであつた。だから、新しい種類の昆虫が外から持ちこまれたのだという主張がある場合にも、はたしてそれがみんなその通りであるかどうか断定できなかつた。それで委員会としては、これこれの場合にはこれこれの昆虫の種類が、いまそれらが大量にあらわれている地域に、これまで存在したことは、いままでのところすくなくとも記録されていない、という事実で満足するほかなかつた。

アメリカの飛行機が通過した後で発見された異常な昆虫の大群の見本として、中国専門家のところに送られてきた昆虫がどんな種類に属するかは、一つの表にまとめておいた（付録八）。そのなかに

は、九種の双翅類（六種の蠅、三種の蚊と蚋）、一種の積翅類、一種の弾尾類、一種の微翅類、三種の直翅類それに二種の蜘蛛（蜘蛛類）があつた。後でのべるように標本虫の一種をあわせて合計十八種になつた。

これまでの細菌文書（たとえばＳＩＡ／四）がヨーロッパであたえたそもそもの印象の一つは、アジア大陸のこの地方ではいままで生存することが知られていなかつた、種だけではなく属にさえ属する節足動物が発見されているというのであつた。このことは確認されなかつた。とはいえ、三つの場合にはこの点であきらかに変則な現象があつた。採集されたたくさんの昆虫群のなかからたびたび見つかつたヒレミイア Hylemyia 種（黒蠅 anthomyiid fly）は中国東北でふつうにいる四種の蠅のどれとも、また中国各地でこれまで記録されている十五種のどれとも同じでないことがわかつた。しかし、その属には、世界の各地をいれると約六百の種があり、それら全部のほんとの棲息地はまだ十分にわかつていない。おなじく、糞蠅 sun-flies（Helomyza modesta; Meigen）が見つかつたが、これもこれまで中国で記録されているこの属のどの種ともたしかに一致しなかつた（付録八）。それとまつたく同じことは蚋（Orthocladius）についてもいえる。すべての証拠品をしらべる場合には、動

物学や地理学から見ての事実のくいちがいに適当なウェイトをおかねばならない。

それはともかく、動物地理学の面よりも変則状態がはるかにひどかつたのは、生態学の面であつた。さまざまな種がもともとこの地域にいたにせよいなかつたにせよ、それらが今年のはじめの三カ月間に、ひじようにたくさんあらわれたのを見かけたという事実こそは、たしかに奇妙この上もないことであつた。というのは、その頃はまだ、中国の北部や東北それに朝鮮の地上には、雪がつもつていたからだ。委員会は、あらゆる職業のひじようにたくさんなふつうの男女が、それらの大群を見た（そして、できるかぎり早く殺した）のだということを、立証するのには、すこしの困難も感じなかつた。今までしらべた十八種のうちすくなくとも十二種以上は、その出現が季節的にみてたしかに変則であることがあきらかであつた。別の言葉でいえば、つまりそれらは、権威ある昆虫学者の個人的経験や公刊された著作によつて、ふつう出現するものと予想されている季節よりも、それぞれ六乃至十四週間も早目に集団をなして出現したのである。この出現季節の繰上りは平均して九週間、つまり二カ月以上であつた（付録八）。

さてつぎに、いくつかの興味ある問題が持ちあがつてくる。家蝿とだいたいおなじ程度の大きさの蝿さえ、それが数万数十万と集つている有様はどんなに仰山なものであるかは、かんたんに想像がつくが、しかし弾尾虫 (Isotoma neigishna; Börner) はその大きさがひじように小さい (長さがわずか二ミリ) ので、ひじようにたくさんのものが高い密度であつまつておらねば、いくらかでも人の注意をひくことはできない (付録八)。できる場合には、密度を算定した具体的な数字を表にまとめておいた (付録七)。SIA/一二のなかで、中国昆虫学者の一人が一つの大切な観察をやつているがそれは温度が摂氏零下十度のときにあらわれたヒレミイアのひじような大群のなかで、卵をうむばかりになつている個体がたかい比率をしめていたということであつた。このことは、これらのものの発生についての神秘をますます深めた。それとおなじように目ざましいのは、野こうろぎ Gryllus testaceus の場合であつて、一九五一年に北京で書かれた丹念な論文には、偶然その生活史を主題にしたものがある (付録八)。この種の数千の成虫が、朝鮮に接する中国東北 (満洲) の遼東省寛甸のちかくで、時もあろうに三月にあらわれたのである。三月といえば、中国東北よりもずつと気候のあたたかい北京でさえ、卵の段階にあるものをのぞいて、この虫はまだ発生しているはずもない時であつた。

ところで、いろんな種類の虫の群が、冬でもポツンポツンとあちこちに出現する例は、もちろん昆虫学の文献のなかに見られる。しかし、こんなに多くの種の昆虫が一時にそういう現象をおこすということは、その原因が純粋に自然的なものであると仮定すれば、とても考えられないことであつた。委員会は、中国東北（満洲）と朝鮮のこの冬の気象事情が、例年とまつたくかわりないものであることをたしかめた（付録八）。したがつて、中国人と朝鮮人がこの異常な現象を、アメリカの飛行機の通過と結びつけて考えるのは、すこしも驚くべきことではないし、しかもそれらのアメリカの飛行機が、多くの場合、爆発しない物体を投下し、そしてその時、虫が出てきたのをみた目撃者さえもあるのである。委員会はそういう目撃者と会見して（付録二二、二五、二八）、かれらが十分に誠実であることと、かれらのはなしが合理的で信頼できることをたしかめた。後でみるように（八〇―九六ページ）、平凡なまたすこぶる特殊な型の容器が見つかり、研究された。残念ながら、ヨーロッパにとどいている文書のいくつかには（四ゼロ文書のように）、あらかじめ飛行機が通つたことについての必須の証言がふくまれていないものがあるが、委員会はこの大切な点を明らかにすることができた（付録七）。

ひじようにたくさんの昆虫の種の出現した時期が、たしかに、繰上がつていたことはみとめるが、

それはよしんば気象学上の事情に異常があつたせいではなかつたにせよ、なにかほかの自然的要因が作用して、すべてのものの発生をおなじ程度だけ繰りあげたのだという議論がでるかも知れない。この点の検討は幸にもすこぶるやさしかつた。つまり、いろんな種をそのふつうの発生の順にならべたグラフをつくり、それにそれらが異常発生をその発生順に書きこみさえすればいいのだ。もし一律にはたらく自然の要因が作用しているのであれば、二つの曲線または直線は平行に走ることになるはずであるが、(付録八)のなかにある図表を一目みれば、それがそうなつていないことが十分にしめされている。異常発生の順序はひどくでたらめであつて、人為的な要因が干渉したことをしめしている。

委員会が活動をはじめるまえに、多くの国々である程度の成功をおさめた議論の一つは、あの悪名のたかいナパーム爆弾の使用がつづいているので、地表の一部がひどく熱くなるようなことも、ありうるのだというのであつた。ナパーム爆弾にそれほどの効力があるとすれば、それは多くの種類の昆虫の生活週期をかきみだして、それがふつうの発生よりも数週間または数カ月まえに発生するようになることがあるかも知れないのだ、と。そこで、委員会は、三十三の主な事件をふくめて昆虫が大量発生した実例についての幾ダースもの報告――そのいくかつは表にしておいた(付録七)――は、

もともと中国東北からおくられてきたものであるが、そこはもちろん、ナパーム爆弾のすこしもつかわれたことのない地域であつたという事実を興味ぶかく注目した。

以上にのべたことはみんな、SIAやそれと同種の文書にのべてある昆虫の種についてもあてはまる。中国昆虫学者は、「蟻」とか「馬蠅」とかいう俗名でそれらの文書に記してあるいくつかの種を確認することはできなかつたが、それは非科学的な目撃者のつかつた言葉が原因になつて、いくらかの混乱がおこつたのであろう。この点については、のちに委員会は、鞘翅類(標本虫)Ptinusについての新しい証拠をしらべたが、それについてはあとでのべる(付録二七)。この実例やまたその他の感染昆虫の実例のどちらの場合でも、付録にあつめた材料は媒介体と病気の発生とのあいだの関係を研究するのに役立つ。またこの点に関連があるのは、大量の昆虫を駆除するために中国と朝鮮がどんな手段をとつたか(付録四二をみよ)、またふつうの昆虫を手当り次第にとつてしらべる場合に、病原菌が見つかるかどうかということである(付録四、五)。

ばらまかれた昆虫についての医学的註釈

読者はつぎの諸節で、科学者でない人にとつては、なじみのなさそうな名前をもつたある種の昆虫や蜘蛛に出くわすかもしれない。この節はそういう昆虫について簡単な説明をくわえようとするものであり、説明の順序は付録でとつたのと同じ順序にしたがつた。

ばらまかれた昆虫のなかで、いちばん多く見かけるのは黒蠅 anthomyiid fly, Hylemyia sp. である。この属の蠅は、北アメリカにはとくにたくさんいて、五百以上の種があり、そのうちのいくつかはつねに人家にたかつている。それらは人間の排泄物のなかで繁殖するので、当然腸内疾患の機械的媒介体として重要である。この種の多くは、蛹の段階に地下で冬をすごし、ふつう成虫が大量に発生するのは、五月より早くはない。これらの蠅は、自然状態のもとで、植物に病気をおこす種々の病原菌を感染させることができる。

糞蠅 Sun-fly, Helomyza sp. (family Helomyzidae) は、糞のかたまりにたかる昆虫である。幾十ダースもの種があつて、その大部分は、幼虫のときばかりか成虫になつても、人間の排泄物、蝙蝠、小哺乳動物などにくつついて生活している。これらの蠅のいくつかの種は、人家にあつまり、食物をけがし、病原菌からおこるすべての人間の病気の機械的な媒介体になる。

家蠅 Musca domestica とその南方種 Musca vicina は、たえず人間といつしよに生活していて、人間の病原の運搬者としてよく知られている。この蠅には、六十種以上の病原菌がくつついているのが見つかつている。

大家蠅つまり馬小屋蠅 Muscina stabulans も、人間のまわりで生活する昆虫であり、人間の病気の媒介体であるとみとめられている。

以上はみんな双翅類である。積翅類の代表はネモウラ Nemoura 種、つまり石蠅 stone-flies の一種である。これらは小川や流れ水のなかで繁殖し、その幼虫は水のなかの微生物を食つている。

成虫も、自分が成長した環境からあまり遠くへはなれたがらない。

弾尾類は羽のない原始的な昆虫であるが、その代表的なものは黒跳虫 Isotoma sp. である。これはくさりかけた植物性の物質や腐植土の多いしめつた土地、野菜の根などに発生するいくつかの種は溜り水の表面で発生する。

自然状態のもとで、人蚤 Pulex irritans つまり人体に寄生する蚤は、ペストの大発生をひきおこすことができる (Blanc と Balthazar)。この蚤が媒介体として細菌戦に利用されたことは、後で見る通りである。

標本虫 Ptinus fur (鞘翅類) は約三十五から四十の種をふくむ属に属し、その大部分はおなじ習性をもち、人家の付近にすんでいる。ここで問題になつている種は人家、倉庫、馬小屋、鳥小屋や水車小屋、図書館や工場などでいちばん多く見つかる。それは精白した穀物、穀類、棉実、腐つたパンやビスケツト、粉、麦桿、絨氈、革などにすんでいる。そして、それらのもののあいだに卵をうみつ

ける。変態の過程は三カ月から四カ月ぐらいで、そのため一年間に少くとも三世代が生れることができる。成虫の標本虫は五年間生きることができる。それはヨーロッパ、アジア、北アメリカに見られ、広く分布している。自然状態の標本虫 Ptinus からは、害毒性のある炭疽菌が見つけ出されている（付録二七、二八）。

蜘蛛のなかでは、狼蜘蛛 Lycosidae 族の二歯狼蜘蛛 Lycosa 種と三歯狼蜘蛛 Talentula 種が代表的である。これらは肉食をし、蚊、蠅、蟻その他の種をくい、なかには人間の病気の媒介体になるものもある。これらの蜘蛛が人間に危害をくわえるときにおこる病気は、咬みつくときに出す毒液だけでなく、同時に病原菌が感染するということによつてもおこる。これらの蜘蛛の排泄物も、病原菌をもつているらしい。その寿命はひじようにながく、数年間にたつする。成虫は、二年間食物をとらずに生きていることができるし、数カ月は水をのまなくてもすませる。また、軽い霜にもたえることができる。

科学的文献のなかには、昆虫や蜘蛛類を大量的に人工生産する方法をのべているものがある。この

問題についてのいちばん完全な知識は、アメリカの昆虫学者たちのかいた「無脊椎動物の飼育方法」（ニュー・ヨーク、一九三七年）という協同著作のなかに見いだすことができる。

上述の説明からわかるように、ばらまかれた昆虫のあるものは、病気の媒介体であることがわかつているが、他のものは病気の伝達になにかの関係があるものとしては教科書にでてこない。そして、黒蠅 Hylemyia と糞蠅 Helomyza などの蠅は、しばしば人家にあつまつてくるが、黒跳虫 Collembolid Isotoma sp, などは、ほんのわずかしか人間との接触はない。それで、一寸見たところでは、このような節足動物が、人間の病気の伝達に、なにか重要な役割をはたしそうにはおもえない。しかし、媒介体のいわゆる特異性の幅の大きさということだけでなく、まだあきらかになつていない媒介体＝寄生主という関係のある種の面も考慮せねばならない。

たとえば人間と鶏蛆 Dermanyssus gallinae との関係は、ひじように限られた特殊な条件のもとでだけおこる。一九四四年いぜんには、脳炎ヴイールスを伝達し保存するうえで、この外部寄生虫がどんな重要な役割を演ずるかについてはわかつていなかつた。それいぜんには、脳炎の伝染病を人工

的にひきおこそうとして、だれかが鶏蛆をつかつたとすれば、それは馬鹿げたことに思われたであろう。

人間とみつせつに接触する種が、かならず野性種よりもつと有効な病気の媒介体であるということは、一般的法則としてみとめることはできない。たとえば、たくさんの例のなかから、アエデス・スカプラリス Aedes scapularis とハエマゴグス・スペガツジニイ Haemagogus spegazzinii という蚊をあげることができよう。研究室の条件のもとでは、これらの種は黄熱病を伝達する。ところで、この第一のものはひじように人間になれていて、いつでも森林地帯の付近にある人家にあつまるが、第二のものはけつして人家にはいらない。それでも、人間と共生する前者は、黄熱病の伝達にすこしも重要な役割をはたさないが、野生種の方はその媒介体として有名である。

たとえば、黒跳虫 Isotoma を例にとれば、いろいろの仮説をたてることができる。ただし、これらの仮説は実験をするための推測にすぎないものであるという事を見失なつてはならないし、その実験の結果がどうなるかについては、われわれは何も知らないのである。たとえば、

(a) 黒跳虫　下等哺乳動物への感染　体外寄生体（蚤、蛆など）　人間への感染。

(b) 黒跳虫　食物や水の汚染　人間への感染。

(c) 黒跳虫の体内で病原菌の繁殖　黒跳虫、先天的病気　下等哺乳動物への感染　外部寄生　人間への感染。

(d) 黒跳虫　植物への感染。

このほかにもたくさん仮説がたてられる。

これとおなじ種類の仮定は、石蝿 Nemoura にもあてはまるが、この場合には、おそらくまだほかの可能性も考えられよう。しかし、それについては、いまのところくわしくのべることはできない。半ば屋内にすむような蝿が、媒介体としてはたす役割を理解することはこんなんでない。とくに研究室の人工的条件が感染率をたかめ、病原の毒性をたかめるときには、ことにそうである。

まだもう一つ大切な点を強調しておく必要がある。おなじ一つの種が、ある地域では半野生であるが、他の地域では屋内にすむようになることもあることがある。一つの例として、ケルテシア Kerteszia 属のアノフェリン Anopheline 蚊をあげることができよう。これは、南アメリカの北緯二十四度から北では屋内にすむ習性がなく、マラリアを伝達する役割をはたさない。しかし、その線から南では、反対に、多く屋内にすみ、そのためにマラリア伝達のうえで重要な役割をはたしている。

さいごに、マラリアにたいしてアノフェレス蚊が、ペストにたいして蚤が、リケッチアにたいして虱やダニがやるように、寄生虫や細菌が感染する病気で節足動物が媒介体としてはたす役割をはっきりと証明することができるようになるためには、長い期間の研究が必要であつたことは衆知のことである。病原伝達のうえで節足動物のはたす役割は、こんごも引続き研究することが必要である。駆除方法がまだはつきりしていないのを見こして、あまりよく知られていない異常な昆虫の種を媒介体としてつかうことは十分にありうる。そして細菌戦争のやり方として、病原と媒介体と人間との新しい相互関係を人工的につくりだすことができるということが考えられる。それをするため研究は、たとえ骨は折れても、成功しないことはなさそうに思われる。

植物病理学的資料

これまでの細菌戦の文献には、アメリカ飛行機が植物の包みを投下したことが、いくつかのべてある。それらの包は、千フィートぐらいの高度で破裂して、ひろい場所に葉とかその他の植物の部分をまきちらしたのを、目撃者がたいてい見ている。この種の事件は、三月二十日、朝鮮の定州（NCNA／八五、九ページ、SIA／一三、四ページ）やそのほか、中国東北と北朝鮮の十カ所でおこっている。その一つの場合には、そういうものが落ちてくるのを、一人のイギリス人従軍記者が自分で見ている（SIA／六、二ページ）。委員会のメンバーは、国際的に有名な中国植物病理学者や植物学者といつしよに、その植物学的また細菌学的同定について討論した（付録一）。

あるときは大豆の茎や莢に、紫斑病菌 Cercospora sojina Hara（別名Cercosporina Kikuchi, Matsmoto and Tomoyasu）を感染させていたのが、確証されたことがあつた。この菌は、植物の

病原で、朝鮮や中国にもともといることが記録されており、大豆の収獲に大きな被害と損失をあたえたものであつた。そのとき討論したほかの実例の場合にも、投下された植物の組織のなかから病原体が見つけだされ、それがただ表面に感染していたばかりか、中までかんぜんに感染していたことがわかつた。

また、いくつかの葉の破片が炭疽病菌（Glomerella 種、その無性期は Colletotrichum といわれる）に感染していたことがあつた。その葉で見つかつた菌は、種々さまざまなものに寄生することができ、接種実験によると、林檎の木、梨の木、棉の木などに被害をあたえる。ふつうの棉炭疽菌（Glomerella gossypii（South）Edg.）は棉や棉にちかい植物にしか被害をあたえない。しかし、林檎を、にがく腐らす菌（Glomerella cingulata（Stoneman), S & S.）は三十以上の寄生植物に被害をあたえるが、棉には被害をあたえない。これらの菌は両方とも、中国にいることが、記録されている。しかし、このたび発見された菌は、それとは形態学上のちがいがあり、またその寄生する範囲もはるかにひろい。

植物病をばらまいた第三の例は、委員会が活動をはじめたのちの七月になつて、遼東省南部の岫巌のちかくでおこつた。マクロフォマ・クワツカイ・ハラ Macrophoma kuwatsukai Hara が桃の葉（ほんらいの寄生主ではない）に伝染しているのが見つかつたのであるが、この菌は林檎と梨の実をくさらせ（輪紋病班）、またはそれらの木に癌種病をおこさせたり、小枝をかれさせたりする。取りだされた菌は高い伝染性をもつていた。

上記の三つの実例の場合については、植物性物質の包がおちたのを目撃した証人のくわしい報告がある。

この植物病理学戦争のなかで、委員会の注意をひいたもう一つの事件は、例のように中国東北（満洲）遼東省にアメリカの飛行機が一機侵入したのち、安東付近の孫家堡子村に玉蜀黍の粒がばらまかれたことである。それらの粒には、アメリカやヨーロッパで野菜類の病原体として知られているテカフォラ・デフォルマンス Thecaphora deformans に似てはいるが、それとおなじではない黒粉病 Thecaphora の一種が伝染していることがわかつた。この植物病原体は、これまで中国には、その

存在が記録されていない。

投下された葉は、しばしば切れ切れになつていたが、それが何の葉であるかわからなかつたのはただ一と包きりであつた（炭疽病菌の場合）。第一回の事件では、葉は大荳 Glycine max であり、第三回目の事件では、桃 prunus persica 第四回目は玉蜀黍 Zeamys であつた。この外の場合の投下は、しばしばケルクス種 Quercus sp.（樫）とソルグム・ヴルガレ Sorgum vulgare（高粱）であつた。これらのなかでは、二つの事件がとくに興味をひいた（付録一〇）。北鮮大徳山でおとされた葉の一かたまりは、落葉樫 Quercus aliena, Bl. var. rubripes, Nakai の葉であることがわかつたが、この木の分布はげんみつに三十八度線以南にかぎられている。五月三日に中国東北の海龍縣に、おとされた一かたまりの葉は、やまからばし（くすの一種）Lindera glauca Bl. であることがわかつたが、この木は南朝鮮にあるだけで、中国東北にはすこしもないものである。

人間の病気だけでなく植物の病気の媒介体として、昆虫をつかつた可能性のあることものべておかねばならない。たとえば、黒蠅 Hylemyia spp.（上述四五ページと付録一〇をみよ）が、梨と林檎

の火白症（Erwinia amylovora）玉蜀黍萎凋病（Phytmonas stewartii）と野菜軟腐病（Erwinia coratovora）——三つの細菌病——それにキャベツの「黒脚病 black leg」菌(Phoma iingam)をもつていることはよく知られている。大家蝿（上述四六ページと付録一〇をみよ）が梨と林檎の火白症菌をもつていることもよく知られている。中国病理学者は、ばらまいてあつた昆虫（と葉）からいろいろな種類の細菌を取りだしており、それについての研究がすすんでいる。

そこで、植物病の撒布が、朝鮮と中国東北（満洲）でやられている生物学的戦争のなかで一役をはたしているにちがいない、ということはほぼいえる。

朝鮮の事件（ペスト）

先にのべたように、日本が第二次世界大戦中にやつたペストその他の細菌戦の古典的方法は、容器または噴撒の方法によつて、ペスト菌に感染している大量の蚤をばらまくことであつた。一九五二年

のはじめから、北鮮のあちこちに、ぽつぽつとペスト流行の中心点がたくさんあらわれたが、その際いつでもそれといつしよにたくさんの蚤がとつぜんあらわれたし、そのまえにはかならずアメリカ機がそこを通過していた。二月十一日の事件をはじめ、そういう事件が七つほどSIA／一に報告されているが、そのうち六件ではペスト菌が蚤のなかに見つけだされたことが証明された。文書SIA／四は、二月十八日安州付近に蚤がばらまかれたことをつけ加えている。蚤は、細菌学的にみて・ペスト菌をふくんでいることが明らかになつたが、その撒布後の二十日その地区の発南里にペストが発生した。村の人口六百のうち五十人がペストにかかり、三十六人が死んだ。

委員会の受けとることのできた最善の報告によると、過去五世紀のあいだ朝鮮でペストのおこつたことはなかつた。ペストの流行した一番ちかい中心地は、中国東北（満洲）の遠く三百マイルはなれた土地か、それとも福建の南方一千マイルのかなたの土地であつた。そのうえ、二月という月は、この土地の気候からみて、人間のペストがはやるにはふつう三カ月以上はやすぎる。とくに、またその時出現した蚤は、ふつう自然状態でペスト菌をはこぶ鼠蚤ではなく、人蚤（pulex irritans）であつた。そして、この蚤は、われわれが中国側の同定（付録一二）その他の指摘（付録一九）から知つて

いるように、第二次世界大戦中日本軍が細菌戦につかつたものであつた。

一方、委員会は、朝鮮で二つの特別の実例を研究するようにすすめられた。（付録一八、二〇）その第一の実例では、三月末江西郡で、前夜村の上空を敵一機が旋回したその翌朝、一人の農民がじぶんの家の井戸のちかくにあつた瓶のそばへ行つた。そうして、たくさんの蚤が瓶のなかの水の表面にうかんでいるのを見つけた。その農民は、たぶんその蚤にかまれたのであろうか、数日後に腺ペストにかかつて死んだ。死因がペストだという診断は、朝鮮と中国の専門家のやつた病理学的また細菌学的試験で確認された。それらの蚤にはペスト菌が伝染していたことも証明された。委員会のメンバーは、上記の専門家らが患者の体から分離した微生物の培養を観察して、これらの培養菌がたしかにペスト菌であることに確信をもつた。病理学的および組織学的標本もしらべた。江西では、すばやく衛生上の措置をとつたので、ペストの蔓延はくいとめた。

二番目に研究したのは、朝鮮にいる中国義勇軍の二人の中尉が、准陽附近のはだか山のうえで、ひじようにたくさん密集した蚤の群を見つけた事件であつた。そのちらばり方から見て、これらの蚤は、

北北東の方向から、かなりゆつくり落ちてきた容器のなかから、ばらまかれたもののようにおもわれた。しかし、容器はあとかたも見つからなかつた。土地を黒くし、また自分たちのズボンさえまつ黒にした虫の密集にいくらかおどろいて、この二人の青年——委員会はのちに直接この二人に質問をした——は、じぶんたちの宿舎にかえり、戦友をつれてき、松の枝に石油をかけて火をつけ、それで蚤をころした。この場合には、軍人たちはいろいろの方法で病気になるのをふせぎ（付録二一）、またかれらのすばやい対策がうまくいつたので、いつも人間の通る道に蚤がはいだしてゆく余裕はなかつた。朝鮮——中国部隊のやつた試験によると、これらの蚤はペスト菌に感染していたし、またそれは人蚤であることがあきらかになつた。

これらの蚤が、人間に寄生する蚤（P. irritans）であつたことは、強調しておかねばならない。この昆虫の生態学からわかつているところによると、人間の住家をはなれたところで、この蚤をたくさん見つけることはできないはずであつた。では人間の住居から遠くはなれた荒れ地に、一時に何万という数のこの昆虫がでてきたということは、どんなふうに判断したらよいのか。こんな魔女の宴会が、なにか自然の方法で出現するということはありそうにもないことであつた。この事件に非常に関

係のありそうなことは、それらが見つかつた日の午前四時ごろ、付近に宿営していた中国人民義勇軍の人々が、その地の上空を飛行機が旋回するのをきいたことであつた。

この事件を分析してみると、この場合、人蚤によるペストの伝染の連鎖のなかで、ふつう必ずその中にあるべきいくつかの環が行方不明になつていることがわかる。外部寄生体によつて伝染するこの病気は、ふつうまず齧歯動物にあらわれ、それにつづいて人間のあいだにあらわれ、そのつぎに人間から人蚤が感染する。それからやつと、この人間の寄生体は、もつとひろくペストを蔓延させることができるのである。

すべてこれらの事実や、これ以外のおなじような事実から見てみると、委員会としては、日本軍が第二次世界大戦中にペスト蔓延のためつかつたのとひじようによく似た――たとえまつたく同じではないにしても――方法を、こんどはアメリカ軍がつかつているのだという結論をくだすほかに仕方がなかつた。

平壌でこれらの実例を討論している間中、委員会は、ペストについての、中国側の最高専門家の一

人、そして一九四一年の（日本軍細菌戦についての）報告（付録一一）の執筆者まさにその人からの援助をうけた。この専門家のもちだした証拠によると、かれはその当時、日本軍が細菌戦をやつているという事実を世界に公表せよと、国民党政府にむかつて力説したが、成功しなかつたということであつた。それが成功しなかつた理由の一部は、アメリカ側がそれを止めたからだというのがこの人の考えであつた（付録一二）。かれはまた、いま朝鮮でつかわれている種類のペスト菌は、高い毒性をもつていることに注意せよと指摘した。

ペストに感染した蚤をまくことは、もちろん、ペストを流行させるための只一つの方法ではない。それ以外の方法がつかわれることはあるし、われわれはつぎに、事実そういう方法がつかわれていたのを見ることにする。

甘南事件（ペスト）

もう一つの実例は、それを組立てる諸要素が、わりと完全に連続してそなわつていたので、委員会は、それをひじように詳しくしらべるようにすすめられた。それは、ペストに感染しペストにかかつている野鼠の大軍が、突然あらわれてきた事件であつた。一九五二年四月五日の朝、甘南の町（甘南縣）の行政管轄下にある四つの村の村民がおきでてみると、自分たちが鼠みたいな動物の群に包囲されているのに気がついた（付録一三）。この町は中国東北（満洲）黒龍江省の西部省境にそつていて、まさに内蒙古ととなりあわせている。

その前の晩、たくさんの村民が頭の上を一台の飛行機が通る音をきいた。中国防空監視隊の情報によると、この飛行機は十時直前鴨緑江をこえ、十一時三十分甘南の上空にあらわれたが、それからもはや自分の使命をおわつたかのように、もときたコースを引かえしていつたということになつている

（付録一三）。それはアメリカ空軍のF―八二型双胴夜間戦斗機であつたことを、防空監視隊は確認した。朝になると、村民たちは家の中や中庭や、屋根の上、なかにはベッドの上などでたくさんの鼠が死にかけていたり、死んだりしているのを見つけた。他方、住宅地のはずれにも、たくさんの鼠が散らばつていた。だいたい3×9マイルぐらいの広さのある居住地域のなかやちかくで、あつめたり殺したりした鼠の合計は七百十七匹であつた（付録一三）。これは、季節的にみて変則の現象であつた。というのは、この地方でこの小さな齧歯動物がふつう姿をあらわしはじめるのは、もう一月もあとであつたからだし、それにこれ程たくさん一ぺんに出現したのも、今までにないことであつた（付録一三）。また、それが現れた場所も変則であつた。というのは、野鼠はけつして人間の家にやつてこないからだ。

また、この地方に、この種の鼠があらわれたのは、この動物の分布からみても変則であつた。この地方の人たちは、これまでこの種の鼠を見たことはなかつた。それは Microtus 属に属し、形態学的には Microtus (Stenocranius) gregalis gregalis に似たものであると同定された。この種のものは、甘南より北西の中国東北（満洲）の諸処に棲息することが、徳田氏によつて報告されており

（一九四一年）、またほかの人はもっと西の地点に棲息することを報告している。もっとくわしい分類学的研究は、いま中国の科学者がすすめている。そのうえこの属は、中国東北のうちペストが地方病になっている場所で、ふつうこの病気の媒介体になっている三つの属のうちにはいっていない（付録一五一六）。この事件について、瀋陽（奉天）とこの村の両方で委員会のやった証拠品の分析は、これらの野鼠があのように一定の場所に集中していたのは、ある程度まで農家のかっている猫の仕業にちがいないということを示しているが、しかしこの外部から侵入してきた種の野鼠は、猫が見つけるまえに一様に病気になっていたか、死にかけていたこともあきらかになった。そして、そのうちのあるものは、猫のゆけないような場所で死んでいた。

甘南地域は、記録のあるかぎりでは、いままでどんな種類のペストもおこったことのないことがわかっているし、また一番ちかくでこの病気が風土病になっている場所からこの野鼠が移住してくることも、その距離や障害の点から見て、とても出来そうにないことを示す理由が、十分以上に提出されている（付録一四）。さらにペストが風土病になっている地帯の齧歯類のあいだに、ペストの外部寄生体がふつうあらわれるには、季節がすくなくとも一カ月ほどはやかった（付録一三）。細菌学的試験

に十分適するように、保存されていた鼠は、たつた一匹きりであつたが、この標本がペスト菌に毒感染していた証拠がえられたことは、上述の目撃者の説明とあわせて、これらの野鼠の集団が、たしかにペストにかかつていたことを、まちがいなく示していた（付録一三一、一四）。この点の証拠は、委員会のなかの実験をする能力のあるメンバーが、瀋陽の中国医科大学細菌学実験室で委員会の全員の立会いのもとに、中国科学者と協力してやつた直接の実験によつて確認された。

証拠の鎖のなかのおもな欠け目は、どんな種類の容器も「爆弾」も見つからなかつたという事実であつた。けれども一九五二年一月、日本の雑誌（サンデー毎日）に、感染した鼠の荷物を地上におろしたのち、あとかたもなく、燃えてなくなるように、強い紙でつくつたパラシュート付き容器の記事がのつていた事実からみれば（付録一七）、たとえ証拠の鎖のこの一つの環が行方不明になつたところで、いままでのべたたくさんの詳しい証拠が無効になつてしまうなどとは、とても考えられない。また別の日本の新聞の報道（講和新聞、一九五二年八月）は、石井四郎の前助手小沢の指導のもとに、齧歯類の大量生産をやる飼育所のあることを、ばくろしていた（付録四一）。

あとはただ、委員会が、十人の農民から瀋陽（奉天）で証言をきいたこと、またこれらの農民を一人一人その家庭に訪ねていつたことを、つけ加えておくことだけが残つている。委員会はまた、この事件がおこつたのち、現地の衛生手配をした伝染病学者、ペスト菌を研究し分離した細菌学者、それに齧歯類の専門的研究をしている動物学者から証言をきいた。委員会は、この場合村民たちがペストにかからなくてすんだのは、この異常な齧歯類がはじめて発見された瞬間からとつた衛生上の予防対策のおかげであり、またその同じ日の正午に、村民たちが、猫と犬を一匹のこらず大いそぎで殺してしまつたおかげであると考えている。その時とつた予防対策のなかには、中国東北で人家の蚤をころすために、ふつう使われているひじように有効な方法もあつた。それは家具をみんな戸外へはこび出した後、土の床や爐の上にうすく乾草や藁をしいて、それに火をつけるのである。そういうわけで、ペストに感染した蚤が、病原菌を人間にうつすことはできなかつた。

そこで、委員会の意見によると、村民がその音をきいた飛行機が、一九五二年四月四―五日の夜間、甘南地区にペストにかかつている、たくさんの鼠をおとしたことには、すこしの疑いものこらない。この飛行機は、アメリカのF八二型双胴夜間戦斗機であつた。

寛甸事件（炭疽病）

委員会は、黒蝿 anthomyiid flies と蜘蛛が、同時に異常出現をした実例をくわしく研究した。一九五二年三月十二日、鴨緑江ちかくの遼東省南東部にある寛甸の町の住民は、正午から半時間すぎたとき、アメリカ戦斗機八機が市の上空を通過するのをみた。こういうふうにアメリカの飛行機が上空を侵犯するのはふつうのことで、ほとんど毎日の出来事になつていたから、それらがアメリカ機であることがわかるのには、何の困難もなかつた。中国軍防空監視隊は、それをF－八六型機とみとめ、その進路を記入した。ところでそのうちの一機が、明るい円筒状の物体を落したのが、あきらかに見られた。そのすぐ後とその後数日間、町の人たちは学校生徒もまじえてその物体が落ちたようにおもわれた東門の向い側の地帯をさがして、たくさんの黒蝿ヒレミア（Hylemyia, sp.）と蜘蛛（Tarentula, sp.）をあつめた。

この事件がおきてから九日ほどして、一人の生徒がさいわい、あの物体が落ちた地点にあいていた浅い穴のなかやまわりから、容器の破片をたくさん見つけた（付録二二、二三）。その地点は小さな島の玉蜀黍畑であつたが、この季節にはその島をかこむ川床は乾あがつていた。いちばん大きな「爆弾」の破片は金属であつたが、いちばん多かつたのは細い穴のたくさんあいている、うすい石灰質の物体であつた。それらが、どんな性質のものであるかは、すぐにはわからなかつたが、後ではつきりした。それについては別に論じることにする（九二頁）。その発見の場所には、翌日、二人の十分な能力のある昆虫学者が検分にいつたが、この二人はもうそのまま四日間その附近をさがしていたのである。かれらは、またたくさんの蠅をあつめたし、熱い湯で雪をとかしながら、容器の破片をできるだけ多く注意ぶかくあつめた。

雪があつたので少くとも畦と畦とのあいだの溝には雪があつたので、まわりの温度がひくいと不精になる昆虫どもは、一週間以上たつてもその落下地点のすぐちかくからはなれなかつた。またそのために（同時におとされた）ひじようにたくさんな鶏の羽が、そのおなじ地帯におなじようにそのまま残つていた。昆虫とアラクニド蜘蛛の一種がその時出現したのは、季節的にみて変則であり（上述三

七〜四四ページをみよ）、また前者がそこに出現したのは、動物学上の種からみて地域的にも変則であつた（上述三七〜四四ページをみよ）。

中国側のやつた権威ある細菌学的試験によると、昆虫にも、蜘蛛にも、羽にも、炭疽病をひきおこす病原体（炭疽菌 Bacillus anthracis）がくつついていることが証明された（附録一二）。炭疽菌が節足動物の中または上にいるということは、ひじように突飛な現象とかんがえねばならない。それが鶏の羽にたくさんくつついていることは、それほど注目すべきことではないが、中国北部や中国東北（満洲）で手当りしだいにあつめた対照標本の羽を、中国側で細菌学的に試験したところでは、炭疽菌は見つからなかつた。そのうえ羽は、昆虫の移住を安全にするためにつめただけのものであるかも知れない。とはいうものの、ほかの実例では、炭疽病に感染した羽だけがばらまかれたことのあつたのを、記憶しておかねばならない。この事件の結果として、この町の中または付近に、炭疽病にかかつた人のあつたということについては何の報告もなかつた。

上にのべた事実から、委員会としては、三月十二日遼東省のこの小さな町の附近に少くとも一機の

アメリカ飛行機が、炭疽菌をつけた昆虫と蜘蛛を、少くとも一つの特殊型の容器でおとしたのだと結論するほかに仕方がなかつた。

遼東と遼西の事件（呼吸炭疽病器）

委員会は、鴨緑江をこえてやつてきて、またその向うへかえつていくアメリカ機が、さまざまな種類の物体をおとすのを見た一群の実例をくまなく研究した（付録二七）。現地の目撃者がすぐにさがしにいつたとき、落下地点とおもわれるところには少しも容器が見つからなかつたが、ほかのもの、とくにたくさんのプチヌス・フル（Ptinus fur 種の標本虫へふつう貯蔵した穀物その他の乾燥物の害虫）か、または綿毛だらけの鶏の羽のかたまりが見つかつた。ある場合にはたくさんの家蠅 Musca vicina がとつぜんあらわれたが、これはまだ雪が地上につもつていたときなので、例のように季節的にみてひどい変則の現象であつた。標本虫がいたということは何も季節的変則ではないが、それが戸外に、しかも真つ昼間ひじようにたくさん出現するというのは生態学的にみて異常であつた。これら

三つの生物体は、みんな炭疽菌で汚染されていたのを中国細菌学者が見つけた。そして、それらから取り出した種々の桿菌は、それらのくつついていた物がちがつていたのに、醱酵試験でみんなまつたく同じ態度をしめした——これは異常で疑わしいことであつた。

二十四人の目撃者を徹底的にしらべたが、そのうちの幾人かは飛行機からものが落ちてくるのを見た人たちであつた。中国防空監視隊の観測記録はどの実例についてもみんなそろつていたが（図表）、その情報によると侵入飛行機はだいたいF—八六型戦斗機で、ただ一回だけB—二六型爆撃機が例外として一機あつた。一つの実例では、数人の人たちが、大きな赤い魔法壜のようなものの投げおとされたのを見たし、それは地上三十フイートぐらいのところで爆発し、皮や角を燃やすときのようないやな香がした（容器についての節をみよ）。もう一つの場合については貴重な証言があつた。その証言は、落下地点とおもわれる場所には容器がぜんぜん見つからなかつたが、その代りまさにその地点からたくさんの羽がだんだんと風に吹きちらされ、羽のちらばつた三角地帯がだんだんとのびひろがつている有様を説明していた。この場合、容器についての説明は、寛甸でつかつた自滅式「卵殻」型容器をつよく思いださせるものがあつた（付録二二と下述九二ページ）

遼東、遼西両省のたくさんの場所の事件をしらべるためには、飛行機、容器、出現した生物体、細菌試験についての証拠のほかに、呼吸器炭疽病と出血性炭疽脳膜炎という人間の致命的な病気についての具体的でよく分析された資料もあつて、いまではたくさん証拠がでてきている（付録二七）。これらの病気については鉄道員、輪タク運転手、主婦、学校教師、農民の五つの実例をしらべた。これらの人たちのかかつた病気は、みんな同じような急激な進展をしめし、死体解剖とその後の組織学的検査では病理学的に見てみんな同じような像をしめした。死んだ人のうち二人の原因は標本虫であつたようだしほかの二人は蠅と羽であつたように思われた。委員会は、中国側の科学者同僚のくだした診断とかれらの指示した証拠にまつたく満足であつた。その上、証人の調査（付録二八）はそれらの文書自体（付録二七）にかけていたものをみんな明らかにしてくれた。つまり、五人の犠牲者のうち四人までは、組織的な捜索の全般に参加して昆虫や羽をあつめたばかりか、大部分の人たちがやつていた正しい予防法をやつていなかつたことがわかつたこと、つまりその四人の男女たちはマスクで気道口を守つていなかつたし、手袋をしないでまた鉗子（やつとこ）をつかわないで生物体をいじつたことを明らかにしてくれた。顕微鏡のもとで細かにしらべてみると、標本虫 Ptinus は、気道を通じて炭疽病を伝播させるのに、よく適しているらしいことが明らかになつた。というのは、それは、そ

の甲のうえに、もろいキチン質の棘状突起をたくさんもつており、人間がそれを吸いこむことができるからであるが、この事実は文書ではあきらかに看過されていた。

しかし、これらが炭疽病に感染した生物体によつてひきおこされた唯一の死亡例ではなかつた。くわしい病理学的分析をくわえた五人の実例はただ見本として提出されただけのものなのである。またこの地方でこの病気がおこるのは、これまでのところ非常にまれであつたことをよく理解していないと、この五つの実例を正しく理解することはできない。提出された統計資料（付録二七、二八）によると、近年中国東北では、典型的な皮膚または小膿疱炭疽病はひじようにめずらしいばかりか、出血性脳膜炎をおこす呼吸器炭疽病はまつたく存在していないことが示されている。

炭疽菌を細菌戦につかうことを提案した文献のあることは有名である。自然状態のもとでは、人から人への伝染はほんのまれにしかおこらないから、それを自然発生的に流行させることは容易でないが、しかし、この桿菌はひじようにたくさんのものに寄生することができるし、また毒性のある場合には高度の伝染性があり、また四囲の条件にたいする、とくにつよい抵抗力をもつていて、長い間そ

の地方を汚染することができるという長所がある。そのほか、この病気は、呼吸器を通じて伝染するとき、ひどく急性であることを付けくわえておかねばならない。というのは、上述の犠牲者はみんな突然病気でたおれるまでは、わりと異常がなく、倒れたのちには、四十八時間以内に死んでしまつたからである。

炭疽病が気道を通じて伝染するということは、アメリカのやつた細菌戦についての研究との関係からみて大きな意味がある。というのは、一九四七年にデトリツク細菌兵器工場から公表された研究(付録二七、三五)は、合成培養基で培養すると新しい種類の炭疽菌をえることができるし、それらはとくに高い毒性をもつているばかりか、気道を通じてとくによく伝染することを示しているからである。

持ちだされた証拠を基礎にして、また自分自身の調査と、ひじように多くの専門家や素人の両方の証人を長い間しらべた結果を基礎にして、委員会としては、炭疽菌に汚染されたさまざまの生物体が中国のこの二省の方々にばらまかれたし、そしてそのために、この地方ではいままで知られていなか

つた致命的な伝染病、つまり肺炭疽病と、それによつてひきおこされる出血性脳膜炎がたくさんひきおこされたと結論するほかなかつた。疑うことのできない目撃者の証言は、それらの感染した物体をはこんできたのは、アメリカの飛行機であつたことをしめしていた。

大同事件（コレラ）

（北）朝鮮保健大臣がくわしい注意をはらうように委員会にすすめた事件の一つは、コレラによるある種の死亡例で、これは一九五二年五月いらい農村地帯におこつていることの例証になるものであつた。操縦士がなにかを見つけようとしているかのように、一時間以上も一台の飛行機が頭のうえを旋回している音のきこえていた夜（五月十六日）がすぎて朝早く、村の若い婦人が山腹で草をつんでいるとき、ある種の、蛤をいれた藁包を見つけた。かの女はいくつかの蛤をうちに持つてかえり、それを夫といつしよになまでたべた。そのおなじ日の夕方、両人は突然病気になり、次の日の夕方までに両人とも死んでしまつた。医学上の証拠は、死亡の原因がコレラであることを示していた（付録二

九）。そのほかにも、現地の郷土防衛軍がその山腹で蛤の包を見つけたが、朝鮮と中国の専門家のやつた細菌学的試験は、蛤がコレラ菌にひどく感染していたことを示していた。

この事件をくわしくしらべれば、しらべるにつれて、事件の全体はますます異常なものになつてきた。第一に、そのように感汚した海産の軟体動物（Meretrix meretrix）が田舎の真ん中の山の上に出現するということは、ひじように不自然な現象と見るほかない。そのうえ、この二人がコレラで死んだことは伝染病学的にみてひじように異常であつた。委員会は、提出された証拠によつて、コレラが朝鮮の風土病でないことを確信した。というのは、過去四十年間にたびたびコレラはおこつているが、それはいつでも海口から入つてきたものであることを跡ずけることができたからである。しかし、こんどの場合は、きつすいの農村地帯の真ん中であつた。その上、これまで五月に朝鮮でコレラが発生したことは、今世紀になつてたつた一回しかなかつた。つまり八月以前に発生することは、めつたになかつたのである。それから、見つけた蛤にもいくつかの特異な点があつた。朝鮮では蛤を売るのに、ふつうは藁につつまないし、それがその時現われたのも、ふつうの季節より一月ほどはやかつた。じじつ戦争がはじまつてからというもの、蛤は少しも市場に出まわつていなかつた。そして、

もしだれかが山腹の方々にわざわざその包をおきにいつたとすれば、厚い石灰質の蛤の殻の多くが、なぜ割れていたかを説明することはむずかしい。

けれども、その地域がどんな場所であるかをしらべてみれば、事実の連鎖に一道の光をなげかけることができる。蛤の見つかつたところは、その山の頂にある水揚げ場から約四百ヤード、いくつかの貯水池や泉の湧く池から約千ヤードばかりはなれた場所であつた。その水揚げ場は、これらの貯水池や池の水を汲みあげて、いくつかの海岸部落や港町に分配し、その水の一部は飲用水になるのである。蛤が現われた夜のまえの晩、アメリカ機は水揚げ場のちかくの浄水施設を小型爆弾で正確に破壊したが、ポンプ自体は被害をうけなかつた。委員会が自分でしらべた現地住民のくわしい証言（付録三〇）によると、蛤があらわれた第二回目の空襲の夜は、くらくて風があつたことがあきらかになつた。これらの事実はみんな、アメリカ側が、飲料水貯水池を汚染しようと計画的に注意ぶかくたくらんだこと、しかし蛤をおとした夜は天候状態がわるくて、操縦士が貯水池のありかを見つけだすことができなかつたので、その計画の大目的は失敗したことを明らかにしている。問題のその夜、貯水池は鏡のような水面を見せていなかつたのであろう。

とはいえ、海にすむまた少くとも河口にすむ辨鰓類の軟体動物の一種類が、それを淡水源にいれて、その淡水源を汚染するのに適していると考えたのだとするのは、やはりおかしなことであるかも知れない。ところが、ひじように興味ある証言は、コレラ菌が塩分の好きな有機体であることを、委員会に思いおこさせたばかりか、日本の研究文献のなかには、海水産軟体動物辨鰓類は、コレラの生長の媒介物として、ひじように適していることを示しているもののあることを明らかにした（付録三〇、三一）。この点は、この種の細菌戦の計画を復元するための最後の環になるものであつた。蛤は淡水のなかで浸透圧の変つたために、徐々に死んでゆくが、その間、それはコレラ菌にとつて自然の培養器として役だちついで死ぬると、コレラ菌を放散して、およそ三十日ぐらいのあいだ飲料水を汚染するのである（付録三〇）

そこで、委員会としては、アメリカ空軍部隊が、あらかじめ注意ぶかくたてた計画にしたがつて、まず大同浄水施設を破壊し、そのときポンプはこわさずに残しておき、ついで飲料水貯水池をコレラで汚染しようとしたものであると、結論するほかなかつた。死んだあの若夫婦は戦禍の荒廃のために貧乏になつていたので、その汚染の媒介にしようとした蛤のいくつかを軽卒にもたべたのである。

この実例は、蝿がコレラの人工的運搬者になることについて、別の場所（一一九〜一二六ページ）でのべた証拠との関係でも研究すべきものである。

容器または「爆弾」の型

さて容器または「爆弾」（かりに、ほとんどまたはぜんぜん爆発物を含んでいない兵器に、この言葉がつかえるとしたら）の型について、いくらかの注意をはらうべき時がきた。いろいろの時や所で、ことに瀋陽と平壌で、委員会はひまを利用し、生物体を空からおとすのにつかつたさまざまの容器をしらべることができた。それで、委員会のメンバーは、プラーグ文書のなかにのべてあることを立証することができたし、またそれにのべてある方法のどれよりも、もつとうまく工夫してある新しい方法をひじように詳しく研究することができた。すぐ後でよくわかるように、委員会の仕事は、ある一つの事情のために容易ではなかつた。その事情というものはまもなく明らかになつたが、新しい方法のなかには、「自滅式容器」つまりこなごなにこわれて発見が容易でない容器、またはその中味をお

ろしてしまうと自動的に引火して消えてなくなる容器のあることであつた。その上、プラーグ文書ぜんたいを通じて、それに委員会のあつめたその後の証言のなかにさえ、一すじの避けがたい混乱があつた。この混乱は、容器がおちてきたときにその場に目撃者がいた場合にさえ、その目撃者がかならずしも容器をさがし出せなかつた――その理由の一部はもちろん、何をさがしていいかまるでわからなかつたことである――ことに原因があつたし、また容器を見つけたときでも、それについての目撃者の説明が、当然必要なだけくわしくなかつたことに原因があつた。この混乱は不幸にも空軍将校捕虜の証言によつても一掃されなかつた。というのは、操縦士と航空士というかれらの地位からみて、かれらは爆弾や容器についてくわしく細かい知識をもつ資格がなかつたからであろう。またそれらの操縦士が出席した講義の一つで（クイン／アシフオーク、下記一六二ページと付録三八をみよ）、「われわれの爆弾はまだ実験の段階にあるし、爆弾にもいろいろの型がある」というはつきりした言明がやられている事実を記憶しておかねばならない。それでこの節の内容は、適当な保留条件つきで受けとつていただきたい。

容器には、さまざまな形と組立てのものがあるが、それはそのさまざまな用途によるものであろう。また、病源菌がついた生物を目標地点の上空に直接ばらまくこともできるように思われる。そこで以下では、まず、この方法、つまり容器をぜんぜんつかわない噴撒方法からはじめて、自滅式容器でおわるのが便利であろう。その中間には、あまり専門的な研究をへていないような仕掛の容器がはいるが、それにはパラシュートつきのものもあればそうでないものもある。

(一) 噴撒法。 NCNA/八五、四ページ(中国科学調査団朝鮮分団の報告)では、中国義勇軍の一兵士は、二月十一日アメリカ機一機が鉄原で九百フィートの高さから昆虫を噴撒させているのを、現実に見たという主張がなされている。これはアメリカ機の通過後6×3マイルの長方形地帯の雪のうえに、季節はずれの昆虫がたくさん見つかつたという事実から推測した以外のものではないように思われる。しかし、四人のアメリカ操縦士の証言はまつたくはつきりしたもので、別々の五つの講義で、噴撒がやれるし、またやられるだろうときいたという点で一致している。これらの供述の一つには(オニール、ISCK/四、付録三九)、飛行機のなかに取りつけた装置の図面があり、もう一人(クニス、ISCK/五、付録四九)は、六月から噴撒をはじめるということを、きいたとのべてい

る。しかし、前者の証人は、少くとも二月十八日から噴撒をはじめたと信じられるという理由をのべているから、あの中国義勇兵の推論は正しかつたのかも知れない。

噴撒でばらまく昆虫の種類についていえば、蚊のような弱い生物にはこの方法が適当でないことは確かなようであるが、蝿にはやれそうだということを指摘している議論もある（付録一二）。バクテリア、ヴイールスまたは毒素が、空中撒布の形でばらまかれるのは、もちろんこの方法であろう。

（二）非爆発体と紙包。 いくつかのプラーグ文書は、その中から昆虫がでてきたいろいろな色の紙包の発見について説明している。また二月十一日、鉄原の中国義勇兵は、三機のアメリカ機が非爆発物体を投げおとしたのを見たが、それは高さ八インチ、直径四インチの円筒状の黄色い紙包であることがわかつた（SIA／一、六ページ、SIA／四、五ページ）。その付近のほかの場所には、昆虫をいれた４×４×¼インチの矩形の灰色の紙包があつた。三月四日には平壌で白い紙包が（NCNA／八五、八ページ）、三月十日には昌道で褐色のが（NCNA／八六、六ページ）見つかつたといわれている。捕虜操縦士（イノツク／ウイルソンとクイン／アシフオーク、下記一〇五ページをみ

よ）の出席した講義のうちの二つでは、病気に感染した昆虫をつつむために紙をつかうことが説明された。かたい昆虫はただ紙にくるんだだけで低空からおとせるであろうが、紙包はすべての場合に金属製のビラ用容器、つまり「爆弾」のなかからでてきたものであるというのが、むしろ当をえていそうに思われる。この爆弾は空中で破裂してひらくのである。では、それに移ろう。

（三）空中爆發可変時限信管つきビラ爆彈。この容器の型は、朝鮮中国で発表されたすべての細菌戦の説明のなかに、いちばん多くあらわれるもので、これら両国当局のあつめた容器のうちで、たしかにいちばん普通のものである。委員会のメンバーは、この型の見本をたくさん見た。この爆弾はふつうのアメリカ製五百ポンドHE爆弾とだいたい同じ大きさと同じ形であるが、その重さはやっと百五十ポンドぐらいで、手で飛行機に積みこめる（付録四一）。この爆弾は円錐形の口ばしをもっておりその尖端は時限信管になっている。この口ばしの中は小さな空室になっており、その下につづく円筒形の爆弾の胴体は、三つの鋼製隔膜で四つの室に仕切られている。囲壁は縦にわれていて、蝶番にとりつけた片一方の半分がひらき、希望する瞬間にその中味を投げだすことができるようになっている。いちばん下の室の床から下では、囲壁はもう一遍小さくなつて、円錐形の空室をつくり、その空

室の側面から四つの尾ひれがとびだしていて、その底にはパラシュートをつけたときに、パラシュートがでるくらいの大きさの穴があいている。公表されている爆弾の寸法は、いろいろとちがつているが（NCNA／八五、SIA／一三、ISCC四など）、委員会がみ、また捕虜操縦士が説明した見本は全長約四フィート、直径一フィート二インチであつた。囲壁は　インチの厚さの鋼でつくつてあり、その四ツの室の全容量は一四・五ガロンくらいであつた。時限信管の長さは三インチよりすこし長かつた。標識は「ビラ爆弾―五百ポンドM一〇五組―アメリカ時限（―信管）―無内容」と読めた。捕虜飛行士のした説明によると、（付録三七、四〇）、爆弾の扉は、ほぼ百フィートの高度でひらき、だいたい三百フィートの直径にちかい面積の土地に内容をばらまくものと推定されている。

目撃者の典型的説明（付録）は一軍医のそれであるが、この軍医は、三月二十六日寧遠上空を旋回していた一機のアメリカ機が、急降下で二つの爆弾をおとしたのを見た。両方とも爆発のとき二つにわれて、長さ二百ヤード、巾百ヤードの地面に昆虫をいつぱいばらまいたが、その最高の密度は爆弾の破片がつくつた穴（深さ五インチ）のまわりの一平方ヤード百匹であつた（NCNA／八五、五ページ）。委員会は自分で目撃者をしらべる機会があつたが、その多くは農民で、これらの農民は遼東

省長白縣で、三月二十七日と三十一日に飛行機のおとしたこの種のビラ爆弾が、虫にとりかこまれているのを三つほど見つけた（ＩＳＣＣ／四、ＳＩＡ／一〇）、また平壌で、委員会は、これらの容器が取りまとめてあるのを視察したが、ここにはこの容器についての細目の表をのせておくことにする（付録二六をみよ）

号数	月日	時刻	所	道	摘要
二〇八	二、二六	夜	平原	平安南	ハエ、温度零下四度
二〇九	二、二八	暁	金化	江原	ハエ、300×300フィート 温度零下三度
二〇五	二、二八	午後八時	平原	平安南	ハエ
二一〇	三、一	朝	信川	黄海	ハエ、落下地点を中心の円形に、二千七百平方フィート、温度零下一度
二〇一	三、五	真夜中	文川	江原	ハエ、600×300フィート、昏睡
二〇七	三、一〇	午前四時	成川	平安南	ハエ、落下地点を中心の円形に

					直徑百五十フイート、最大密度一平方ヤード二十―三十迄
二〇四	三、二一	夜	文川	江原	ハエ
二〇六	三、二六	午前九時	寧遠	平安南	ハエ、落下地点中心の円形に面積百平方ヤード

上記については、後はただ四人の捕虜飛行士が、その出席した五つの講義のどれでも、この型の容器については可なり詳しい説明をきいたと、委員会に証言した点をつけくわえておけばいい。これらの飛行士は四人とも、かれらの飛行機につみ、かれらがおとした細菌爆弾は、この型に属するものであると信じていた（付録三七、四〇）。

周知のように、ビラ容器の使用については、国際新聞界で論争がもちあがつているが、アメリカ化学部隊の司令官は、それが生物体をはこぶのによく適していることを記録にのこしている（SIA／九、一ページ。NCNA／八五、五ページ。ISCC／四）。

（四）空中爆發プロペラつきビラ爆彈。 この容器は、上述の一変種であろう。口ばしの信管には小さな受動空中推進器つまりプロペラがついており、それが一定回数回転すると爆発がおこるものと思われる。この型については、委員会が活動をはじめるまえに公表された文献には、ほとんどのべていないし、それをつかつた証拠もない。けれども、捕虜飛行士のうけた講義の一つのなかには、この型についての説明があつた（オニール／マックロリン、下記一〇五ページをみよ）。

（五）プロペラでひらく扉つきビラ爆彈。 この型は、上記二種とその外見はおなじであろうが、口ばしの受動プロペラつまり空中推進器は、それが予定の回数を回転すると、爆弾にたてにとりつけてある扉をつぎつぎにひらく仕掛になつているようである。扉がひらくと、包が風にふきとばされる。この型についても、プラーグ文書は何ものべていないし、委員会も直接の証拠は見つけなかつたとはいえ捕虜飛行士のうけた講義の一つではこの型の説明がやられている。（クイン／アシフオーク、下記一〇五ページをみよ）。

（六）墜落後ひらく扉または側面つきビラ爆彈。 この型では爆弾の半面または、半面にある一連の

扉が、墜落の衝撃をうけたときにだけ、電池が作用してひらく仕掛になつている。つまり、墜落の衝撃で、電池のなかの隔膜がやぶれて、酸が極板にちかづいてゆくのであろう。この型は、プラーグ文書ではのべていないし、それが存在する直接の証拠もなかつた。しかし、捕虜飛行士が出席した講義の一つでは、これの説明があつたし（クイン／アシフォーク、下記一〇五ページをみよ）、この飛行士はのちに、その口供書のなかでそれをスケッチすることができた（付録三八）。これらの説明からみると、この型の爆弾にはパラシュートがついていたにちがいないと思われるし、かれらのきいた講義のなかで、病気に感染した昆虫をパラシュートでおとすといわれた容器は、この型であつたかも知れない（オニール／マックローリン、クニス／ホレン、クニス／マックローリン）、その一人（付録三九）は、のちにこのパラシュート容器がどんなふうな外観であるかをスケッチすることができた。

（七）絹パラシュートつき紙またはボール紙円筒。 委員会がじつさいに見た只一つのパラシュート容器の型は、照明弾につかうのに似ているといわれているものであつた。それは厚さ $\frac{1}{8}$ インチの側壁をもつたボール紙の円筒で、長さ一フイート二インチ、直径五インチであつた。われわれのみた見本には“USC 5/1—1—1952—Lot 100—F—6”（アメリカ容器、五／一―一九五二年―組一〇

〇F―六）としるしてあつた。それについていた絹のパラシュートは、わずか二フイート三・五インチの直径であつた。もはや指摘されているように（NCNA／八五、五ページ）、その大きさはふつうの照明弾パラシュートのわずか十三分の一で、ながい間空中に浮んでいることはできまい、と推定されている。また、ボール紙にぜんぜん焼跡のないことが指摘されているが、これは委員会のみた見本についてもたしかにそうであつた。この容器のみつかつた一つの場合には、それがどうも蚋を投下したものであつたらしいことは、たいへん意味のあることである。（江東、三月二十六日、NCNA／八五、SIA／一三）。この種の弱い虫（蚋 Ortho cladius）または蚊をはこぶには、このような方法をつかうのが、たしかに便利であろう。

（八）**紙パラシュートつき紙容器（自滅式）**。この興味ある型については、委員会も実物をみなかつたし、捕虜飛行士も情報をくれることはできなかつた。しかし、こういう仕掛のものは、一九五二年一月サンデー毎日にのつた榊亮平少佐の論文のなかにくわしく説明してある（付録一七）。その説明によると、この容器は強い紙でできていて、いくつかの室があり、また一定のおもりがつけてあり、それに取りつけてある信管は、適当な瞬間がくると容器と紙（または絹）パラシュートの両方に火がつ

くようになつている。榊の説明によると、容器が地上にとゞいてひらくと、生物体（ペスト感染の鼠）はしずかに逃げだすことができ、その後、たつぷりと時間をおいて火がつき、跡方もなくなつてしまうというのである。しかし、この機械は、地上二十フイートか三十フイートでその積荷をおろして軽くなつてからのち、火がついて消えてなくなるまでに、さらに遠くへ吹きながされるようにすることも容易であろう。榊がこのペスト感染鼠の容器使用についてとくにのべている事情を考えると、甘南事件には、この種の容器がつかわれたのではないかと考えたくなるが（上述六三ページ）、しかしそれについての特別な証拠はない。齧歯類を投下するために紙容器をつかう場合には、それらが容器をかみやぶつて出ないようにするため、動物どもをすくなくとも半麻酔状態にしておくことが必要になつてくる。委員会は、ただそういう点に注意を喚起するためにだけ、これらのことを記録にとどめておく。

（九）土器または陶器の爆弾型容器。第二次大戦中、日本の細菌戦部隊は、ハルビンちかくの特別工場ですくなくとも二つのちがつた大きさの「陶器」（じつは土器）製爆弾型容器をつくつた。その見本（大きい方は長さ約二フイート六インチ、小さい方は約一フイート六インチ）を、委員会は瀋陽

（奉天）でしらべた。この種の容器は、上記の論文（付録一七）で榊がやつているように、日本ではまだ細菌培養用に推奨されているが、委員会は朝鮮や中国で一九五二年にそれがつかわれた証拠を何もみつけなかつた。この容器は、むしろあらゆる容器の型のうち、いちばん巧みな、見つけにくい、「卵殼」容器の先駆者としての地位をしめているのである。

（一〇）**人造卵殼容器。**三月廿一日遼東省寛甸市外で、石灰質容器の破片二百以上と帽子型の鋼板一つ、それにそのくぼんだ表面にとりつけた金属軸一本をみつけた。その時の実情（ISCC／三に報告されている。付録二二）は、これらのものが、十二日アメリカ機のおとした容器の残骸にちがいないし、その中に炭疽菌のついた黒蝿や蜘蛛、鶏の羽をいれておとしたのだと考えるべき理由があることを示していた。この金属片と石灰質破片は、中国科学院近代物理学研究所と応用物理学研究所がくわしく研究して、この容器の原形を復元しようとした（付録）。

こうして、もとの容器は円筒状であり、すくなくともその一方の端は円蓋形であることが推察された。全長は一フイート三インチ以上で、軸の長さは十一インチであつた（付録二二）。鋼帽板の彎入

部の半径は五インチ足らず、板の直径は六五インチであつた。容器の石灰質胴体の半径は五・五インチであつた。石灰質側壁の厚さは一・一六インチよりすこし多く、外面の全部がアルミニューム塗料でぬつてあつた。X光線でしらべたところ、側壁の物質はおもに炭酸カルシュームであることが証明された。分光器でしらべてみたら、それにふくまれていた材料はおもに方解石であつたが、いくらかのマグネシュームもはいつていた。それから、ある種の方法によつて、このもろい方解石で箱をつくり、化学検査をしたら、有機物がふくまれていることがわかつたが、それはおそらく方解石粉を粘結するためにつかつたものであろう。こんなにもろい容器が、飛行機をはなれるときの衝撃にどうしてたえるかということは、まだ明らかになつていないから、事実にたいするわれわれの理解には、まだ何かの欠陥がある。

寛甸事件(ISCC/三)は、もはやSIA/三、三二ページとSIA/八、六ページに部分的に報告されていて、委員会は、その保存された石灰質破片をしらべることができた。しかし、それはこの種の事件のうち、委員会の注目をひいた只一つの事件ではなかつた。さいきん六月六日、碧潼(北朝鮮)ふきんに昆虫を投下したときは、フットボールの二倍くらいの大きさの銀の球が、むしろゆつ

くりとななめにおちてきたといわれている（付録二四）。これも上記の容器とおなじものであることは、ほぼ疑いがない。その上、北井子事件（ISCC／五、SIA／六、一ページ）についての一人の目撃者の説明は、アメリカ機が光る物体をおとしたとのべている。この場合にも、炭疽菌のついた大量の羽がおちてきた。その他の証言のなかにも（たとえばSIA／一〇、一ページ）、この種の型についてのべたものがあるが、それがたしかにそうであつたかどうかは、はつきりとしていない。いずれにせよ、委員会としては、三月と六月に鴨緑江の両側で、アメリカ軍がこの種の容器をつかつたことは、疑いがないと考えている。

（十一）その他さまざまな容器。 あとはただ、上にのべた以外のいく種かの容器もつかつた証拠がでていることを、つけくわえることだけが残つている。齧歯類については、円筒形の金網籠が（NCNA／八五、五ページ）と木の箱（NCNA／八五、六ページ）をつかつたといわれている。じじつ、こういうものが空から降つてきたとすれば、それはおそらくある種のパラシュート爆弾の中味の一部ではなかつたかとおもわれる。大同のコレラのときは藁包であつた（付録二九）。また手榴弾型の爆弾もあつたといわれている（NCNA／八五、六ページ、SIA／一三）。しかし、委員会は、

それを見なかつた。とはいえ、委員会のメンバーには、平壌ふきんで緑色の透明な昆虫容器をしらべる機会があつたが、これは弾丸のように打ちだされたものだといわれていた（NCNA／八五、五ページ、六ページ、SIA／一三）。細菌戦に砲兵が参加することは、アメリカ飛行士捕虜の出席した少くとも二つの講義のなかで言明されている（イノツク／ウイルソンとオニール／ウイリアムズ、下記一〇五ページをみよ）。しかし、委員会は、この種のやり方について榊がのべているようなものが、実際につかわれた証拠は見つけなかつた。榊がのべている方法というのは、ウエルチ菌（ガス壊疽）や破傷風菌をふくんだジエリーを榴霰弾にぬることである（付録一七）。とはいえ、中国軍塹壕の付近に一時しようちうあらわれていた綿入れの冬服用の綿には、パラチフス菌がくつついていたことがわかつた（DGMS、CPVEからの通信）。

（十二）投下した生物の地上撒布。この報告の付録やプラーグから発行されたこれまでの文書をよむ人たちは、いつでも目撃者たちが、ビラ容器「爆弾」の——ふつうほとんどひん曲つていない——残骸を中心にして円形の昆虫密集地帯があつたということを、話しているのに気がつくだろう。これはおそらく昆虫が、容器のひらいた真下の地点のまわりに、たいていいつでも集中的に撒布されるこ

とを意味するものであろう。

これらの場合のほかに、委員会は、投下された物体の地上撒布について二つの興味ある実例に注目した。その一つの場合（ＩＳＣＣ／五）（付録二七、二八）には、羽が落下地点から風にふきとばされて、長さ半マイル、底辺 1/4 マイル足らずの三角地帯にひろがつた。この三角地帯はだんだんと長さも長くなり、巾もひろくなつていつた。容器もその破片もぜんぜん見つからなかつたが、この場合の爆弾はおそらく卵殻型であつたものと思われる。もう一つの実例では、ひじようにたくさんの人蚤が、草木の生えていない、山腹で見つかつた（ＩＳＣＫ／三、付録二〇、二一）。この昆虫群は30ヤード×10ヤードの楕円形の地帯にひろがつていた。そして、その密度は、楕円の二つの中心つまり焦点の一つのあたりがいちばん高かつた。これはおそらく、楕円の長軸のうえを移動したある種の物体、おそらくパラシュート容器によつて、蚤が投下されたことを示すものであろう。

捕虜諜報員の証言

朝鮮当局は委員会にたいして、戦争がはじまつて以来、諜報員が北朝鮮におくりこまれていて、細菌戦についての疫学的情報をあつめて送るというはつきりした目的をもつて、仕事をしていることを知らせてくれた。これらの諜報員の多くは捕虜になつたが、かれらの自白はアメリカ側の諜報組織とこれの諜報員に命令された活動に大きな光を投げかけた。もはやSIA／一七のなかに、ある諜報員、たとえば一人の中国人と一人の朝鮮人とについてのくわしい情報が公表されている。

委員会のメンバーには、これらの諜報員の一人とながい時間会見する機会が平壌であつた（付録三六）。この青年は学校を中途でやめ、一九四五年南朝鮮政府の「青年団」に参加したが、アメリカ軍がついに撤退するとき、それについていつた。かれが北朝鮮に反対したおもな動機は、あきらかに政

治的信念よりも、むしろちつぽけな個人的利益であつた。

ほかに生活する道もなかつたので、この証人はアメリカ軍の補助情報部隊に参加した。かれは一九五一年十二月から一九五二年三月までのあいだに京城の「K・L・O」という組織でうけた政治上、軍事上、衛生上の訓練について説明した（付録三六）。その組織で、かれは、ほしいとおもう情報を手に入れる技術をおしえられた。細菌戦がはじまつたのは、まさにこの期間であつた。かれは二月のはじめ頃、たくさんの予防注射をされたが、それがどんな性質のものであるかは知らされなかつた。かれは出発の直前まで、外国軍の将校とはぜんぜん接触がなかつたが、いよいよ出発というとき、アメリカ軍の少佐が通訳を通じてかれに指令をあたえた。その指令のなかでは、かれの活動すべき特別の地域が指定され、アメリカ軍が知りたいとおもう病気の精密な細目があたえられた（チフス、ペスト、コレラ、脳炎、赤痢、天然痘）。この証人は、北朝鮮の統計資料の編集制度をおしえられ、できれば保健省その他の政府機関と接触してそれを手にいれ、必要とあればそれを盗みだせとの命令をうけた。またかれは、食べ物にとくに注意し、昆虫が伝染病をひろめた場所で夜をすごさず、煮たて水以外はのむなといわれた。「北朝鮮は病気でいつぱいだ」と、かれはきかされた、「しかし、おまえ

の注射が大丈夫おまえを守るだろう。」

そこで、証人は三月二十九日北朝鮮にもぐりこんで、五月二十日つかまるまで、つれていつていた無線電信技師といつしよに活動した。質問にこたえるとき、かれはむしろ口数がすくなかつたが、それは協力者をかばうためのもののようであつた。かれは、北朝鮮の保健要員との接触には、ほんのわずかしか成功しなかつたし、アメリカ軍司令部には、ほとんど、いやぜんぜん情報をおくることができなかつたといつた。

この証人は、北朝鮮に不法入国をするまえには、細菌戦をやつていることについて、何の示唆もうけていなかつたことを明らかにした。かれはただ、北朝鮮にはたくさんの伝染病があり、南朝鮮の軍隊は「いちばん近代的な科学兵器をつかつて、いい成績をあげている」ときいていただけであつた。かれが細菌戦について知つたのは、警察の告示を読んだのがはじめてであつた。

委員会としては、この証人の態度と、その使命やうけた指令についてのかれの証言とには真実性があること、この証言をうるためには、肉体的にも精神的にも、すこしの圧迫もくわえる必要はなかつたということに意見が一致した。そのほか、かれはむしろ、金を目あての傭兵的人物であるように思

われた。委員会としては、戦線の向う側から疫学的諜報員をおくりこんでくる公算がないとは考えなかつた。委員会は、この諜報員の任務が、細菌戦の効果についての情報を提供するにあつたことをみとめた。この結論は、アメリカ軍の積みかさなる罪証の塊に、あらたに一つの罪証をつみくわえるだけのものにすぎない。

捕虜飛行士の證言

一九五二年一月十三日、アメリカ空軍の、B—二六爆撃機一機が、朝鮮の安州上空で打ちおとされた。五月五日までに、その航空士K・L・イノック中尉と操縦士ジョン・クイン中尉は、じぶんらが細菌戦に参加したことをみとめたすこぶる長い供述をして、それが北京から世界に発表された。先にのべたように、これらの文書はSIA／一四と一五にそれぞれおさめてあり、またプラーグで発行された小冊子のなかにも、その原稿の石版刷りといつしよにしておさめてある。そのうちの細菌戦に関

係のある部分はこの報告書の付録にもいれておいた。SIA／一七と一八の両文書も参照すべきであるが、これらの両文書のなかにくわしく記してあるさいきんの会見記は、技術的、科学的にほとんど新しい証拠をつけくわえていない。

これら飛行士のおもな陳述のうち、大切なのはどの点であるか。まず第一に、両将校とも日本と朝鮮で細菌戦の方法についての秘密講義に出席せねばならなかつた。これらの講義は、極秘の情報をふくんでいるとの印象をかれらにあたえたが、培養細菌を直接くつつけたり噴撒させたりする方法、生物学的に、また機械的に病気を伝達する昆虫の使い方、齧歯類をパラシュート容器にいれてつかう方法、毒入りの食物の使用法、細説をくつつけた砲弾の使い方を説明したものであつた。各種の容器つまり「爆弾」を説明し、スケッチした。それを投下するための適当な高度や空中速力をおしえた。クイン大尉が出席した講義でなされたとくに大切な言明は、（a）「ほとんどすべての昆虫が病気の伝播のためにつかえる」こと、（b）「かならずしも必要ではないが鼠を落すことのできる」こと、そして（c）「はつきりした治療法のわかつていない」脳炎をつかう意図のあることであつた。

第二に、両将校とも細菌戦飛行をやる命令をうけとり、心の中ではひどくいやであつたが、まさに

その飛行をやつたことである。そのときつかつた特殊爆弾にはいろいろ風変りな点があつたが、操縦士たちがそれをあまり詳しくしらべることができないように、それらの爆弾は特別の監視下におかれる場合もあつた。ある一つの講義では、各種の容器を投下するのにいちばん適した飛行機の型がおしえられた。二人の飛行士は、たくさんの同僚たちがやはり細菌戦飛行をやつていたことを個人的に知つており、その後みんなとしやべつているうちに、細菌戦の訓練をうけた空軍々人のたくさんいることがわかつた。（SIA／一七）。イノック中尉は、「病菌爆弾」という言葉で飛行命令をうけたが、クイン中尉は「不発爆弾」という言葉で命令をうけた。しかし、両人とも、復命のときには（つまり飛行結果を報告するときには）、「不発爆弾」という言葉をつかえといわれた。

これらの告白が、西欧世界に大きた影響をあたえたことはうたたがいがない。しかし、細菌戦をやつていることを信じたくない人たちは、これらの告白は肉体的または精神的な脅迫をうけてやつた自白であるとあつさり片づけて、たつた二人の青年がそういつてるだけであるといつたり、そんな青年はほんとにはいないのだとか、あの陳述はみんなつくりごとだとかほのめかしたりする傾きがある。しかし、クインのした話のなかに、矛盾のあることを証明しようとした企ては、失敗におわつた。

(SIA/六一)

こういう事情のもとでは委員会が、朝鮮での予定会合場所の一つで、上述の将校二人とだけでなく、さらにもう二人の将校F・B・オニール中尉とポール・クニスに会うことができたのは、たいへん重要なことであつた。これらの二人の説明はもつと長く、そしてもつとくわしくさえあつた(付録三九、四〇)。委員会にとつては、この四人のアメリカ飛行士に会つていると、まるでアメリカ生活のりつぱな横断面のまえにたつているような気がした――一人は冷静な頭脳をもつた電気技師、一人は中産階級の商人、一人は若い化学研究者、あとの一人は農村出身のガッチリした製鋼工場労働者であつた。委員会は、自由に談笑できる条件のもとで、これらの人たちとながい間話しあつた。委員会のメンバーは、これらの戦時捕虜にあのような陳述をさせるために、肉体的であろうと精神的であろうと、少しも圧迫をくわえなかつたということに意見が一致した。それらの陳述は、かれら自身の自由な意志によつてなされたものであり、しかもかれらを捕虜にした中国人や朝鮮人の友情と親切をながいあいだ経験して、自国政府の軍事上の秘密とおもわれるものをばくろすることにたいする当然の躊躇よりも、あらゆる人種と人民にたいする義務の方が、もつと大切であることを自覚したのちにな

されたものであつた。会談の大部分は、飛行士らと委員会のメンバーとのあいだの質問応答であつたが、一人一人の飛行士が、会見のはじめに、文書になつているのとだいたい同じような証言をし、良心にみちびかれてたつしたその信念にはまちがいがないと、おごそかに誓つて、その証言をおわつた。これらの証人たちの陳述（ＩＳＣＫ／四と五）と、このときの会見についての資料をふくむ註釈とは、付録として本書につけてあるから、ここではもはやそれについてとやかくいう必要はない。しかし、文書にした陳述と質問応答からみて、一九五一年のおわり頃から一九五二年のはじめにかけて、アメリカ空軍のなかで、どんなことがやられていたかを明らかにすることが、もはやできるようになつたと思われる。何がやられていたかはつぎの表からわかろう。

一九五一年六月――クニスは、敵が細菌戦をやるかもしれぬというのでひらかれたアメリカ情報部のローリーの講義に出席した。

〃　八月廿五日――イノツクは、日本でウイルソンの講義に出席した。「アメリカは細菌戦をやる計画をもつていないが、敵がやるかもしれない」

〃　十月――イノツクは、朝鮮でブラウニングの講義に出席した。おなじ言明。

〃　十二月一日——オニールは、朝鮮でアシフオークの講義に出席した。細菌戦をやる意図について

はつきりした態度をしめさなかつた。

〃　十二月——イノツクは、朝鮮でもう一遍ブラウニングの講義に出席した。十月とおなじ言明。

〃　十二月十八日—クインは、朝鮮でアシフオークの講義に出席した。「敵が細菌戦をやるかもしれないので、それにたいして備える必要」。

一九五二年一月三日——クインの第一回目の細菌爆弾飛行。下命も復命も「不発爆弾」という言葉でおこなわれたが、ほかの事情から、かれはそれが何であるかを知つていた。

〃　一月六日　——イノツクの第一回目の細菌爆弾飛行。「病菌爆弾」という言葉で下命されたが、「不発爆弾」という言葉で復命した。

〃　一月二十二日—オニールは朝鮮でマツクローリンの講義に出席した。細菌戦はきつとやられるにちがいないという言明。

〃　二月十五日——オニールの第一回目の細菌爆弾飛行。「病菌爆弾」という言葉で下命され「空中爆発VT」という言葉で復命された。

〃　二月十八日―オニールは、とくべつな設備をほどこした飛行機から、噴撒方法で細菌をまいているのをみた。

〃　二月二十二日―クニスは、アメリカでホレマンの講義に出席した。細菌戦をやつていることとはつきり否定したが、アメリカ軍が細菌兵器をもつていることはみとめた。

〃　三月二十一日―マツクローリンの講義に出席した。一月一日いらい細菌戦をやつていることをはつきりと言明した。アメリカ政府は、できるかぎり長い間、それを否定するだろうというはつきりした言明。

〃　三月二十七日―クニスの第一回目の細菌爆弾飛行。「高射砲制圧爆弾」という言葉で下命、「飛行結果を観測せず」として復命させられた。

上記の事実からみて、北朝鮮と中国で細菌戦をはじめるという命令は、一九五一年の末にはでていたにちがいないし、細菌活動をやるための空軍要員の訓練は、その前から用心ぶかい訓話によつてすすめられていたが、かれらにどのような活動が期待されているかは、一九五一年一月いごでも、かれ

らがじつさいに朝鮮の土地をふむまでは、かれらに知らされなかつたという結論が、どうしてもさけることはできなくなる。アメリカと日本の基地では、細菌戦というものは、理論上そういうことがやれるという、純粋に防衛的な性質のものであるといわれた。しかし、飛行士たちは、朝鮮の基地についてみると、自分らの到着するより数週間または数カ月もまえから、もはや細菌戦がやられているのを見てびつくりした。その一般命令は、開城の休戦会談がすすんでいる最中にだされたにちがいないという事実を、かれらは見のがしはしなかつた。

そのほか、飛行士たちから別々にきいた証言のなかには、興味のある点がいくつかあつた。捕虜の銃殺を禁止するというような公認された戦争慣行について教えをうけた記憶がかれらにぜんぜんないこと、アメリカ軍の操典のなかでそれについての規定をぜんぜん見たことのないこと、ましてある種の戦争の形態は少くともある種の国民によつて禁止されているのを少しもきいたことがないということなどは、注目にあたいする。つぎに証人たちの証言は、細菌爆撃をやれという命令は、かれらの同僚の士気にみじめな影響をあたえるにちがいないという点で一致していた。そういう命令がでることは、かれらの多くにとつて最後の藁ぎれ（破滅のもとになる小さな最後の事件）であつた。というの

は、かれらはもう、北朝鮮の市民を屠殺するようにかれらをけしかける兇悪さにむかむかしていたからであつた(付録四一)。これらの証人が、捕虜になつたのちに、朝鮮人や中国人――この両国人は武器をすてた人たちをもはや敵とは考えていない――から友情にあふれた取扱いをうけたとき、どんなに大きな感情の激変を経験したかは、十分に想像することができる。

会見した将校たちは、どんな型の容器がつかわれているかは、あまりよく知らなかつたようであるが、それは、操縦士や航空士としてのかれらは、兵器将校がもつているほどの知識を、あたえられていなかつたからであることは疑がない。またかれらは、つかわれている生物材料がどこからくるかについては、ほんの推察しかできなかつたが、かれらのうちのあるものが、それは日本からくるのかも知れないと考えていたのは意味ぶかいことであつた。

八月中のある新聞報道は、石井四郎の元助手で小沢という人間が日本で飼育場を経営しているのが見つかり、そこでは月十五万匹の齧歯類が生産されているという意味のことをのべていた。この情報は、甘南事件の解決をたすけるかも知れない。

要するに、委員会としては、細大もらさぬ会談と直接の個人的接触の結果として、委員会のまえで証言した将校たちの誠実さをうけいれ、その正直さを支持すべきあらゆる理由をみとめた。かれらはまつたく正常であり、かんぜんな健康状態にあるようにみえ、かれらの話ぶりは自然で、その態度は気楽にくつろいでいた。これらの飛行士は、少しの肉体的、精神的圧迫もうけておらず、かれらの待遇は中国人のヒューマニズムの最善の伝統といえるものであつたことを、委員会はもう一度確認する。それで、委員会としては、これらの飛行士の証言を真実であり、信頼できるものとして受けいれるわけであるが、それらは、これまで現地であつめた厳密に科学的な、そして実証的な証拠をじつにたくさんの点で補足するものであつた。

新中國の衛生

委員会は、中国人民の現在の衛生状態と、その衛生水準を引きあげ、また伝染病の蔓延をふせぐた

めにとられている処置とにふかい印象をうけた。これらの処置は効果的であり、また完全である。中国人民はひどく不満足な衛生状態のなかで暮らしているという考えが、西洋では広くひろまつているが、いまの中国の一般的な状態と、政府のだす保健上の指令を実行するときの中国人民のあの熱情とを、表面的にでもいいから、直接知りさえすれば、そういう考えを追つぱらうのに十分である。

過去数年間にもたらされた異常な進歩をしめすためには、二三の数字をあげるだけでたくさんである。中国東北では、一九五一年に三千五百万匹の鼠がころされ、一九五二年の春には一千万匹の鼠がころされた――これは、世界のほかの地方には前例のない鼠にたいする戦争であつた。蠅やその他病気の運搬者になりうる昆虫にたいする斗いは、じつにありとあらゆる面ですすめられており、北京はほとんど一匹の蠅や蚊もいない都市になつてしまつた。解放前には、種痘は数がすくなくて、効力がたりず、一年間に種痘した最大の人数(一九四六年)は七百三十万にもたりなかつた。しかし、解放後三年間に三億七百万人が種痘して、天然痘はほとんどかんぜんになくなつてしまつた。助産婦を再教育したおかげで、一九四九年から一九五一年までのあいだに初生児破傷風からくる死亡率は三分の一ほどさがつた。全体としての幼児死亡率は、このおなじ期間に半分ほどへつてしまつた。伝来の漢

方医学をやつていたたくさんの開業医が、この一大保健運動に助手として動員され、かれらにも近代医学の訓練―これを受ければ、かれらにもりつぱな役割がはたせる―をうける能力があるし、意志もあることを証明した。北京の他の大都市では野良犬がぜんぜんいなくなつたが、それらの犬は脳炎ヴィールスの貯水池であり、たくさんの伝染病の運搬者であるとの嫌疑がかけられていたものであつた。そのほか、ワクチンや血清をつくる製薬所の組織と生産能力がうんと進歩した。委員会は北京でこの方面の施設をたずねてゆき、その能率、高度の生産量、そしてすぐれた科学的研究能力に感心した。

保健運動は、北京やその他いくつかの「模範」都市だけにかぎられているものではない。信頼できる報告者によれば、それはこの亜大陸のいちばんへんぴな隅ずみにまでひろがつているといわれている。一つの団体としての委員会は、東北旅行のときに、そのことを直接自分で見ることができた。この旅行のときには、内蒙古の境界にそつた黒龍江省北部のへんぴな場所をおとずれたのであるが、委員会のメンバーは、村々の清潔さにひどく感心したものである。

解放いごは、これまで他のどこでもやつたことのないような巾と範囲の大きな保健教育運動が、じ

じつ中国でおこつている。それがいままであげたような成績をあげるためには、男や女や子供など全人民の一人一人の心からの協力が必要であつた。これらの人たちは、積みかさなつたガラクタのとりのけ、田舎や荒れ地の念いりな清掃、窓の遮蔽、各種の毒虫との斗い、殺虫剤やワクチンの生産と使用――公衆保健の一般水準をたえず急速に引きあげるありとあらゆる事柄を考えついて、感激をこめてそれを徹底的にやりぬいた。基礎教育は利用のできるあらゆる教育手段によつて、大きな集会やポスターによつて、絵本と壁新聞や新聞によつて、また舞台からも銀幕の上でもやられてきた。

細菌戦争またはその疑いのある場合にぶつかつたとき、中国の農民大衆は何をなすべきかをちやんと知つていて、すこしの混乱も恐慌もなくそれをやつてのけた。委員会は、中国農村の多くの方面からやつてきたひじようにたくさんの証人と直接あつたおかげで、数百、いや数千数万の普通人が、中央や地方の保健部（省にあたる）の指令に指導されて、規律ただしい行動をとりながら、田畑や街を隅から隅までさがしあるき、空から降つてくる容器のはきだしたありとあらゆるものをみんなあつめては殺しているありさまを、まざまざと思いうかべることができるようになつた。

今日の中国の衛生上の進歩は、相つぐ国際衛生機関が、これまでいくらか漠然とした形で勧告してきた処置を積極的に遂行したという結果になつている。このように短い期間に、このように多くの進歩をとげるということは、中国政府が人民の各階級層の無条件的な支持をえていなかつたならば、とてもやれなかつたであろう。農民に工場労働者、学者に宗教団体が、政府のめざす目的にさんせいして、その達成に最善の努力をつくしている。

概観

さて、ある種の事実は表の形にまとめることが有益である。これにはプラーグ文書のなかにそのあらましがのべてある事実だけでなく、六月、七月、八月中に調査のため委員会にもちだされてきた事実もいれねばならない。わりにはつきりしている一定数の事件を、折りたたみ表（付録七）におさめておいた。その各々の事例に、索引番号、日付、場所と事情、飛行機の通過がみとめられたかどうか、何か物のおちるのが見えたかどうか、容器がみつかつたか、どんな場所に昆虫その他の生物の異常な

密集がみられたか、またできる場合には動物の密集度についての注、および昆虫学上のまたは動物学上の同定、細菌学的試験の結果や疫学上の観察を書きいれておいた。この表にふくまれているのは、ほんのわずかな数のわかつている事件だけであることを、諒解していただかねばならない。

この概括表からあきらかなことは、微生物病原に感染した生物が出現したときに、かならずしも人間の病気が、おこつていないことである。その理由の大半は、事件のおこつた地域の都市農村の住民が、空からばらまかれたように思えるどんな動物やどんなものでも、みんなさがしだしてすばやく殺してしまつたことである。そういう活動が非常に効果的にやられたので、表がしめしているように、多くの場合生物学的検索のために必要な標本さえも残らないほどであつた。また、その他の場合には細菌学的検索の結果、めざした型の病原体が見つからないことがあつた。

敵機の中国東北侵入は、今年になつてからひじように多く、その大部分の場合に爆発のおこる爆撃をやらなかつたことは、ここに記しておく価値がある。二月二十九日から三月二十一日までのあいだに、アメリカ機九百五十五機が百七十五編隊にわかれて中国東北の上空に侵入した。その地域は遼

東、遼西、吉林、松江、黒龍江の七十県におよんだ（SIA／三）。これとおなじような別の数字もあげられていて（NCNA／八五、SIA／一三）、さいきん中国上空の侵犯はへるどころかむしろ多くなつている。たとえば、八月七日までの一週間に、アメリカ機三百九十八機が七十九編隊にわかれて中国領土上空に侵入した。

事件が中国東北で、どんなふうに地理的に分布しているかも興味がある（付録七地図をみよ）。四月の末までに分析のゆきとどいた事件だけをとつてみても、その大多数（十八件）は朝鮮国境の大部分に接している遼東省でおこつた。ここで目につく事実は、報告される事件のほとんど全部が、いつでも鉄道や幹線道路のちかくでおこつていることである。いちばんへんぴな州の黒龍江でおこつた八つの事件についても、おなじ特長があるのは注目すべきである。そこでは、チチハルとハルビン以北の鉄道の一つが、大きくS字形にまがつて、その側面は百マイルかそれ以上もあるが、事件はみんなその沿線のあちこちでおこつたのである。

これまで公表された文書は、一方では、感染昆虫と人間の病気との関係についての細菌学上のまた

疫学上のくわしい証拠をあげており、他方では、昆虫と飛行機の通過との関係についての証拠をあげている。しかし、それらの文書にあげてある材料は、しばしば不完全なものであつた。このことが一つの理由になつて、委員会は、これまでの諸節でくわしくのべた准陽、甘南、寛甸、遼東、遼西、大同などの事件について、中国と朝鮮の科学者の協力をうけ徹底的な調査をやつたのである。これらのすべての調査からみて、飛行機と病菌運搬者と人間の病気とのあいだの関係は、もはや論争の余地がなくなつた。

この報告書のはじめのところで、事件を分析する方法について説明しておいた。さていままでは、いちばん十分に分析した実例から材料をあつめて、それらを一つの一覧表にまとめるときがきた。こういうふうにいろいろの型を比較対照してみると、そこに一つの組織的な計画がはつきりと浮かびあがつてくる。飛行機はいつでも見たか聞いた人がおり、その進路もしばしば記録されている。そして捕虜飛行士の陳述が、あとでそれを補足している。ついで、表のなかには、容器の落下についての必要な資料、つかつた病菌運搬者とそれについての変則的な点、細菌学上の試験、さいごに臨床例がでてくる。

これらすべての事実について、委員会は、多数の普通中国人から話をきいたり、かれらに質問したりした。委員会のメンバーは、これらの証人が誠実であり、鈍重なほど正直であつたことを確信している。かれらの証言の特長は、すこぶる簡単明瞭であることであつた。

つぎに専門的な問題についていうと、委員会は、朝鮮のペストが、まだペストが風土病になつている中国東北(満洲)の諸地域から入つてくる交通によつて運びこまれたのではないかという可能性を考えてみた。なぜこの可能性を否定したかについては、いくつかの理由がある。第一に、朝鮮の新しい流行中心地と上述の風土病地帯との中間にある地方に、いつでもいいがペストがおこつたという報告がなかつたからである。第二に、このペストの発生には、季節的にみてひじように重大な変則的な点があつたからである(付録七、一八、一九をみよ)。第三に、ペストの場合には、人間のペスト流行がはじまるまえにペスト菌の寄生した死んだ鼠があらわれるのが特長であるが、それがぜんぜん見つからなかつたことである。第四に、診察の結果がしばしば病気発生前の飛行機の通過やその病気に適当な病菌運搬者の撒布とあきらかに関係のあつたことである。最後に、これらの両国の国境でひじように厳重な衛生上の予防手段が、中国と北朝鮮によつてとられているし、またはじめからとられていたことである。

媒介体の病気 季節の変則 位置の変則 病気の型の変則	ついで人間におこつた病気 季節の変則 位置の変則 病気の型の変則	動物またはその他の媒介体 細菌学的試験	動物またはその他の媒介体 集中度のたかい変則 季節の変則 位置の変則 種の変則	噴撒法をつかつた疑い	容器、みつけた	投下、物のおちるのをみた	飛行機、きいたまたはみた 進路を記録 乗員を訊問	
	+++	+	+ +				+	安州（朝、ペスト） SIA/1,4
		+	++++		+	+	+	Cheum-Dom （朝、ペスト） SIA/1
++++		+	++++				++	甘南（中、ペスト） ISCC/2
	+++	+	+ +	+			+	江西（朝、ペスト） ISCK/2
		+	+ +				+	准陽（朝、ペスト） ISCK/3
		+	++++		+	+	++	寛甸（中、炭疽病） ISCC/3
	++++	+	+++			+ + +	++ ++ ++	遼東（中、呼吸器炭疽気） ISCC/5
	+		+			+	+	碧潼（朝） 付録S20
			++++		+ + +	+ + +	+	長白（中） ISCC/4
	++++			+			+	鞍山（中、脳膜炎） ISCC/6
	+++	+	++++		+		+	大同（朝、コレラ） ISCK/1
		+		+	+	+	+++	捕虜飛行士（ISCK/4,5） 付録CC(30)DD(31)

いくつかの病気は、たとえば炭疽病のように、人間にたいしてと同様、家畜にたいしてもつかわれた（NCNA／八五、付録二七）。ある種のばらまかれた媒介体には出血性敗血症菌 Pasteureru-ultpocida (septica) の発見が確認されたが（付録七、表）、それは実験用動物にあまりにもふつうの伝染病であるから、はじめはさして重要なものとは思われなかつた。しかし、それは家畜にたいする武器としてつかわれたものであるかも知れない、と想像していい理由がある（付録四三）。

コレラ菌については、さきに研究したくわしい実例（大同）の場合、汚染した軟体動物のなかからあらわれたけれども、昆虫とくに蠅から見つけた場合も少くなかつた（付録七）。このことはチフス菌とパラチフス菌、それに志賀赤痢菌についてもあてはまる。これらの病原体は、これまでこれらの病気がぜんぜんなかつた地帯で、蠅の大群から発見された。そこで、手当り次第につかまえたふつうの蠅の内部かまたは外部に、この病原微生物がいるのではないかという問題がもちあがつた。現在の戦争がはじまる数年まえに発行された中国の医学文献のなかには、まさにこの問題について対照実験となる研究がふくまれている（付録四）。それによると伝染病の非流行期には、ふつうの蠅はチフスまたはパラチフス熱の細菌やコレラ菌をおびていないことを示していた。この問題に関連のあ

る付録には、ことし瀋陽（奉天）でやつたおなじような研究についての新らしい記録がはいつている。

これと関連のある一つの問題は、昆虫の細菌運搬についての研究に定量的研究方法をつかうことである。この問題はとくべつの付録（三）でとりあつかつた。

昆虫媒介体の演じた役割について、もはやプラーグ文書その他でいわれていることを補足するために、いくらかの言葉をつけくわえておかねばならない。一つの付録（八）は、ばらまかれた昆虫の動物学的同定にあてた。もう一つの付録（二）は細菌戦に関連のある医学的昆虫学上の問題を一般的に研究するうえで、読者をたすけるであろう。

これまでの報告のなかには、いくつかの疑問があり、とくに朝鮮での事件についてそうであつたが、それはまだ解決していなかつた。そこで、委員会は、平壌滞在中、保健大臣李炳南氏に一連の質問（付録九）を提出したところ、その回答はやがてえられた（付録九）。その結果、飜訳のまちがい

がいくつかあつたことが、あきらかになつた。さいしよの朝鮮の報告（ＳＩＡ／一）にでつかつてある「ダニ」という言葉は、じつさいには赤虫 Trombicula akamusi をさすものであつた。またおなじ文書のなかには蝙蝠に寄生する蠅 nycteribiid flies についてのべてあつたが、これについては、これらの昆虫が細菌戦に関係があることは論証できない、といまでは考えているという報告を、朝鮮当局から委員会はうけとつた。

けれども、サルモネラ属やシゲラ属で汚染した死んだ魚が一度ならず山腹にあつたのが見つかつたという言明については、確認をうけとつた。この種の現象は、いつでも飲料用水源のちかくでおこつたことが力説してあつた。この点は、委員会がくわしく研究した大同事件（七六〜七九ページと付録三〇）を思いおこさせるが、そこではコレラを伝播しようという意図がはつきりとあらわれていた。

西欧科学者の好奇心をとくに呼びおこし、委員会としても真剣な関心をはらつた一つの問題は、飛行機の通過後に発見された「凍結乾燥した蛋白性物質」の問題であつた（ＮＣＮＡ／八五）。それはいくつかの塊になつて発見されたが、粘着性と吸湿性をもつており、雪の表面におちているとき水を

すいこんでいた。化学分析の結果、それは蛋白質の分解物――プロテオーゼ、ペプトン、ポリペプチッドから成つていることがわかつた。細菌学者は、それからマンニツトを発酵する赤痢菌を分離した。委員会が朝鮮で活動していた期間には、この種の事件はぜんぜんおこらなかつたので、朝鮮軍の報告を基礎にするほかなかつたが、これは、凍結した乾燥細菌培養をそのまま投下したものであるとの仮設が十分になりたつことがわかつたし、保健大臣自身がそれをみとめていた。

ひじような低温という事情のもとで昆虫をばらまく問題については、捕虜飛行士が、その証言のなかで、とくに寒さにたいする抵抗力をつけた昆虫を生産する方法についてのべていることを、委員会としては指摘しておく(とはいえ、そういう主張をかならずしも裏書きするものではない)(付録三九)。

ずつとまえの節(三七ページ)で、飛行機のばらまいた十八種の昆虫と蜘蛛について説明しておいた。そのうち九種類が病原微生物に感染していたことが、細菌試験によつてはつきりと断罪された。その他のものはどうであつたか。委員会としては、それらがぜんぜん感染していなかつたとの結論をく

だすことはできなかつた。いつたいどんな細菌をさがしていいか正確にわかりもしないときに、これらのものから病原微生物をとりだすことはむずかしいのだ。まだまだ考慮すべき可能性は多いのである。

細菌戦についてのアメリカ側文献のなかには、朝鮮でみられることと矛盾するものがいくつかある。まだ淘汰されないで通用しているそれらの著作のなかにある、或る種の判断は、委員会の観察とはほとんど一致しない。ある種の重要な事例では、技術上の進歩がかれらの意見をかんぜんに時代おくれにしてしまつたように思われる。ペストの場合は、その典型的なものである。十年まえ、ローズベリーは、ペストを戦争目的のために有効にひろめることはできそうであるが、しかし、それは味方の領土に伝染する危険が大きいので、戦線からはるかに遠い地域にかぎられるという保留的な意見をのべた。委員会は朝鮮で、デトリツク細菌工場の前所長でひろい経験のあるこの細菌学者の意見とは逆に、戦線からほど遠くない場所でペストをひろめる企図がたびたびくりかえされたことをあきらかにした。しかし、この対立は表面的なものにすぎない。最近十年間に、消毒技術はどえらく進歩した。一方、ますます効力の大きくなる新しい殺虫薬がさまざまに配合されてつくられ、他方、これら

の薬剤を大量にまた最短時間に雲のようにばらまく、高能率で、ふつうの人でも十分取りあつかえるほど簡単な機械が発明された。これらの機械は、第二次世界大戦中に発達した煙幕器から生れてきたものである。

実際の経験によれば、これらの方法が、昆虫媒介体のひきおこした病気を、領土全体から駆逐するためにつかえることはあきらかである。さいきん発表された報告によれば、朝鮮にいるアメリカ軍はそういう機械をもつていて、「将来の戦争ではふつうの手段や方法で事態に対処するのでは、不十分なことがあきらかになるかも知れない」というので、それらの機械のもつ意味を力説している（付録）。

これらの材料は、文献と戦場でみる事実とのあいだの表面的な矛盾を解決するのに十分である。これらのことは、すくなくとも部分的には昆虫の媒介するほかの病気にもみなあてはまるし、朝鮮でみる一般的な傾向が昆虫媒介体をつかう方向にむかつていることを説明するのに役立つている。今まであげた例は典型的なものであるが、細菌戦をやる可能性を、自然状態の現象にだけかぎることはできな

い。技術と科学の進歩は、どんなことができるかの範囲をひろげ、この場合のように表面的な矛盾に照明をなげかけるのである。朝鮮にいるアメリカ側が昆虫媒介体をほとんどかんぜんに制圧できれば、さつきの文献にあるような保留をつける意味はなくなつてしまう。

それとおなじ理由で、委員会は、細菌やヴィールスや毒素を空中噴霧機でまくのが、細菌戦のただ一つの有効な方法であると考える人たちに同意することはできない。この点では、日本人の経験（上記三〇／三四ページをみよ）を、いまでは一段たかい水準で利用することができるのである。

けれども、委員会のしらべた実例のうちの一つ、つまり中国東北の遼東省瀋陽（奉天）と鞍山の両市で流行した脳炎の実例（SIA／三、八。〇〇〇一〇）は、ヴィールスを直接空中撒布の方法でばらまいたのではないかという問題をもちだしている。委員会としては、このことについてしつかりした結論にたつすることはできなかつた。というのは、病気と飛行機の侵入とのあいだにはつきりした関係のあることを立証することはできなかつたからである。とはいえこの事件の証拠はじつに混乱しているので、それについての文書はぜんぶ付録にいれておく（ISCC／六、付録三二、三三、三四、三五）。

委員会は、朝鮮、中国市民の死亡総数や罹病総数、それに死亡率などを世界に発表する立場にはいない。それらを発表することは、これらの死亡や病気の責任をおうべき人たちに、これらの人が必要とする最後の資料をあたえることになるのだから、望ましいことではない。そういう情報は、委員会が専門的意見をのべることを請われた事件の証拠としては必要でない。必要なことのすべては、委員会の確認したことがらを知ること、つまりたくさんの人間が孤立した地点でまたは伝染病の流行のまんなかで死んでいき、しかもその時の事情がすこぶる異常であつて、それらの伝染病の出現の跡をつけてゆくと、いつでもアメリカ空軍の活動にかえりつくということを知ることである。大切なのは、もはやおこつたことと、これからおころうとしていることから、世界が警告をうけとることである。すべての人民が、途方もない危険のともなつているこの種の戦争の潜勢力を知らねばならないのである。

結論

一九五二年のはじめいらい、朝鮮と中国にひどく異常な性質の現象がおこつているので、これらの

国の人民と政府は、アメリカ軍が細菌戦をやつているのだと主張するようになつた。細菌戦に関連のある事実をしらべるためにつくられた国際科学委員会は、現地に二ヵ月以上もいたのち、いまその活動をおわるところまできた。

委員会の面前には、大量の事実があらわれたが、そのうちのいくつかは首尾一貫した型をしめしており、これらの型は高い論理性をもつていることがあきらかになつた。そこで委員会は、その努力をとくにそれらの型の研究に集中した。

委員会は、つぎのような結論にたどりついた。朝鮮と中国の人民は、たしかに細菌兵器の攻撃目標になつている。この兵器をつかつているのはアメリカ軍部隊であり、その目的に応じてじつに種々さまざまのちがつた方法をつかつているが、そのうちのいくつかは、第二次世界大戦中日本軍のつかつた方法を改善したものであると思われる。

委員会は、論理の階段を、一歩一歩のぼつて、そういう結論にたどりついた。委員会としては、い

やいやながらそうなつたのである。というのは、委員会のメンバーは、こんな非人間的な技術を、各国人民の総攻撃の面前で、じつさいにつかうことができるなどとは、信じたくなかつたからである。

いまこそ、すべての人民は、その努力を倍にして、世界を戦争から守り、科学上の発見が人類の破滅のためにつかわれるのを食いとめねばならない。

付

錄

四十六件の付録表

一、委員会の会議の月日順概要。
二、昆虫媒介体による病気伝染の原理についての概観。
三、昆虫のはこんだ細菌の定量的研究についての覚書。
四、中国のふつうの蝿による病原の機械的運搬についての覚書。
五、瀋陽（奉天）にも自然的にいる蝿が腸内病原菌または炭疽菌をくつつけているかどうかをきめる研究（ISCC／八）。
六、瀋陽と寛甸の両市で採集した鶏の羽の現地標本が、炭疽菌をくつつけているかどうかをきめる細菌学上の研究（ISCC／九）。
七、北朝鮮と中国東北区（満洲）でおこつた事件の概括表。プラーグ文書でのべている事件のうちわりと重要なものいくつかをふくむ。
八、撒布された昆虫についての昆虫学的資料（ISCC／一〇）。確認された昆虫の種類の表。異常

昆虫の出現の変則性をしめすグラフ。一九五一—五二年の冬期温度の前年比グラフ。

九、（北）朝鮮保健大臣にたいしてした質問（平壌、一九五二年七月三十日）と受とつた答え（北京、八月二十一日）。

一〇、a　アメリカ機が中国東北と北朝鮮にばらまいた菌類のくつついている植物物質についての報告（ISCC／七）。

b　アメリカ機が北朝鮮と中国東北にばらまいた南朝鮮産植物の葉二種についての報告。

一一、湖南省定徳のペストについての報告（一九四一年十二月十二日）（ISCC／一）。

一二、日本の細菌戦のいくつかの様相についての覚書（ISCK／六）。

一三、黒龍江省甘南県にアメリカ機のおとしたパ四二・ペスト菌に感染した野鼠についての報告（ISCC／二）。

一四、甘南事件の聞きとり書。目撃者その他の証言。調査団の現地調査など。

一五、甘南で採取した野鼠と Microtus gregalis Pallas との比較についての覚書（ISCC／二a）

一六、甘南野鼠と Microtus gregalis との比較についての註釈（O・O）。

一七、論文「細菌戦」、榊亮平元少佐、日本関東軍防疫給水部つき、サンデー毎日（週刊）、一、六八二号、一九五二年一月二十七日。

一八、一九五二年三月二十五日アメリカ機のおとしたペスト感染の蚤にふれて発病した平安南道江西郡のペスト病についての報告（ＩＳＣＫ／二）。

一九、江西事件の聞きとり書（ペスト）。目撃者の答えと科学専門家の言明。

二〇、アメリカ機がペスト菌感染の人蚤をばらまいたことについての報告（ＩＳＣＫ／三）。

二一、淮陽事件―ペスト―の聞きとり書。目撃者の証言など。

二二、遼東省寛甸地区にアメリカ機のおとした石灰質細菌爆弾についての報告（ＩＳＣＣ／三）

二三、寛甸でつかつた「卵殻」容器についての註釈。

二四、六月六日事件の控え。

二五、遼東省長白県にアメリカ軍のおとした四室昆虫爆弾についての報告（ＩＳＣＣ／四）。

二六、平壌、朝鮮防疫部中央実験室の容器展覧についての控え（ＩＳＣＫ／七）。

二七、アメリカ機の中国東北侵入後おこつた呼吸器炭疽病と出血性脳膜炎の発生についての報告（ＩＳＣＣ／五）。

二八、炭疽病の伝播とそれによる死亡に関する遼東省と遼西省事件についての聞きとり書。

二九、一九五二年三月十六日の夜アメリカ機のおとしたコレラ弧菌 Vibrio cholerae に汚染された生ま蛤をくつて発病した大同郡のコレラについての報告（ＩＳＣＫ一）。

三〇、大同事件（コレラ）についての聞きとり書。科学専門家の言明と目撃者の証言。

三一、コレラ弧菌 Vibrio cholerae の運搬者としての蛤 mollusc meretrix についての覚書（ＩＳＣＣ／一一）。

三二、急性脳炎――アメリカ機の侵入によつて発生した瀋陽（奉天）とその附近の一つの新しい病気――についての覚書（ＩＳＣＣ／六）。

三三、アメリカ機の侵入後瀋陽（奉天）におこつた新型の脳炎事件についての聞きとり書。

三四、節足動物がもつている人間の脳炎型の病気についての情報。

三五、瀋陽（奉天）事件（脳炎）についての註釈。

三六、伝染病情報をあつめてアメリカ軍司令部におくるために北朝鮮に派遣された南朝鮮諜報員についての控え。

三七、アメリカ軍が朝鮮でやつた細菌戦に参加したことについての Ｋ・Ｌ・イノック 中尉の証言

（SIA／一四）

三八、アメリカ軍が朝鮮でやつた細菌戦に参加したことについてのJ・クイン中尉の証言（SIA／一五）

三九、アメリカ軍が朝鮮でやつた細菌戦に参加したことについてのF・B・オニール中尉の証言（ISCK／四）

四〇、アメリカ軍が朝鮮でやつた細菌戦に参加したことについてのP・R・クニス中尉の証言（ISCK／五）

四一、四人の捕虜アメリカ飛行士についての控え。

四二、新中国の公共保健衛生運動についての覚え書。

四三、アメリカ機がパスチューレラ・ムルトシダ Pasteurella multocida のくつついた蜘蛛をばらまいた後で鶏のあいだに敗血症の伝染病が発生したことについての報告（ISCC／一二）

四四、フランコ・グラチオシ博士の声明。

四五、病原体撒布のため爆発弾を使うことについての参考として提出された医学文献からの抜粋。

四六、中国と朝鮮の科学者と医師の履歴。

アメリカ帝国主義者はどうして細菌戦をはじめたかの眞相（付錄三七）

（一九五二年四月七日　捕虜ケニス・L・イノックのした供述書）

一九五一年八月末の二週間、わたしは日本の岩国にいた。第三爆撃連隊は八月いつぱいかかつて、朝鮮の群山に引つこしをやつた。いちばん最後に引つこしたのは、地上学校であつた。地上学校が群山にうつつたのは、九月のはじめであつた。わたしが岩国にいたときには、アメリカからやつて来たての乗員が十五人いて、みんな地上学校にかよつていた。この地上学校の授業課目は、第四四〇〇戦斗員訓練大隊学校とおなじであつた。われわれ航空士は航空とB—二六と朝鮮についての講義と問題をうけた。これはもつとよく作業を理解して、戦斗飛行の準備をするためであつた。

一九五一年八月二十五日の午後一時、われわれは地上学校航空教室の秘密講義に出席した。わたしの記憶では、この講義に出席したのは、十人の操縦士と十五人の航空士であつた。操縦士のなかでは、ブラウン中尉、シュミット中尉、レマク大尉がいたのをおぼえている。航空士のなかでは、ブラウ

ン中尉、ハーディー中尉、ド・ゴー中尉、ジーリンスキー中尉、ガーヴィン中尉、ラーソン中尉とそれにわたしがいたのをおぼえている。わたしは、ラングリー飛行場でいつしよに仕事をしたことのある操縦士や航空士をのぞいて、ほかの人は誰も知らなかつた。われわれの教官は民間人のウイルソン氏であつた。かれ以外の教官はこの講義にだれ一人参加しなかつた。

ウイルソン氏は、この講義が細菌戦に関するものであると語つた。われわれの側では、いま細菌戦をやる計画はないが、いずれやるときがくるかも知れないのであるから、講義は秘密であつて、その内容は誰にも洩らしてはならないし、仲間同志でもしやべつてはいけないと、かれはいつた。

ウイルソン氏の講義はおもに、細菌戦の兵器についてであつた。かれは標本をもつては来なかつたが細菌をそのまゝまいたり、虫やけだものにつけてまいたりする細菌撒布のいろいろの方法を論じた。ウイルソン氏の講義の内容は、次のようなものである。

細菌をそのまゝまく方法。(一)チリと細菌をまぜたものをつめた爆弾をおとす。この爆弾は空中でひらき、細菌のついているチリを風でまきちらす。(二)噴撒装置によつて、飛行機からじかにチリをまく。こうしてチリをまいた所では、どこでも空中に細菌がちらばる。(三)細菌とチリをいつぱいつめた容器をおとす。つまり水の中にはいると口をあける爆弾か、水にぬれると口をひらくボール紙

製の容器を貯水池や湖の中に投下する。そこの水を人や獣がつかい、また昆虫がそれらの細菌を身につけて伝播する。

昆虫をおとす方法。（一）外形は普通の爆弾のように見えるが、中には細菌をつけた虫をいつぱいつめてあり、地面にふれると口がひらき、細菌をつけた虫が外へ出るようになつている爆弾をおとす。（二）地面にふれると口がひらいて、細菌をつけた虫がとび出すようになつている、ボール紙製の容器をおとす。（三）けだものに虫をくつつけてばらまく。

けだものにくつつけて細菌をまく方法。（一）地面にふれると、けだものを外へ出すようになつている落下傘容器で、ねずみ、うさぎその他の小動物をおとす。その小動物には、細菌のついた、のみやしらみがくつついている。（二）舟をつかつて、このようなけだものを敵の後方の海岸から陸にはなす。

細菌をまくその他の方法。（一）細菌のついたビラ、チリ紙、封筒その他、紙で出来たものをおとす。（二）細菌のついた石けん、衣類をおとす。（三）細菌の入つているインキを入れた万年筆をおとす。（四）細菌のついた食物を敵陣におとす。

また、榴弾砲や迫撃砲をつかつて細菌をまくことができるが、前線からの距離がちかいので、この方法をつかうのは安全でない。

まくことができる細菌の種類は、たくさんある。あまり知られていない特別の細菌のほかに、発疹チフス*、チフス、コレラ、赤痢、ペスト、天然痘*、マラリヤ*、黄熱病*など、よく知られている病気の細菌をつかうことができる。細菌をはこぶ虫の種類は多く、いちばん普通なのは、しらみ、のみ、はえ、蚊である。しらみは、のみ、はえとおなじように、チフス、コレラ、天然痘、ペスト、赤痢をはこぶことができる。蚊は、マラリヤと黄熱病をはこぶことができる。

＊つぎの説明は、中国の熱帯および伝染病医学の指導的権威鏡恵瀾博士が加えたものである。同博士は医学博士（ニューヨーク大学）、ロンドン大学の熱帯医学の学位をもち、ロンドンの王立熱帯医学および衛生協会の元会員、ドイツのハンブルグ熱帯研究所の元所員、アメリカの実験生物学および医学協会の元会員で、現在は中国協和医学院（元のＰＵＭＣ）と北京大学医学部の臨床教授である。

「発疹チフスとマラリアの病原体は、それぞれリケッチアとマラリア原虫によるものであり、天然痘と黄熱病は二種類のちがつた濾過性ヴィールスによるものである。この捕虜は医者ではないのだから、これらの伝染病原と病原菌をゴッチャにしているのは、むしろ当然である。また、かれはＤＤＴの正しい使い方についてもまちがつたことをいつている。」

細菌戦をふせぐ最善の方法は、それにたいする準備をすることである。できるかぎり多くの人が、す

べての病気の予防注射をうけねばならない。もし虫がおとされたら、容器にガソリンか、他の油をかけてやきはらうのがよい。もしも虫が容器からとび出してしまつていたら、その地域にＤＤＴをまくのがよい。できれば、飛行機でまければ一番よい。細菌のついたチリをつかつたときには、ＤＤＴをまくことが必要である。むきだしの食物はみんな処分せねばならない。衣服と器物は、熱湯とつよい石けんで洗わねばならない。水はすべて煮たて、食物はみんなよく火を通さねばならない。鼻と口はマスクでおゝい、それでほかのことがみんなすんだら、着物をきかえ、入浴せねばならない。細菌にふれたクズ紙やぼろは、全部焼きすてねばならない。虫をふせぐために夏は窓に網をはらねばならない。ねずみその他のちいさな動物はみんな殺して、ペストの危険をすくなくせねばならない。紙製品またはこれに類した物がおちてきたらすぐに焼かねばならない。

細菌兵器をつかうときには、虫をいためないために、低空、低速でおとさねばならない。落下傘型の兵器の場合は、高度はかまわないが、目標地点から落下傘がそれないために、あまり高すぎないことが必要で、千フイートが適当である。

ウイルソン氏が講義をおわつたのは、三時であつた。かれは、細菌兵器については、誰とも話してはならないと注意して出ていつた。こんな講義を聞いたのは、これがはじめてであつた。一九五一年

九月一日、わたしは群山へいつた。

一九五一年の十月と十二月に、ブラウニングという少佐が群山で、細菌戦にたいする防禦について一時間の講義をした。かれは機会あるごとに何度も講義をやつており、全員が、この一時間講義に出席するようにいわれた。十月と十二月の講義は、内容がおなじであつた。それは部隊の交代のために、いつでも新しい部隊がはいつてきているので、その講義の内容を教えこんでおくことが必要だつたからである。かれは敵側が細菌戦争をやつてくるということは、十分にあり得るといつた。もし敵側がやるとすれば細菌のついたチリか細菌のついた虫をつかうだろう。だからその都度予防注射をせねばならないといつた。この手記の三頁(本書一五二頁)二節目でのべたことについても論じた。

一九五二年一月一日、作戦部の将校が、いつもの通りの訓令伝達会議のときに不発弾に注意し、その数と、それのおちた場所を報告するように命令した。これはいつものことで、その時はなんでもない注意のように思えた。この〃注意〃は作戦部の大隊伝達士官ケアリー大尉が塔乗直前の命令として乗員ぜんぶにあたえたものである。その夜、わたしは頭痛のために飛べなかつたので、他の航空士がかわりにとんだ。

わたしの、次の飛行は、一九五二年一月六日であつた。われわれは、緑八号ルート(平壌と沙里院の

間）にそつて飛行することになり、午前三時に出発した。塔乗員は、操縦士アモス大尉、航空士がわたし、砲手トレーシー軍曹であつた。いつものように、アモス大尉とわたしは、出発一時間まえの午前二時に大隊訓令室と大隊作戦部へ報告にいつた。いつもそこで、さいきんの天候と飛行任務についての通達をうけることになつていた。その夜は、わたしの知らない当直将校の大尉から、黄州へ飛行し、そこで外翼の爆弾二個をおとし、それから他の爆弾をできるだけ早く投下して、群山へかえれとの指令をうけとつた。また、黄州では、高度五〇〇フイート、最高時速二〇〇マイルで投弾するように、かれは命令した。われわれは訓令によると五〇〇ポンド爆弾十個をつまねばならないので、高度が低くすぎはしまいかと、かれに注意した。しかし、かれは、これは極秘だが細菌爆弾なのだから、この仕事については、誰にも話してはいけない、といつた。かれは、翼の爆弾はもう積込みずみで、われわれにかわつて点検してあるから、心配はないし、かえつてきた時は、不発弾として報告するように命じた。それから、中隊作戦室へいつた。そこで砲手にあつた。かれは大隊には報告にいかなかつたので、わたしの知つているかぎりでは、われわれの特殊任務のことを知つていなかつた。外へでて飛行機のそばへゆくと、整備部から派遣された番兵がたつていて、翼の爆弾はもうしらべてある、とわれわれがもはや知つていることを、われわれにつげた。わたしは弾倉のなかの六個の爆弾を点検

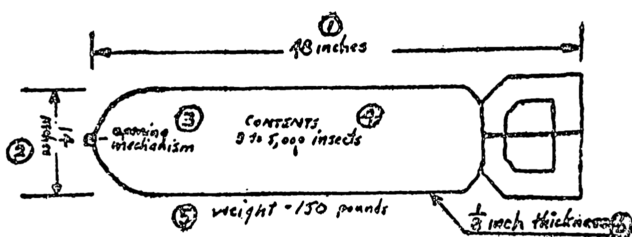
した。六個の爆弾は、普通の五〇〇ポンド爆弾であつた。三時に黄州へむかつて出発した。黄州市の西部に、二個の細菌爆弾を投下した。投下した時爆発しなかつたし、なにも見えなかつた。さらに北に二分飛行し、黄州北方五マイルの街道に、本物の爆弾八個を投下し群山へかえつた。三時に出発し、四時に投弾し、五時に着陸した。これが、われわれが、細菌爆弾をおとした最初であつた。われわれは秘密をまもつた。細菌爆弾は、ちようど五〇〇ポンド爆弾そつくりに見えた。昼間みればちがつていたかもしれないが、わたしが見たときは暗やみであつた。わたしは細菌爆弾を積みこまなかつたし、また積みこんであるところをみもしなかつたが、翼に特別の装置はなかつたので、普通の爆弾と同じように積みこまれていた。

この飛行がすんでから、大隊情報課に復命にいつた時、われわれは、二個の五〇〇ポンド爆弾（じつは一五〇ポンド）を、黄州でおとしたが、それは不発弾であつたと報告した。さらに別の八個の爆弾を投下した場所を報告した。特別任務のことを他の人に知らせないために、爆弾は、はつきりと、不発弾として報告する。しかし上級司令部ではこの報告をみて、どこに細菌爆弾が投下されたかを知ることができるのである。

一月十日、偶然かそれとも計画的だつたか知らないが、アモスとトレーシイといつしよに、またお

任務につかされた。この時はアモスとわたしが大隊の作戦部へ報告にいつた。翼の爆弾四個は、みんな細菌爆弾であるという話であつた。こんどの目標は、緑八号ルートの中和の町で、それから他の爆弾をできるだけ早く投下して、基地に帰ることであつた。われわれの任務は秘密で、細菌爆弾を〃不発弾〃として報告せねばならなかつた。細菌爆弾を投下するときの最高時速は二〇〇マイルで高度は五〇〇フイートであつた。前とおなじく翼の爆弾の点検は、われわれの代りに整備部がやつているはずであつた。中隊の作戦部でトレーシーに会つて、飛行機のそばにいつた。爆弾は前のと同じでふつうの爆弾のようだつた。整備員は、翼の爆弾はちやんと積みこんであるから、心配はないといつた。わたしは弾倉の普通の爆弾をしらべた。午前三時、中和にむかつて出発した。四時十分に、町の西端に、高度五〇〇フイート、時速一九〇マイルで、四個の細菌爆弾を投下した。それから南にむかつて飛び、黄州北方の街道に、ふつうの爆弾を投下し、群山の基地に五時十五分に着陸した。

報告のとき、六個の普通爆弾を投下した所を報告し、前回とおなじく秘密を守るために、〃不発弾〃四個を投下したと報告した。



細 菌 爆 弾 の 圖

「これがわれわれのつかつた細菌爆弾の図である」
(1) 48インチ (2) 14インチ (3) 扉を開く仕掛
(4) 中味, 3—5000匹の昆虫 (5) 重さ150ポンド
(6) 厚さ, $\frac{1}{8}$ インチ

わたしの考えでは、細菌爆弾は、防疫用のワクチンを作るのと同じような種類の一つの医薬供給所から送つてくるのだと思う。この供給所は、日本の本州か、九州にあるものと考えている。

われわれが投下した型の細菌爆弾は、地面にふれると開いて、細菌や虫を大気にふれさせる。大気が寒いと、虫はじつとしていて活動しない。しかし、太陽の熱があたると虫は活動するようになる。

B—29は、北鮮にビラを投下している。これらのビラは箱に入れて投下するが、この箱は空中でひらいて広い地域にビラをばらまく。このビラも細菌戦争に使うことができる。

細菌爆弾を投下する時には、操縦士が投下する。航空士は、いつ、どこで何個の細菌爆弾を投下したかを、記録する。爆弾は、ボクンを押すと、電気仕掛で投下される。

任務がおわつて、乗員が大隊の情報課に報告するときは、全員が出席し、操縦士と航空士が報告する。これは非公式報告で、全員がテーブルのまわりに坐つて情報部員に報告し、部員はそれを書面にかきとり、上司に提出する。そういうわけだから、細菌爆弾を不発弾として報告するのであつて、それは情報課や無関係な乗員たちが細菌戦の秘密を知るのをふせぐためである。

わたしの知つている限りでは、ふつうの爆弾に似たふつうの細菌爆弾を投下するのは、B—二六爆撃機だけである。しかし、他の型の細菌兵器を投下するのには、B—二六は適していない。ビラは、B—二九と、C—四七、C—四六輸送機で投下するが、おもにB—二九をつかう。ボール箱、落下傘容器、衣類、食料品、石けん、紙、万年筆などといつた種々の型の細菌兵器を投下するには、輸送機がいちばん適している。しかし、B—二九も、これらの兵器に使うことができる。

いちばん最初に、細菌爆弾を使つたのは今年のはじめころ、つまり一九五二年一月一日ころであつた。なぜなら、そのころ、われわれはみんな、〃不発爆弾〃に気をつけよと注意されていたのであるから、そういうのである。第四五二爆撃連隊などという他の部隊でも、だいたい同じころから細菌戦争をはじめていた。

もちろん、細菌爆弾を使うという決定は極秘になされたのである。しかし、この決定はきわめて重

大な性質のものであるから、ひじょうに高い上級司令部、おそらく東京の極東軍司令部が、その決定をしたものであることは疑いがない。

一九五二年四月七日

ケニス・L・イノック

どうしてわたしはアメリカのウオール街がやりはじめた非人道的な細菌戦に参加させられたか

（一九五二年四月十三日、捕虜ジョン・クインのした供述書）

わたしはアメリカ空軍中尉、認識番号一七九九三A、ジョン・クインである。今年二十九才。一九四八年二月十六日、二十六才でアメリカ空軍に入隊した。わたしの家はカリフオルニヤ州パサデナにある。一九四九年二月廿五日、航空士官学校を卒業すると、空軍大学に入学を命ぜられた。わたしの学んだのは、「学術教官科」という六週間の教授法の学課であつた。それをおわると、参謀本部員と

して「学術教官部」に配属された。わたしの仕事は、助手将校を訓練することであつた。絵や図表や映画、幻燈などをどう巧みにつかうかを教えた。わたしは、そういうことを教えていたとき、朝鮮のB—二六にのりこむため、極東空軍に転勤を命ぜられた。そして、B—二六の飛行をまなぶために、まず八月二十五日ラングレー空軍基地にゆけという命令をうけとつた。そこに八週間いた。ついで、そこからストーンマン兵営におくられて命令をまつた。ストーンマン兵営で、わたしはチフスと発疹チフスとコレラと天然痘の注射をうけた。それから、われわれは、飛行機でアメリカを出発し、一九五一年十一月二十七日日本についた。着陸したのは羽田空港であつたが、B地区の府中につれてゆかれ、朝鮮におくられるのを待つた。府中には十一月二十九日までいて、汽車で日本南部の蘆屋空軍基地におくられた。汽車は一晩の旅で、三十日には蘆屋についた。その日すぐC—四七機で朝鮮の群山飛行場におくられた。わたしは第三爆撃連隊第三大隊第八中隊に配属させられた。第三大隊は第八、第九十、第十三の三コ中隊で編成されていて、群山にいるただ一つの大隊であつた。

一九五一年十二月十七日、第八中隊司令室に報告にいつたところ、翌日九時の講義に出席すべきものとして、わたしの名前が掲示板にでているのを見た。翌日、おなじく名簿にのつていた航空士のラーソンといつしよに、わたしは、講義に出席した。講義は地上学校の大きな室でおこなわれた。室に

は三十人分の席があつたが、出席していたのは二十人で、みんな操縦士や航空士であつた。ラーソンとわたしのほかに、ロバート少尉、シユワルツ中尉、ロージヤース中尉、ワトソン中尉、ロング大尉、ダツフイー大尉、これらはみんな航空士であつたが、ホワース大尉、ランド大尉、シユミツト中尉、ビーソン大尉、ロバートソン大尉、マツクアリスター中尉、これらはみんな操縦士であつた。ラーソンとわたしはコーヒーをのんでいて、数分間遅刻したが、ほかのものはみんなもうきていた。話をしていた大尉は、われわれが遅刻したので、ひどく不機嫌そうな顔をし、われわれのうける講義はたいへん大切なもので、極秘なのだと、われわれにむかつてくりかえした。講義はすべての点にふかい注意をはらつてきかねばならないが、講義がすんだら——自分たちの仲間同志でも——論じあつてはならないという話であつた。講師は日本からきたその道の専門家であるとかれはいつた。それから講師を紹介したが、民間人のアシフオーク氏という人であつた。アシフオーク氏は四十恰好の中年で、やせ型、髪の毛はほとんどなかつた。

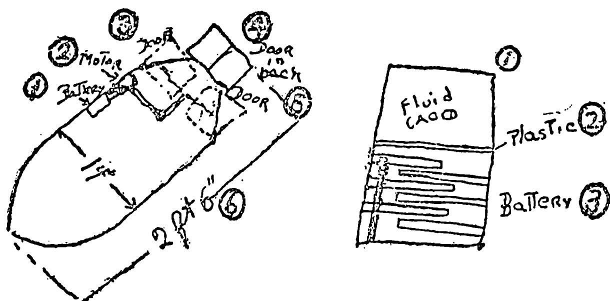
かれは、自分の講義は生物学戦争についてのものであると前おきして、講義をはじめた。生物学戦争というものは考えるだに恐しいものではあるが、科学がすこぶる急速に進歩する原子力時代には、われわれとして、どんな情勢の展開にも準備しておかねばならないのだ、とかれはいつた。将来情勢

がどうなるかはわからないが、われわれとしては、自分をまもる準備をしておかねばならない。もし必要とあれば、細菌戦争をやる方法を知つておくことも必要なのだ、とかれはいつた。かれは、長年のあいだ細菌戦争を研究したと話し、われわれにとつていま必要になつている、とかれが考えるだけの知識を、われわれにあたえるのだといつた。

かれはまず、細菌戦争をやるには実にたくさんの方法があるといつた。細菌はいつどこにでもばらまけるし、その手段についても準備ができている。細菌をそのままおとすことはできない。それは細菌が太陽の直射にあうと、六十秒以内に死んでしまうからだといつた。しかし、たくさんの種類の昆虫や齧歯類に細菌をはこばせることができる。これらの昆虫や齧歯類は、実験室のなかで何代ものあいだ飼うことができ、いつどんな場合でもまたどんなに不利な条件のもとでも生存することができるように、その能力を淘汰することができる。細菌をばらまく方法をいくつかあげるならば、丁度煙幕をはるように細菌のついたチリをまく方法がある。この方法をつかえば風が陸にむかつて吹いているときに海岸に接近して航行している船から細菌がばらまける。また、この方法では低空をとぶジェット機からもばらまける。どんな型のジェット機でも、さしつかえないということであつた。かれは、着物にくつついた蚤や蝿や虱や蚊などの虫によつて、細菌をばらまくこともできるといつた。これら

の虫はまた、その他いろいろの方法、たとえば太陽の光線にあうと破れやすくなつて、虫がはいだせるような箱や爆弾にいれても投下することができる。われわれはB—二六でとぶのだから、この最後の方法、つまり爆弾による方法をおもに論じることにする、とかれはいつた。ついでかれは、翼端のタンクからチリを吹きだしているF—八四ジェット機の絵をしめした。またかれは、蠅と虱みたいな虫がはいまわつている古着の絵をみせた。着物のなかにもぐりこんでいると、これらの虫は温くしておれるのであるが、しかしこれらの虫を淘汰して、寒さにあつてもいたまぬような虫を育てることもできるのだと、かれはいつた。また、それらの虫は長いあいだ食物をたべないでも生きていられるようにすることができる。

それから、かれは、細菌を投下するのにつかう爆弾の絵をわれわれにみせた。これらの爆弾は、それまでわれわれがつかつていた五〇〇ポンド爆弾にとてもよく似ていた。ただし、信管はついていなかつた。この爆弾についてはその大きさや形は問題でなく、ただその中味が大切なのだと、かれはいつた。この爆弾は密封してあり、飛行機から投げおとしたとき以外にはひらかないので、きわめて安全に運搬ができるということであつた。かれは、一つの五〇〇ポンド爆弾の絵をわれわれにしめしたが、その弾殻はとてもうすくて¼インチにも足りなかつた。これらの爆弾は—とかれはいつた—ま



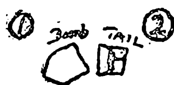
第1図 (I) 電池 (2) モーター (3) 扉 (4) 背扉 (5) 扉 (6) 2フイート6インチ，第2図 (1) 液体 (2) プラスチック (3) 電池

だ実験段階にあるものであつて、その種類もさまざまである。かれがわれわれに見せた絵の一つは、地上にぶつつかると半分にわれる爆弾の絵であつた。もう一つ別の爆弾は、背中に（爆弾が曲つている尾部の近くに）扉をもつていて、それらの扉は爆弾が命中するとひらく仕掛けになつていた。これらの扉は、電池に連結したごく小さな電気モーターでひらくのであるが、電池は爆弾が、地上にぶつつからないかぎり動かぬようになつていた。爆弾が地上におちるまでは、うすいプラスチックの隔膜があつて、電池の極板に液体が近づかないようにさえぎつている。爆弾が地上にぶつつかつた衝撃で液体はプラスチックの隔膜をやぶり、電池の極板をつつみ、そこでモーターが扉をひらくのである。また、かれは、もう一枚爆弾の絵を見せたが、この爆弾は地上におちると、尾

部が割れるものであつた。かれが絵で見せた爆弾は、みんなふつうの五〇〇ポンド爆弾に似せてつくつてあつたが、そのどれにも信管はかいてなかつた。かれはまた、空中で分解する爆弾もあつて、箱にいれた中味の昆虫は、地上におちるまえに、ひろい地域にばらまかれるようになつている、といつた。これらの箱は、太陽の光線にあたると弱くなつて破れ、昆虫（蝿、蚤、蚊）はいだせるのだということであつた。かれの見せたこれら三つの型の爆弾は、みんなおなじ構造であつて、五〇〇ポンド爆弾に似ていたが、囲壁はみんなうすかつた。第一種は二つにひらいているところを見せた。第二種は尾部の近くの背後に扉があり、第三種は尾部が割れてとれているのを見せた。空中でひらく爆弾は、ふつうの針金で翼部の爆弾かけにつるしてある。これらの爆弾はその嘴のところに小さなプロペラーをもつているが、これはつるすための針金がじやまになつて、投下されるまではまわらない。ところが、この爆弾がおとされると針金は飛行機に取りのこされて、プロペラーは自由にまわるようになる。このプロペラーが発電機をまわし、さきに説明したようにして小さな電気モーターに電気を供給する。このモーターは他の爆



(1) 半扉　(2) 他の半分

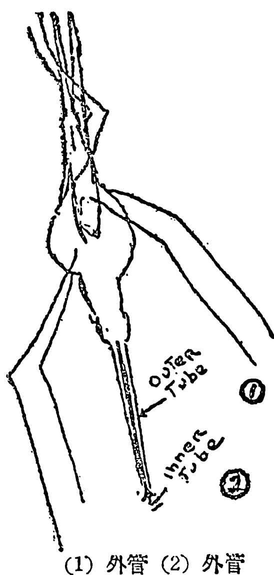


(1) 爆弾　(2) 尾部

弾の場合とおなじく、まず背部の三つの扉をひらき、ついで前部の一つの扉をひらく。そうすると、風が爆弾のなかから箱を吹きとばして、これらの箱はおちるときに散らばつてゆくのである。かれは、この種の爆弾については絵を見せなかつたし、またほんの少ししか説明しなかつた。

つぎに、かれは、どうして細菌をばらまくかを説明した。昆虫なら、ほとんどぜんぶの種類のものが、細菌をばらまくのにつかえる、とかれはいつた。しかし、いまはそのうち数種類について話すことにするが、ばらまいた細菌が南朝鮮にもどつてくることがあつても、これだけ知つておれば、自分の身をまもるには十分であるといつた。腺ペストは、鼠をつかつてひろめることができるが、かならずしも、鼠そのものを投下する必要はない――もちろん投下することはできるのであるが。鼠がたべるし、またたべたがるようなもののなかに細菌をいれて投下すればいいのであつて、そうすると鼠がそれを体にくつつけて伝播する。昆虫を投下するのは、すこぶる簡単で、昆虫はどんな細菌でも伝播する。蠅は発疹チフス※とコレラを伝播し、蚤はペストを伝播する。蚊は各種の熱病、黄熱病、チフス※、マラリア、それにはつきりした治療法のわかつていない脳膜炎※を伝播することができる。脳膜炎はまた日本Bとしても知られており、日本人自身のあいだの病気として、日本人が朝鮮にもちこんだものである。その治療法はほとんどわかつていず、予防法はマラリアとおなじである。ここではマラリア

がどうして伝播するかを説明するが、その他の熱病もおなじ仕方で蚊が伝播するのであるといつた。かれはわれわれに蚊の大きな絵をみせた。これらの蚊は、マラリア患者にかみついて感染するかまたは研究室で伝染させられるまでは、無害である、とかれはいつた。蚊が咬みつくと、その内管も外管も人体につきささる。蚊は内管で血をすいこみ、それと同時に外管で人体のなかに一種の唾液をつぎこむ。もしその蚊が病菌を保持しておれば、病菌はこの唾液によつて咬まれた人に伝播され、その人は熱病にかかる。食堂の壁にかけてあるポスター（脳炎の予防についての）は、壁をおおうためにかけてあるのではないのだと、かれはいつた。



(1) 外管 (2) 外管

※つぎの説明は、中国の熱帯および伝染病医学の指導的権威鏡恵瀾博士がくわえたものである。同博士は医学博士、（ニューヨーク大学）、ロンドン大学の熱帯医学の学位をもちロンドンの王立熱帯医学および衛生協会の元会員、ドイツのハンブルグ熱帯研究所の元所員、アメリカの実験生物学

および医学協会の元会員であり、現在は中国協和医学院（元のＰＵＭＣ）と北京大学医学部の臨床学教授である。

「リケッチァ病の媒介体としてみとめられているものは、虱、蚤、扁蝨、小蝨である。今までわかつているかぎりでは、蠅は発疹チフスを伝播しない。というのは、蠅にはふつう病原リケッチアがついていないからである。チフスの伝播には蠅（蠅は大便にたかる習慣があるので、さまざまな有毒微小有機体の機械的運搬者になつている）を別にすれば昆虫の媒介体は必要でない。蚊がチフスの媒介体でないことはたしかである。この捕虜が伝染病の伝播についてのべていることとの或る部分は、現在の医学知識と一致しない。しかし、この捕虜は医者ではないのであるから、病気の伝播について、すべての知識をもつており、また、それを記憶していると考えることはできない。それで、かれが脳膜炎 encephalitis のことを encyphalitis とつずつてかいているのも、当然である。」

われわれは、すべて清潔をまもる規則にしたがわねばならぬし、ことにこんごの数カ月はそうであると、かれはいつた。アタブリンをのめといつて与えられたときには、それをすてないで、飲まねばならない。われわれはみんな、予防注射の効力がきれないように、注射をつずけねばならない、とかれはいつた、そうすれば何もおそれることはないのである。講義は九時にはじまつて、十一時直前に

おわつた。われわれはみんな、細菌爆弾は爆発しないこと、それは、不発弾であることを知つた。

十二月三十一日、ふつうの命令伝達会議のとき、作戦将校は不発弾に気をつけて、帰つてからの復命のときには、すべての不発弾を情報課に報告せよと、われわれに命じた。

一月三日午後二時、わたしは、ほかの二十六人の飛行士、二十七人の航空士、二十七人の無線爆撃手、二十七人の機関士（ある場合には、これらの機関士は、砲手であつた。われわれの中隊では三機が砲手をのせていた）といつしよに大隊作戦部に報告にいつた。わたしの同乗員は、航空士のロージャース中尉と機関士のセイヤー軍曹であつた。天気がよかつたので、無線爆撃手はのせなかつた。わたしは告知板から、われわれの航路と出発時間とをかきとつた。航路は沙里院から平壌にゆくもので、出発時間は朝の二時半であつた。例のような命令の伝達がはじまつた。ふつうの命令伝達では、まず作戦将校が、われわれのきくすべてのことはみんな秘密であるから、秘密として取りあつかうこと——われわれの仲間以外にしやべつてはいけないということを、われわれに命じた。ついで、情報将校が、前夜どのような交通機関の動きがみとめられ、そのうちどれだけに被害をあたえ、どれだけを破壊したかを報告した。陸軍の連絡将校は前線の状況を説明し、気象将校は天候をわれわれに説明してくれた。その他の情報、風や温度などは航空士が告知板からかきとつた。どの点からみても、こ

れはふつうの命令伝達会議としか思えなかつた。

ロージャースとセイヤーとわたし自身は、一時五分すぎに大隊作戦部にあつまつた。そして、わたしは宿直作戦将校のいる小さな室に入つていつた。レイノルズ大尉が宿直していた。わたしが自分の名前をいうと、わたしには特別任務があたえられているのだと、かれはいつた。ほかのことはさておいて、まずまつさきに翼部の爆弾を、できるだけ平壌に近づいておとさねばならぬというのだ。かれは、壁にかけてある地図の一点をさし示して、そこに赤ピンをつきさしたが、それは平壌から南五マイル、幹線道路から東へ三マイルの地点であつた。それから、われわれはふつうの飛行使命をつづけ、できるだけ早くそれをはたして、情報課に復命せよとかれは命じた。翼部の爆弾は二百フイート、またできれば、それ以下の高度でおとし、それは不発弾であるから、その爆発のことは心配するにおよばないということであつた。わたしは細菌爆弾についていつかきいた講義のことを思いだして、いつたいその爆弾は何なのかときいたが、かれは知らないと答え、それよりも命令された通りに実行することがいちばんいいのであつて、なぜそうするのか、それは何かということなど気にかける必要はないといつた。これは細菌爆弾だなと、わたしは考えた。

飛行機のところへ出てゆくと、われわれは一人の番兵にであつた。それで、わたしはそれらが細菌

爆弾にちがいあるまいと思つた。翼部の爆弾についてはもうちやんとしらべてあるから、心配はいらないのだと番兵はいつた。しかし、わたしは、飛行機をしらべるときに、それを見たが、「翼部の爆弾には信管がない」と航空士のいつたことのまちがつていないのに気がついた。われわれ二人は顔を見あわせた。しかし、わたしは命令は命令だといつて、それらの爆弾は、そのままにしておいた。わたしは、それをどこにおとすかを、かれにおしえ、かれはその場所をかれの地図の上にしるした。

われわれは、二時二十五分に出発し、三時半には平壌すぐ南方の地点についた。わたしは橋のすぐ南で道路から東におれた。二百フィートの高度におりたとき、ロージャースがこれでよかろうといつたので、わたしは四つの翼部爆弾を一度に一つづつ、いそいでつづけざまに落した。それらは不発弾であつた。われわれ両人は、そのとき、それらがたしかに細菌爆弾であることを知つた。

残る任務は四時十五分までにおわつて、五時十分には群山にかえりついた。飛行機からおりると、装備をしまいこんでから、飛行機には異常なしと報告しておいて、われわれはすぐ、復命のために大隊作戦部の情報課へいつた。われわれは高度二百で、命ぜられた地点に爆弾四つをおとし、これはみんな、不発弾であつたと報告した。軍曹がそれをかきとめたが、それは、その朝情報課に報告するためであつた。

一月十日、午後二時わたしは軍隅里と江界間をいつもとおなじふつうの任務をおびてとぶように命ぜられた。同乗員は航空士としてシユワルツ中尉、機関士としてセイヤー軍曹であつた。出発時刻は翌朝二時であつた。この命令はふつうのものであつたので、わたしは、午前十二時三十分作戦部にいつて、いつものように名簿に署名するために入つていつた。ところが、わたしは、また特別任務をあたえられている、ということをおしえられた。そのときも、レイノルズ大尉が宿直であつた。レイノルズ大尉は、わたしが、もはや一度、不発弾についての特別任務をやつたことのあるのをおぼえていて、そのときのことを話し、こんどもおなじ種類の任務だといつた。しかし、こんどはたつた二つの不発弾だといつて、それを軍隅里の北東におとすことを命じ、壁の地図のうえでその地点をしめした。そこは軍隅里北方三マイル、鉄道幹線東方五マイルであつた。飛行機の側ではまた番兵にでくわし、翼の爆弾の手配はすんでいるといわれた。この度も外翼の爆弾には信管のついていないことを、わたしはみてとつた。わたしはシユワルツに、特別爆弾を投下する地点をおしえた。それで、われわれは細菌爆弾をつんでいることを知つていた。二時に出発し、三時二十五分に軍隅里の上空についた。シユワルツが方向をかえろといつたので、わたしは機首をかえて、高度を二百フイートにさげ、爆弾をおとした。それらは不発弾であつた。残る仕事をできるだけ早く切りあげて、四時十分に群山にむけ

てかえりはじめた。群山に着陸したのは五時二十五分で、われわれは装備をしまい、飛行機に異常のないことを報告したのち、作戦部の情報課へいつて、不発弾二つを落したことと、その落した場所を報告した。軍曹は情報課に報告するため、われわれの報告をかきとめた。

十二月十四日、わたしは、翌朝九時地上学校校舎の講義に出席すべきものとして、わたしの名前が掲示板に出ているのに気がついた。わたしは九時大きな室のその講義に出席した。わたしのほかに飛行士や航空士の将校が二十五人出席していた。ビーソン大尉、ラーソン中尉、シュワルツ中尉、ロバート少尉、ワトソン中尉がその中にいた。基地作戦将校のアレン少佐が出席者中の先任将校であつて、講師を紹介した。かれはこの講義は大切で秘密であるといつた。講師のクラーク氏は、原子核研究の分野のすぐれた物理学者であり、ここで原子力戦争のことを、少しばかりわれわれに説明してくれるのだと、かれはいつた。クラーク氏は日本から来たということであつた。

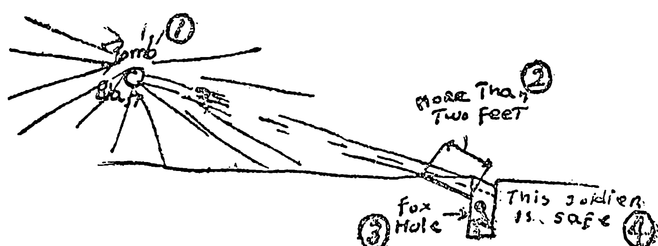
広島と長崎に爆弾をおとしていらい、原子力戦争の科学は大きな進歩をとげたという言葉で、講師は講義をはじめた。B—二九だけが原子爆弾をはこべる時代はもうすぎた。あの当時の大きさの爆弾は、いまでは当時の何倍も(何倍かはいわなかつた)効力が大きくなつた。いまではどんな大きさの爆弾でも、思いのままにつくれる。かれは、アメリカで、かれらのいう「赤ん坊」原子爆弾について

の実験をやつたこと、また爆弾のほかに、砲弾としてつから研究もすすんでいることを話した。かれは、原子力の雷頭部をつけた迫撃砲弾の製作がほぼ完成にちかずいているといつた。水素爆弾についても大きな進歩をとげており、これは現在われわれのもつている型の原子爆弾より千倍も効力が大きいといつた。この爆弾は、たつた一つで、ニュー・ヨークのような都市を破滅させてしまうことができるということであつた。それからかれは、原子爆弾のさまざまな使い方についてわれわれに話した。原子爆弾はそれを地中で爆発させるようにおとして、放射能をもつたチリをひろい地域にまきちらすことができる。このチリは、それのふれる一切の生きものの生命をうばい、その放射能は数週間もそこにのこつている。また、この爆弾は、広島、長崎でやつたように、パラシュートをつけて空中で爆発させることもでき、この方法でやると熱と爆風の効果は、もつと致命的であるが、放射能は、それほど長くはのこつておらず、その大部分は風にふきちらされて、空中に散つてしまうといつた。さらに、この爆弾は深い水中で爆発させることもでき、この方法は海岸にちかい都市にたいしてつかえると、かれはいつた。どんなに大きな港でも、その中の水の大部分を空中にふきあげる。爆発させるところは、深いところであればあるほどよい。吹きあげられた水は放射能をおびて、雨となつて市中にふりそそぐ。その上、爆風の効果もあり津浪がおこつて、港を洗いながし、大きな損害をあたえる。

かれは、放射能雲の実験もおこなわれたが、放射能雲は長いあいだ放射能をたもつていて、それが降るところでは、すべての生命を破壊してしまうだろうといつた。

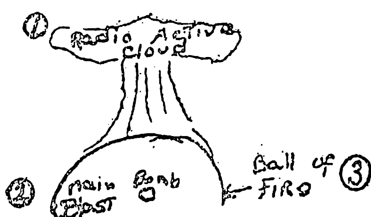
かれは、小形原子兵器（爆弾）の実験がアメリカのネヴアダ州でやられ、爆発地点から二マイルのところに軍隊がいたが、一人も怪我をしなかつたという話をした。それは爆発が小さく、適当な予防法をとつたからであつた。かれの話によると軍隊はみんな衣服でよく身体をつつみ、頭が簡単壕の尖端から、二三フィート下にくるように、簡単壕のなかに深くかくれていたからである。これはたいへん必要な予防法であり——とかれはいつた——われわれはその理由を理解せねばならないのである。

原子爆弾は三種の放射線をだすと、かれはいつた。爆弾が爆発すると、まずどえらい量の熱ができて、爆発の中心点は何百万度にものぼつて、太陽とおなじくらい熱くなり、その熱波は爆発の大きさに比例して半マイルから数マイルにもひろがる。つぎに、原子爆弾が爆発すると、衝撃波がおこり、これは高性能爆薬の爆発よりもはるかに長く持続する。そして、つぎに放射能がおこる。もし諸君が即死しない程度に、爆発地点から遠くはなれたところで、簡単壕のなかにはいつておれば、熱波にたいしても爆風にたいしても安全であり、放射能にたいしても、それがチリや雨になつて降つてこないかぎり、安全である。原子爆弾から出てくる三つの放射線はアルフア線、ベーター線、ガンマ線であ



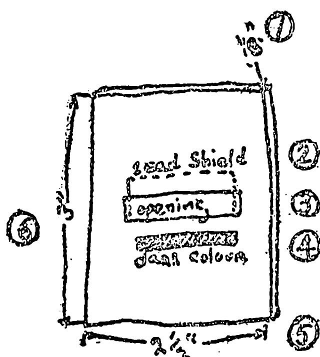
(1) 爆弾爆発 (2) 2フイート以上 (3) 簡単壕
(4) この兵士は安全である。

る。アルファ線とベータ1線は、ただ爆発中しかでないし、もし諸君が爆発の焦熱にさえ安全であれば、アルファ線やベ1タ1線のやけどをふせぐにはシャツ一枚、とくにうす色のシャツ一枚で十分である。手や首や顔のように着物でおおわれていず、爆弾が爆発するときに露出している部分はやけどをうけることになる。ガンマ線は、その爆発の型にしたがってかなり長いあいだ持続し、それにたいする防禦としては、着物は何の役にもたたないが簡単壕はいい防禦物になる。ガンマ線はX線とおなじくあらゆるものを通して、骨の生命をくだき、血液を破壊するが、鉛か厚い土砂の屑はこの光線をとうさない。それからかれは、どんな風に簡単壕をつくるかをしめした絵を見せてくれた。鉛だと半インチの厚さで、ガンマ線を通さなくするが、土砂だと少くとも二フイ1トは必要である、とかれはいつた。ガンマ線は、ほとんど二フイ1



(1) 放射能雲 (2) 爆発の中心 (3) 火の玉

トまで土砂をつき通すのである。爆発地点の付近の土砂は、ガンマ線をだしつづける。というのは、ガンマ線をつよくうけたものはやはり放射能をもつようになり、ガンマ線をだすからである。ことに、被爆地点の付近にあつた金物にふれることは、すこぶる危険である、かれは、放射性ガンマ線の大部分は、大きな雲になつて空中に運びさられ、風で吹きちらされてしまうといつた。かれはこのことを絵でしめした。ガンマ線は吹きちらされたのちには、人間にとつては無害になる。が、ネヴアダ州の実験後数日してニューヨークのある写真実験室から、そこの感光紙の多くがガンマ線に感光した跡をしめしているという



(1) ⅛ インチ
(2) 鉛　板
(3) 口
(4) 黒い色
(5) 2½インチ
(6) 3インチ

報告をおくつてきたという話を、かれはした。ガンマ線は雲にのつて、アメリカ大陸を横断し、この感光紙に感光したわけである。これらの光線は、放射能雲になつてほかへ運びさられてしまうから、あまり長くいさえしなければ、空中爆発後その下の地域に入つても、だいたい安全である、とかれはいつた。けれども、ある種の理由で絶対に入る必要がある場合のほかは、まず訓練をうけた人たちが、ガイガー計数管をもつて入つていつた後からはいつた方がいい。諸君がもしどうしても入つてゆかねばならぬときには、とかれはいつた、金物にさわつてはいけない。だれでも持ちはこべるポケット放射能発見器ができているが、これは諸君が被爆地帯に入つたときに、どれほど長くそこにいて、安全であるかを示してくれるものである、とかれはいつた。かれはその発見器を見せたが、それはタバコの箱ぐらいの大きさで、ただ厚さは$\frac{1}{2}$インチしかなかつた。それにはまん中に高さ1/4インチ長さ二インチぐらいの口があつて、鉛の板でおおつてあつた。この板をずらして口をあける。蓋の下には一枚の感光紙があつて、これは放射能にあたると黒くなる。また箱の外側には色がぬつてあり、この色を感光紙の色とくらべるのであるが、もし感光紙の色が箱にぬつてある色とおなじになつたら、諸君はそこから立ち去らねばならない。そうしないと、あまりに多くの放射能をうけて危険におちいるからである。それ以上すすむともう引き返せなくなる。

諸君は、被爆地帯に入るときには、鉛の蓋をあけて、口のなかの色を見つめて、それを箱の上についている黒い色とくらべ両方がおなじ色になつたら、そこを立ちさるのである。ついで、かれは、このポケット発見器は、もつと正確なガイガー計数管の止むおえない代用品にすぎないのだといつた。ガイガー計数管はラジオのような働きをし、放射能にちかずくと音をたてるが、その音を諸君はそれにつないである補聴器できくことができる。また、それには小さな計器がくつついていて、ちようど自動車の電流計のように、どれくらいの放射能があるかをしめしてくれる。放射能はラジオトロンまたはそれに似た言葉の単位をつかつて測定すると、かれはいつた。それから、かれは、われわれを一人一人ならべ、補聴器をつけさせて、ガイガー計数管に放射能をおびた物体を近づけて、それをきかせた。はじめ、カチカチいう音がすこぶるゆつくり鳴つていたが、その物体がだんだん近ずくにつれてとても早く鳴るようになり、しまいには一つのカチという音と次のカチという音がかさなりあつて、コロコロとひびくようになつた。講義は九時から十時半までつづいた。

これらの事実から見ると、ウオール街の資本主義的戦争屋どもが、その貪慾にかられて、その無慈悲な貪慾にかられて、この細菌戦争という恐ろしい犯罪をやりはじめ、自分らがもつと多くの金をもうけて、この戦争を拡大しようとしていることは明らかである。かれらは、かれらの非人道的な犯罪

目録に原子戦争さえつけくわえて、第三次大戦をおっぱじめようとしていることさえも、しめしている。これらの帝国主義者は、金もうけのためにはどんなことでもするのであつて、戦争が大きくなればなるほど、かれらはもうかるのである。かれらは罪のない世界の人民がどうなろうと、少しも気にかけていないのである。アメリカの人民、労働者はこれらの犯罪の真相を知れば、きつとこの戦争屋どもを断罪するにちがいない。アメリカの労働者は、かれらの読む新聞や雑誌やラジオからめつたに真相を知ることはできない。これらの機関はみんな金に狂つたウォール街の帝国主義者が牛耳つているからである。かれらは人民が真実を知ることを欲しない。というのは、そうなれば、かれら戦争屋どもが世界の人民にたいして非人道的な犯罪をおかすのを、人民はゆるさなくなるからである。戦争屋どもは戦争を拡大し、大金を儲けるために、これらの非人道的な犯罪をやつていることは、すこぶる明らかである。

わたしは、これらの戦争屋どもの手先になり、細菌爆弾を落させられ、朝鮮の人民と中国義勇軍にたいするこの恐ろしい犯罪をやらされた。わたしは軍人であるから命令に従わねばならないが、それらの命令はウォール街のあの帝国主義者どもがくだすのである。わたしはこの犯罪をやることを拒絶することはできなかつた。しかし、一方、人民にたいするこの非人道的犯罪を実際にやつたのはわた

しであつて、わたしは細菌爆弾をはこびそれを落したが、その犠牲者の大部分は、きつと罪もない女や子供であつたにちがいない。これは人民にたいする恐るべき犯罪である。ドイツのナチでさえこういう戦争はやらなかつたし、人間の皮で電燈の笠をつくつたあのイルザ・コッホでさえこういう戦争はやらなかつたのであるが、わたしはウオール街のアメリカ帝国主義戦争屋どものために、こういう戦争方法をやつたのである。わたしは中国義勇軍に捕虜になつて武器をすててからというもの、もつと小さい罪をおかした人間が期待していいよりも、はるかによい待遇をうけている。しかし、かれらはわたしが、武器をすてたのちには、もはやかれらの敵ではないと、いつでもいつてくれた。かれらはかれらの戦時捕虜にたいする寛大な政策を説明してくれたが、わたしは、ウオール街の帝国主義者のウソの宣伝で育てられてきたので、それを理解することがひじようにむずかしかつた。しかし、中国義勇軍はすこぶる忍耐づよかつた。かれらは寒いときにはあたたかい着物をくれ、食物もすばらしければ寝具もよく、あたたかいところにねかせてくれた。わたしは、かれらの親切に末長く感謝している。中国義勇軍側が長いあいだ辛抱していたのち、とうとう、わたしはわたしの罪がわかつた。わたし自身の良心が、わたしをひどくなやました。そして、このなやみの重荷からのがれるためには、告白をして、悔い改めるということがたいへん役にたつた。

わたしは、わたしのおかした人民にたいする恐るべき罪がわかつた。わたしは、罪もない平和を愛する人民にたいして非人道的なことをしたのである。わたしは、この罪がどんなにわるいものであるかを知つている。わたしは、人民がこのことをよくわかつて、わたしの罪をゆるしてくれることを願つている。それは平和を愛する全世界の人民にたいする罪であつたし、平和を愛するすべての人民の断罪すべき罪であつた。わたしは、平和をのぞむすべての人民の許しをねがつている。なぜなら、わたしの罪は、かれらにたいしてなされたものであるからである。

一九五二年四月十四日

ジョン・クイン

新中国の公共保健衛生運動についての覚え書（附録四二）

一

委員会は北京に到着して、すぐ二つのことに気がついた。それは、
一、道路、公園、広場、商店がとても清潔でととのつていること
二、ハエと蚊がほとんどいないことである。

北京の大部分は相もかわらず旧式な都市で、たくさんのせまくるしいふるぼけた建物や住宅があるが、目にふれる限りの家はみんな、毎日きれいに掃き清められて、ゴミのたまつていることなど、一度もみたことはない。物置場においてある材木や鉄屑でさえ、きれいに積みあげられていた。六、七年前に中国に住んでいたことのある委員の一人は、こうした変りようをみて、びつくりするほかなかつた。

委員会は、町で売つている食料品に、いまではみんなフタがかぶせてあるのを発見した。街頭で売つている茶は、みんなフタのある茶わんに入つており、公園には、フタのついている飲み湯を入れたカメが備えつけてある。タン壺にはみんな、大小に応じて木のフタがされ、このフタには木の柄がついていて、タンをするとき、腰をかがめなくともよいようになつている。便所にも、これと同じやり方でフタがしてある。また、以前にはどこでもみられたタンをはく習慣が、いまでは、ほんとに少くなつている。ハエを見つけたときには、どこでもすぐ、ハエたたきが手にとれるようになつており、どこの農村へいつても子どもたちが力をこめてハエたたきをふりまわしているのを、みることができる。すべての人が、一人のこらず、ハエにたいしてひどく敏感になつている。

二

委員会のメンバーは、北京市公共衛生局長、北京大学医学院公共衛生学部教授の厳鏡清氏に会つたが、かれは、そのさい、つぎのような話をしてくれた。

一九四九年以前には、中国の衛生の程度はとても低かつたが、解放によつて、人民の衛生にたいする態度がすつかり変り、衛生がしごとを向上させるための大切な要素の一つであることを、知るよう

になつた。幹部たちは、この点をいたる所で宣伝してあるいた。こうしたことが、つぎにのべるようないろいろな成果の背景になつている。

一、ゴミ――以前の北京は、ゴミの一杯つもつた都市であり、道路はとてもきたなかつた。なかでも「二龍路」という街路があつて、人はそこの道を夏は「二龍河」とよび、冬には「二龍山」とよんでいた。というのは、たくさんのゴミがそこにつもつていたからである。一九四九年には、まえからたまつていた、そこのゴミ（四十年もの長い間たまつていた）が、みんな掃き清められた。現在では、ゴミはたまるそばから、清掃されている。一九五〇年の一年間に清掃されたゴミは五十万立方メートル、一九五一年には七十万立方メートルであつた。ゴミがふえたのは、生活程度が向上した結果である（か、または、ことによると、人口の増加によるのかも知れない）。ゴミ桶には、いまではみんな、フタがかぶせてある。

二、便所――解放まえには、ふつう便所には、フタがつけてなかつたが、現在ではみんなフタが、つけてあり（前記参照）、毎日、フタのついた容器をもつた人夫が、便所をきれいに汲みとつている。一部の住宅には便所が、なくて、そこに住んでいる人たちは公衆便所を使つているが、それらの公衆便所はみんな、注意深く使われていて、とても清潔になつている。どこの都市にも、新しく公衆便所が

たくさんつくられている。私用便所にも公衆便所にも、みんな石灰がまいてある。北京では今日、市民のうち百人に一人が水洗便所を使えるにすぎない。糞尿はみな、市外の相当遠い地方でバラまかれ、ハエをその上にたからせないように、つねにそれをひつくりかえしている。これらの糞尿からは、混合肥料がつくられている。

三、溝――北京では、明の時代（十六世紀）から、雨水溝がつくつてあつたが、それらはみんな長い間、手入れがされていないので、その機能をはたすことができなくなつていた。解放後、これらの溝はみんな修繕し、その上新しい溝をつくつている。たとえば、「二龍路」はいまでは、一年中ちやんとした道路になつている。北京の一部には、むき出しの溝があつて、人がそこに落ちこむおそれがあり、事実落ちこんだことがあつたが、今ではもうそれがつくり変えられて、暗渠になつている。それは有名な「龍鬚溝」とよばれる溝で、ある人がこの溝のことを脚本に書いている。城外にはまた、いくつかの汚水溜りがあつたが、この汚水も、いまでは処分されてしまつた。

四、水道――以前には、市民の三分の一しか水道を使えず、その他のものはみんな、湧き井戸や汲み井戸から水を汲んで使つていた。解放後の今日では、城内のすべての住民が、水道の水を使つている。

五、ハエと蚊――はやくも一九四九年から、蚊の撲滅運動をやる必要が痛感されはじめ、そのとき以来、この運動は一貫してやられている。この運動のためにとられた重要な手段の一つは、すべての溝にフタをすることであり、もう一つのこれまた重要なしごとは、すべての木の洞をうめることであつた。木の洞をうめるには泥と石灰を使つた。その結果、雨降りののち、それらの洞が蚊の発生場所になることがなくなつた。どこにいつても、そういううめた洞を見ることができる。

便所にフタをつけたことと、便所掃除を毎日やつたこととは、ハエを撲滅するために、いちばん必要な措置であつたらしい。厳博士は、これについてつぎのようにいつた。

「便所を十分に掃除し、溝にフタをつけ、ゴミを清掃すれば、ハエはかならずいなくなります。」

六、犬――一九五二年の春から、北京では、犬を飼うことが禁止されている。委員会は、中国ですごした最初の一カ月間に、一匹の犬もみることはできなかつた。犬を飼うことを禁止した理由は、つぎのとおりである。

①　犬は伝染病を伝播するおそれがある。

②　犬の排泄物がそこいらにあると、ハエがそれにたかりやすい。

③　犬は脳炎の病毒の保持者となるおそれがある。

④　犬は交通のじやまをする。

七、衛生運動――この運動は、蚊やハエにたいする戦いのうちでも、いちばん重要な措置であつた。この運動や一般公共衛生の面で、中国があれほど、異常な成果をあげたのは、すべての民衆とあらゆる個人が心からの協力をしたのだということによつて、はじめて説明がつくのである。だからこそ、こんなにも簡単な方法で、信ずることもできないほどの成果が、えられたのである。衛生運動では「みんながみんな健康にならねばならない」「人民は、自分の健康をまもる責任がある」というスローガンが、かかげられた。

ハエと蚊を撲滅するための衛生運動は、毎年三月から始まつて、秋までつづく。ときには大会が開かれて、政府の役人が講演したあとで、市内各区の住民班会議が開かれ、競争がやられる。衛生の責任者はたえず検査をしてあるく。いろいろな大衆組織（婦人や青年）は、すべての決議を一〇〇％やりぬくことを保証する。ふつうは、十戸ごとに一人の責任者が選ばれる。思想や考え方も、いまでは

大きく変つてきており、以前には、隣り同志で批判しあうようなことは、むかしからの風俗にそむくことだとされていたが、いまでは、建設的な意味をもつた相互批判と自己批判がさかんに奨励されている。運動にたいする興味は、年ごとにたかまつてきており、今年の成果は、いままでのどの年よりもよい。

衛生運動は、会議を開くというやり方だけでやられているわけではなくいろいろな、ちがつたやり方をしている。たくさんのみごとな色彩のポスターを貼つて、どうして建物や衣服をきれいにしたらよいか、どうして子どもを育てたらよいか、などということを人びとに教えている。ラジオは、たえずいろいろなことを教えており、新聞はいつでも衛生と衛生的措置について必要な文章をのせている。興味をひくような挿絵入りのパンフレットを安い値段で売つている。芝居や音楽会では、しばしば、一人または二人の俳優、または男女二人が、健康をまもることの意味と、人びとはそのために、なにをしたらよいかということをおしえた歌を歌うが、それがさかんな拍手をうけていることをみても、これが大いに歓迎されていることがわかる。

八、衛生の統計――以上のべたようないろいろな措置がとられた結果伝染病はもう以前のように広がることはなくなつた。一九五〇年四月から六月にかけて、北京で腸チフスのために死亡した数を

一〇〇とすれば、一九五一年同期の死亡数は四〇にへつた。赤痢は一九五一年には、原因不明の上昇を示した（一〇〇～一一四）が、一九五二年には五一に下つた。その他の消化器系統の伝染病（夏季の下痢、寄生虫など）の数字も、一九五一年は七四、一九五二年は三五にへつている。

ここでぜひとも、つぎのことをのべておかねばならない。国民党時代には、種痘を受けた者の数が毎年七百三十万人（これは一九四六年の最高記録である）にたらなかつたが、解放以後一九五一年末までに種痘をうけた者は、全人口の半数以上（三億七百万人）に達した。この数字は一九五二年六月末には、さらに三億六千九百余万人（369,360,893人）に増加している。天然痘の流行は、ほとんどなくなつた。一九四九年以来、中国にはコレラは一度も発生していない。産婆の訓練をやつた結果、初生児の死亡率（初生児破傷風）は下り、北京では、つぎのようになつている。

一九四九年　〇・七二％

一九五〇年　〇・五七％

一九五一年　〇・二五％

産婦の死亡率も、つぎのように、ほとんど半減している。

一九五〇年　〇・二四％

一九五一年　〇・一三%

ペスト流行の可能性を減らすため、中国東北ではたえまなくネズミ退治の運動をやつており、一九五一年だけで三千五百万匹のネズミをとつた。

九、ワクチンの生産——委員会は、湯飛凡博士の指導する中央生物製品研究所を参観した。

中央生物製品研究所は、政府の衛生部に責任を負つており、一九四六〜四七年に設立されたが、現在では大きく拡張されている。同研究所は、中国各都市に七つの支所をもつており、北京にあるのは中央研究所である。同研究所には、七〇〇〜八〇〇人の従業員（そのうち技術者は約五〇〇人）が働いている。生物製品研究所は、北京西部の郊外に動物飼育場をもつており、また、自分のガラス工場ももつている。その科学的水準は最高である。同研究所の主なしごとは、ワクチンの製造と検定である。なかでも痘苗の生産高がきわめて大きいのは、当然である。ふつうの痘苗のほか乾燥痘苗もつくつており、これはアンプルに密封してある。

このほか、大量生産しているワクチンには、腸チフス、パラチフス、コレラ、百日咳、発疹チフス（受精鶏卵で培養）がある。

カチエ苗（不明）は、別棟の建物のなかで培養しており、破傷風とガス壊疽もそうである。

脳炎ワクチン（中国夏秋型脳炎に対抗する）は、ハツカネズミの脳で培養している。すべてのワクチンが、最後にはみんな、衛生部中央生物製品検定所の検定をうけねばならないことになつている。それで、管理はきわめて厳しくやつている。

中央生物製品研究所は、また血清の大量生産もやつており、さらにペニシリンとストレプトマイシンの製造もやつているが、これは現在のところまだ小規模である。

一〇、殺虫剤の生産――害虫駆除運動はおもに、化学的方法をつかわないでやつているが、しかし、DDTその他の殺虫剤の生産も、新中国では急速に発展している。これは反細菌戦と中国人民義勇軍の需要に応ずるうえで、その用途と重要性がみとめられているからである。

三

委員会は、後になつて、中国東北ではどんなふうに衛生活動をやつているか、どんなふうに細菌戦の危険にたいして斗争しているかを、みることができた。

このことには、はやくも北京停車場ででくわした。つまりどんな人であろうと、山海関の以北へ行くには、乗車するまえに、かならず予防接種証明書（それには、写真が貼つてある）を停車場で示さ

ねばならなかつたのである。山海関というのは、列車が長城線を通過する地点である。
客車はとても清潔で、どうして健康をまもり、細菌戦の脅威と斗争したらよいかを宣伝するポスターが、車内のいたる所に見られる（色刷りで、とても人目をひく）。
客車のなかには、フタのついたガラス製の容器に入れた茶がそなえつけてある。駅によつては食物を売る婦人の売子が、一列にならんで、白い上つぱりを着、マスクをかけている。（食物饅頭、鶏のまる焼、ソーセージ）などはみんな、フタのある容器に入れてあり、それをつまむときには、じかに手でやらないで、はさむ道具をつかつている。かの女らはみんな、鉄道当局の管理のもとで働いている個人商人である。
瀋陽から北京にもどつてくる途中、山海関駅で、車輛の消毒がおなわれ、一行はしばらくの間、車から下りていなければならなかつた。細菌戦がはじまつてから、車輛消毒の新しい方法が発明され、それが現在実行されている。それは短いトンネルをつくり、その四方の壁にたくさんのパイプをとりつけ、それらのパイプから摂氏二〇〇度の水蒸気を噴出し、それによつて車輛を消毒するのである。ただし、蒸気をかけては、損傷するおそれのある貨物をのせている場合には、薬剤で消毒する。客車は、ふつうの手動式噴霧器で薬剤消毒をする。

四

瀋陽では、委員会は、状態が北京とおなじであるのに注意をひかれた。つまり、清潔で、ゴミがなく、蚊がおらずハエもほとんどいない。

東北行政区衛生部副部長白希清医師は、反細菌戦のためにとられた措置について、委員会に報告してくれた。かれは、中国東北では、細菌戦がはじまつているとかれらが確信するようになつたのは、一九五二年の二月からであつたといつた。そこで、この細菌戦にたいして、すぐさま広はんな宣伝・教育活動が展開された。全人民が組織され、また、どんなふうにして細菌戦に対抗したらよいかを、みんなが知るようになつた。かれらにたいして、個人衛生の必要性が説明されるとともに、その居住地を、どのように清潔にしたらよいかが説明された。かれらはみな、飛行機または空中から落ちてくるものは、それがどんなものであろうと、すぐさまそれを撲滅せねばならないこと、また、それに手でさわつてはならないことを、心得るようになつた。かれらはみな、ネズミの出る穴という穴は、すべてふさぐことが必要であることを知つた。もしも、襲撃をうけたことが確定的であるか、またはその疑いのある場合には、すぐさま消毒がおこなわれた。この点にかんする詳細な命令は、（附録一三

をみよ）、細菌戦がはじめられたという疑いがもたれたときから、住民たちにたいし、すべての昆虫（ハエ、蚊、ノミ、など）を撲滅するように、教育した。昆虫をさがしだす活動は絶えずおこなわれた。その回数の多い少いは、細菌戦の進行状態によつて決定された。このしごとに、とくに努力したのは、学生と青年であつた。

瀋陽で、委員会は、豆腐をつくるための一つの石臼をみたが、それには近代的で、衛生的なフタがとりつけてあつた。そうしたフタなどつけていない石臼が、中国ではすくなくとも一千年は使われていたのである。それらの石臼は、二つの穴をもつた石を組合せてつくり、上の穴から大豆をそそぎ入れ、下の穴から豆漿が流れでる仕組みで、つぎつぎと水をそそいで石臼の回転を容易にするようになつている。石臼の上部にはちよつとした仕掛がしてあつて、一匹のロバを使つて、それをまわすことができる。以前には、ほこり、ロバの汚物、毛髪、それらにくつついている細菌が豆漿に附着するし、その上夏には製造ができないこともしばしばであつた。しかし、現在ではきわめて工合いのよい木のフタが発明され、ほうぼうでそれが使用されている。このフタの上部には鏡がとりつけてあつて、それによつて豆漿が容器に一杯になつたかどうかを、見られるようになつている。

瀋陽で、委員のあるものは、いくつかのふつうの労働者住宅を訪問した。そこでは、毎朝五時まで

にすみからすみまで清掃をやり掃除がすんでから、その日の野菜や果物を買いにでかける。ある家では、家の片すみに細長い、古ぼけた陶製のカメがおいてあり、それには木のフタがかぶせてあつた。われわれが聞いたところでは、これは、野菜や果物や食器を消毒するためのもので、なかにはクロール・カルク（漂白粉）溶液がはいつており、消毒するときには、それに五分間つけておき、その後さらに、果物は湯のなかで洗い、野菜は煮るのである。中国では、野菜をなまで食べることはめつたにしないが、煮るときの時間は、ふつうとても短い。とりまとめていえば、こうしたすべての保健活動がゆきわたつてきたのに、かれらのむかしながらの旧式な、ときにはとても簡単でさえある生活の有様は、すこしも変つていない。これは、中国の特長であり、人びとに最もふかい印象をあたえる。かれらは、近代化された設備をもつ家屋が建造されるまで、待つているわけにはいかない。そこで、かれらは、現在ある条件のもとで、衛生宣伝活動をはじめたわけである。そうすることによつて、問題を完全に解決できるということ、すくなくとも、今日の中国ではできたということを、この結果は証明している。

五

委員会が、トラックにのつて黒龍江省の最北部で内蒙古との境界線にちかいラハから甘南道まで、百五十キロにわたる旅行をしたとき、どこへいつても、その清潔でキチンとしていたことには思わず驚かされた。石灰をぬり、フタをかぶせたゴミ箱が、村のどの家の前にもおいてあり、きわめて簡単ではあるが、清潔な便所にはみんなフタがかぶせてあり、溝もみなキチンとなつていて、ネズミの穴もみられない。多くの村の四ツ辻には、大衆から喜ばれている黒板新聞があり、白墨で法規や警告やニュースが書いてあり、また、有害な昆虫や細菌のたくみな図解がされている。こうした掲示は、きわめて経済的であり、地方色に富んでいるばかりでなく、容易に書き換えることもできる。

委員会が知りえた多くの具体的な事実は中国東北の人民が、細菌戦に出あつたときには、どうしたらよいかを、完全に理解しており、かれらの虚をつくことは、まつたく不可能だということを、証拠だてている。委員会はこの点についてはすこしの疑いももつておらず、確信をもつている。その原因は、辺僻な甘南道での経験と、委員会がその目でみた証人たちの挙動やことばからきている。委員たちは、朝鮮との国境にちかい、遼東省の民衆と話をしたし、また、瀋陽附近の、多くの成年男女や子どもたちとも話をした。われわれが、これらの人たちの話に耳をかたむけたとき、いままでは知ることもできなかつたようなことがら——おそろしい、そして珍らしい、しかも人を感動させる抒事詩

が、目の前にそのまま展開してきた。われわれには何百人、何千人という人たちが、自製のマスクと手袋をし、手にコーリャン殻でつくつた箸のようなピンセットをもち、毎日々々かれら自身の村のなかをゆつくりゆつくり移動しながら、腰をかがめては小さな昆虫や羽を、一つ一つ拾いあげているのが目のまえに見えてきた。かれらは、こうして忍耐づよい作業をしているとき、かれらのすぐそばにまで、死がせまつてきているのだということを知つていたのである。なかには、恐しいと思つたものもいた——かれら自身そういつている——が、しかし、不平をいうものはいなかつた。

かれらは、かれらの職責を熱情的にはたしているときには、政府の合理的な指示を熱情的に遂行して、空から投下されたすべての物体を一掃し、昆虫や羽毛や齧歯動物をとらえ、容器を捜しているときには、恐怖を忘れている。いいかえれば、かれらは、いままでも、またいまでもなお、人民に奉仕することに、心から甘んじており、その決心をかためているのである。

六

国際科学委員会は、北京市と中国東北の、衛生措置と衛生教育を視察したのち、まつたくの無条件で、つぎの意見に賛同するものである。

一、今日、中国では、偉大な運動がおこなわれていて、個人と社会の衛生を促進している。この運動は、五億の人民の心からの支持をうけており、このような大規模な衛生運動は、人類の歴史がはじまつてから、はじめてのことである。

二、この運動は、はやくもその効果をあらわしており、伝染病による死亡率と発病率を、大きく減少させている。

三、われわれのみたところでは、このような民族を細菌戦によつて滅ぼそうと試みることは、犯罪であるばかりでなく、まつたくのムダ骨折りである。

中國のキリスト教會と細菌戦

カンタベリー寺院副監督　ヒユーレット・ジヨンソン博士

宗教というものは、ときどき、ずるい人間のたくらみに奉仕する。それが、いまほどはげしいこと

はないのであつて、戦争屋や金融独占家どもは、もともとキリスト教の倫理的道徳を少しも必要と感じておらず、もしこの道徳がかれらの利益のじやまになることになれば、なさけ容赦もなくそれに反対するのであるが、かれらは今日自分らの支配している新聞やラジオや映画などで、キリスト教徒がソ連、東欧諸国、それに中国で、重大な迫害をうけているという叫びをあげている。かれらは、イギリスやアメリカの人民が宗教を尊んでいて、もしキリスト教徒を迫害するものがあれば、それにたいする反対運動に参加する心構えのあることを知つている。そこで、「諸君の宗教は存亡の危機に面している」とか、「諸君の自由は存亡の危機に面している」とか、またその結果として「脅威に抵抗するために歯まで武装せよ」などという叫びをあげてくるのである。

それで、わたしがかつてソ連や東欧諸国に行つてやつたように、そういう非難がうそかほんとかたしかめ、実情がどうなのかを中国にいつて現場でしらべてみることが必要になつてきた。だから、わたしの中国旅行の計画はひじように広い範囲におよんだ——北京、漢口、長沙、広東、抗州、上海、沙市、南京、蚌埠、天津、瀋陽（奉天）などと。ゆくさきざきで、監督派、組合派、メソジスト、バプチスト、YMCA、長老派、ローマ・カトリツク派などなど、たくさんのキリスト教会の宗教的指導者に会つた。あるときは、アングリカン教会で説教したり、またあるときは上海の聖カトリツク教

会をたずねて三人の僧正にあい、また北京のメソジスト教会、広東のバプチスト教会、その他をたずねてあるいた。

わたしは、ゆくさきざきでローマ・カトリック教会の指導者もまじえて、キリスト教の指導者と長い時間会談した。その手はじめは、組合派の牧師で華北キリスト教連盟の書記長であるP・H・ウォン師が議長になつて北京でひらいた三時間の会談であつた。この会談には、新教教会の十八人の管理者や宗教的指導者が出席したが、そのなかにはT・H・Y・リン監督、メソジスト派の牧師、YMCA（キリスト教青年会）やYWCA（キリスト教青年婦人会）や救世軍の指導者もまじつていた。

みんな自由にまたざつくばらんに、ときには大きな熱情をもつて話しあつた。この会談の結果、わたしは、これらのキリスト教指導者が勇敢であり、進歩的であり、かれらがいままで経験したどんな生活よりも、かれらが説教しているような生活にむしろ近い、中国のいまの社会生活を歓迎しているのだという印象をうけとつた。上海のP・リンデル・ツエン監督は、さいきんのランベス（カンタベリー大監督の邸宅）会談のときカンタベリーであつたことのある人であるが、のちにこの人が上海でわたしに話した言葉でいえば、「国民党の支配下にあつた頃よりも、いまでは悪に反対して、不正直またはそれに似たものに反対して、公然と話すことが容易になりました。いまこそ、わたしはわたし

の心を打ちあけて話せます。しかし、あの頃は、毒にも薬にもならない題目をえらんで、その題目についてばくぜんとしたことをしやべりまくつていたものですが、それ以上のことをするのは危険だつたのです。」

中国のキリスト教会には、外科手術が必要であつたが、もはやそれをやつたということを説明してくれた。この外科手術についてかれらはすこぶる正直にはなした。そして、Y・T・ウー氏はあとでその外科手術の実状をくわしくわたしに話してくれた。ウー氏は全中国のYMCA文書部の執行書記を三十年間つとめてきた人で、アメリカのコロンビア大学とユニオン派神学校を卒業しており、一九五〇年六月のさかんなキリスト教改革運動をはじめたキリスト教指導者の一人であり、いまではその改革委員会の議長をつとめている。この改革委員会はいま中国のキリスト教会の指導権をにぎつている。

傳道と帝国主義との結びつき

ウー氏は、中国のキリスト教と西欧帝国主義とのあいだにある緊密な結びつきについて、そのあらましを話してくれた。この結びつきは、しばしば無意識的なものではあつたが、それでもやはり結びつきはほんとにあつたのであり、それは一八〇七年にキリスト新教が輸入されていらい存続してきた。

この結びつきは、一世紀半のあいだつづいてきているし、現在のアメリカの伝道文書は、伝道運動こそ政治的経済的侵略の文化的先鋒であると、きわめてはつきりと書いている。「人民中国誌」のいぜんの号で、ウー氏は伝道活動のなかで見られる帝国主義の活躍を歴史的にえがいていた。ふつうのアメリカ伝道家は、すこぶる正直であつた。ウー氏がえがいたものによると、かれらの態度はつぎのようであつた。

「アメリカ文明とアメリカ式生活は、世界でいちばんいいものである。それがそうであるのは、全部ではないにしても、おもにそれがキリスト教的であるからであつて、それを――中国と世界に――あらゆる費用をおしまず、おしつけまたひろげねばならない。アメリカ人民のこの貴い財産を脅威するものは、アメリカ人民ばかりか、キリスト教もふくめた全世界の敵である。そういう敵があらわれたところでは、できれば平和的な手段で、しかし必要とあれば戦争で、それを一掃せねばならない。こういう仕事をやりぬくのが、伝道者の聖なる使命なのである。」

こういう考えにそまつているので、とウー氏は議論をすすめる、伝道者たちは帝国主義的侵略計画にぴたりとはまりこんでゆく。伝道者は、近代的設備をそなえた庭園の構内にすむ。そして、名目上そうでないとしたら、事実上かれの教会や教団のボスである。というのは、かれがそれらの団体の資

金を牛耳つているからである。資金は、その団体の政策といつしよに外国から送つてくる。

中国のキリスト教が必要としていた外科手術というのは、中国の教会を西欧帝国主義からきつぱりと切りはなすことであつた。これは中国教会が財政的にまた組織的に自分自身の足でたつことを意味した。

これは中国教会としてはたしかに大手術であつたが、中国教会はこの手術で生きのび、わたしの考えでは、それから利益をえた。

教会への政府援助

中国政府がキリスト教会やその宗教活動を少しでも迫害したというのは、まつたくのうそである。共同綱領、つまり新中国の基本法の第五条は宗教の自由を規定している。外国伝道者は、希望とあれば中国に残つてもさしつかえない。多くの伝道師がそうしているし、たとえば、わたしの友人スタイン博士は抗州にのこつている。ただし中国の法律をやぶつてはならない。

教会と外国資金とに経済的分離が実行されて、キリスト教会、とくにアメリカ渡来のものは、自分自身の資金でまかなつていくことになつた。アメリカの中国資産凍結、そして朝鮮戦争がさらにそれ

を決定的にした。それを機会に教会は勇敢にたちあがつた。たしかに教会員の数は、三分の一ちかくもへつた。しかし、はなれていつた教会員は、ただ物ほしさのために、よりあつまつていただけのもので、そういう人たちは〃めしクリスチャン〃とよばれている。そういう人がはなれていつたのは、教会をよわめるかわりにつよめた。政府は寛大な援助をあたえてくれた。教会の建物や牧師館は、その必要のあるときは、免税にされた。キリスト教会は、それで生きのびた。

中国のキリスト教改革運動は、そういう事情から生れてきたのであるが、それがはじまつたのは一九五〇年七月二十八日で、そのとき四十人の中国キリスト教の指導者は、新中国のキリスト教の任務について声明をだした。これは、たちまち各派のキリスト教指導者千五百二十七人のさんせいをうけた。これらの人はクリスチャンの仲間につぎのことを要求した。

一、中国の新基本法、つまり共同綱領を支持すること。

二、教会のなかにある帝国主義の影響を清算し、反動勢力が教会を利用しようとするたくらみをふせぐこと。

三、外国人や外国資金にたよるのをやめて、自治と自主財政と自主的布教を方針とする中国教会をきづくこと。

朝鮮侵略と中国資産の凍結、それにこんどは細菌戦争が、帝国主義とのさいごの結びつきをたち切つた。中国キリスト教会は、ついに自分の足で独立した。そして、みんながわたしに指摘してくれたように、じつにこのことのおかげで、中国教会を一般の同情から切りはなしていた障壁がとりのぞかれたのである。わたしはまず北京の会談で、そういうことをたくさんまなんだ。そして、広東から奉天、杭州から、漢口までのあらゆる都市で、教会指導者と会見するごとに、じつにたくさんの資料をあつめた。

たとえば、わたしは、これらの問題について、P・リンデル・ツェン監督と長いこと話しあつた。かれは親切なことに、われわれの話し合いの要点を一つの手紙にまとめてくれたが、そのなかからつぎの一節を引用しておく。

宗教の自由という問題については、共同綱領ではつきりとまたしつかりとのべてありますので、人民は信教の完全な自由をもつています。この原則にもとずいて、キリスト教会は自主的財政、自治、自主的布教という問題について教会改革全国委員会を組織しました。……河南教区では、二週間まえ、教区の教会を拡大する必要があつて、二人の助監督を任命しました。……さいきんは、漢口、河南、安徽の教区で新たに牧師が任命され、教会が前進している兆候はたしかに

あります。……

ほかのたくさんの資料からも、わたしはこれとおなじ証言を引用することができるが、いまはただ元イギリス監督派伝道団の一員であつた人の手紙を引用するだけで十分である。マイケル・チャン監督はわたしにあてて書いている。

福建省は、中国のどこよりもいちばん多くの教会と信徒をもつているといえますが、福建のキリスト教徒も、過去百年のあいだ資本主義と帝国主義の有害な影響をうけていたことはいうまでもありません。それで、われわれはいまそういう影響をみんなぬぐいさるために、中国人民に属する教会と、中国人民のほんとの幸福のために働く活動家、自治と自主財政と自主的布教を方針とする教会をつくりあげるために大きな努力をはらつています。……福州にある七つのキリスト教徒の団体は、みんなこの改革組織にはいつて、協力しあつています。

細菌戦争の眞相

中国のキリスト教会が、資本主義的・帝国主義的なアメリカとの、くされ縁をたちきつたいろいろの原因のうち、とくにめだつていて決定的なのは、もちろん、アメリカが朝鮮にだけでなく中国にた

いしても、細菌戦争をあらたにやりはじめたということである。

そして、まさにこの点で、中国のキリスト教会は、平和のために独特の貢献をすることができる。というのは、一般にイギリスの公衆、それに教会の指導者らは、わたしが去る五月イギリスを出発するときには、アメリカ軍が細菌戦をやつているという主張を、信じていなかつたからである。「あれは共産党の宣伝だよ。アメリカにそんな怪しからんことがやれるものか――」と、大部分の人はそういつていた。

そこで、中国のキリスト教指導者が、この問題について、どういう意見をのべるかが大切であることを、わたしは知つていたので、地方の教会指導者が細菌戦争にたいしてどんな態度をとつているかを、旅さきの町町でとくにしらべてみた。まず北京を手はじめにして、中国東北区の細菌攻撃の中心地瀋陽（奉天）にゆくまで、その調査をつづけた。

わたしは、いま、中国のキリスト教徒からイギリスのキリスト教徒にあてたたくさんのメッセージをもつてかえつたが、それらはみんな、中国のキリスト教徒と力をあわせて、この前例のない悪業を止めさせろということを要求したものである。「キリスト教文明」をまもるという口実のもとで、中国人種を一気に根絶する努力がやられているのである。むかし、数億の中国人民大衆のほんの一かけ

らを病気からすくうために、中国に医療団をおくつてきた「キリスト教文明」は、いまでは病菌をばらまいて、中国人民全体をみなごろしにしようとしているのである。

そういう脅威にたいして、中国のキリスト教会は、絶対的に中国人民全体と団結して、抵抗をつづけている。はたして細菌戦がやられているかどうかについては、中国のキリスト教界では、かげほどの疑いももつていない。そのことは広東でも奉天自体でも明らかであつた。しかし、わたしは、わたしの主張が真実であることを立証する文書をイギリスにもつてかえつた。そのうちのいくつかを引用させてもらいたい。

P・リンデル・ツエン監督は書いている。

細菌戦争の事実について。わたし自身、朝鮮にいつたことはありませんが、アメリカ軍のいちばん非人道的で、非キリスト教的なこの犯罪をしらべるために、朝鮮と中国東北にいつた個人や友人や知人はたくさんあります。しらべにいつたこれらの人たちのある者は、蠅や蚊や蜘蛛その他の昆虫が、ふつう、そういう昆虫がいるはずもない季節に、キラキラ光る雪におおわれた地面を、群をなして動いているのを見ました。その上、落ちてきた昆虫のうちのある種のものは、もともと朝鮮のその地方にはいなかつたものです。その調査中に、これらの人のうちの幾人かは、アメリカ軍がそ

ういう昆虫をじつさいに落しているのを見ました。それらの調査者のなかでは、組合教会のP・H・ウォン師という一人の牧師、李徳全夫人(なくなつたクリスチャン将軍馮玉祥の未亡人)、それに土曜日再臨派病院のC・C・シン博士を知つています。これらの人たちの誠実さは、疑う余地がありません。それで、これらの人の報告は、信頼できるし、うそいつわりのないものとして、一般に受けいれられているのです。

わたしはT・C・ウォン博士に会つたことを、ここにつけくわえておこう。かれはいま、華北キリスト教連盟の書記長であり、リンデル・ツエン監督がかいている点をくわしく話してくれ、そしてかれ自身が直接細菌を見たこと、それらがアメリカ飛行機から落ちてきたものであることを説明してくれた。

リンデル・ツエン監督の手紙をつづけよう。

わたしには一人の息子があつて、中国東北区の工科大学で物理学をおしえています。その息子の嫁が、市民はアメリカ機の落した虫取りにいそがしいと、二回ほど書いてよこしました。

もう一つ証言をつけ加えれば十分である。それは、杭州のキリスト教会がわたしにもつてきたもので、この市の各派教会の指導者二十五人が署名した文書である。それはウォン牧師の証言を再び引用

し、また二人のアメリカ捕虜――かれらはこの二人の捕虜の長い手紙をよみ、北京ではこの両人の声をきいた――の証言を引用して、つぎのようにいい足している。

クリスチャンの医療活動家の多くは、身を投げだして、愛国的な防疫戦争にはせくわわっています。われわれはみんな、世界平和と人類の威信のために、細菌戦争に反対する斗争に全力をつくす用意があります。

手紙は、つぎのようにのべて結論にしている。

どうぞイギリスのクリスチャンに、われわれ新中国のクリスチャンは人民解放の大革命運動に、いままでよりも、もつとはつきりと、福音の光明を見ていることを知らせてください。

われわれは、撫順競馬場や撫順と瀋陽間の農場の現地で、寒い三月というのに雪のうえにちらばつていた奇妙な昆虫の群れを見つけた人たちの、単純な直話をきいた。また、わたしにいちばん感動をあたえたのは、ヤン・ヘオ・ツンという上海の長老派伝道団の若いクリスチャン婦人の話であつた。かの女はいま奉天にすんでいるが、現地――つまり瀋陽の住宅区地域の氷のはりつめたテニス・コートに呼びだされたのである。かの女は、異常で未知な種類の奇妙な昆虫をあつめる手伝いをしたのであるが、それらの昆虫は、何としても自然的でない方法でそこに到着したのであり、二件の脳膜炎を

ひきおこし、二人の子供にひきつけをおこさせて死なせた。病菌に感染したこの子供たちの頭脳は、付近の病院に注意ぶかく保存してある。

この話はたつた一つの例にすぎないが、細菌攻撃についての話はぜんぶ、長時間われわれと話しあつた瀋陽の宗教的指導者がみんな保証し、また確認した。

中国キリスト教会東北区会議の書記長スン・ペンシ師は、その辺では見かけたことのない蠅を、しかもふつうでは蠅などあらわれる季節でもないときに、自分の庭で見つけたことを、とくに話してくれた。それで付近の学校では学生と先生を組織して、この異常な時期にあらわれたこれらの奇妙な蠅の蠅狩りをやつた。

中国キリスト教会のウォン・チエン師、これも中国キリスト教会のクー・チンクアン師、瀋陽地区のローマ・カトリック改革運動委員会議長のハン・シーチ氏、瀋陽地区のローマ・カトリック改革運動委員会の副議長チュー・ペンイエン嬢らはみんな、中国東北区の細菌戦争のおそるべき真相と野獣的な性格について証言をしてくれた。

この細菌戦争こそは、まことに、イギリスとアメリカの、キリスト教会にたすいる一つの挑戦なのである。